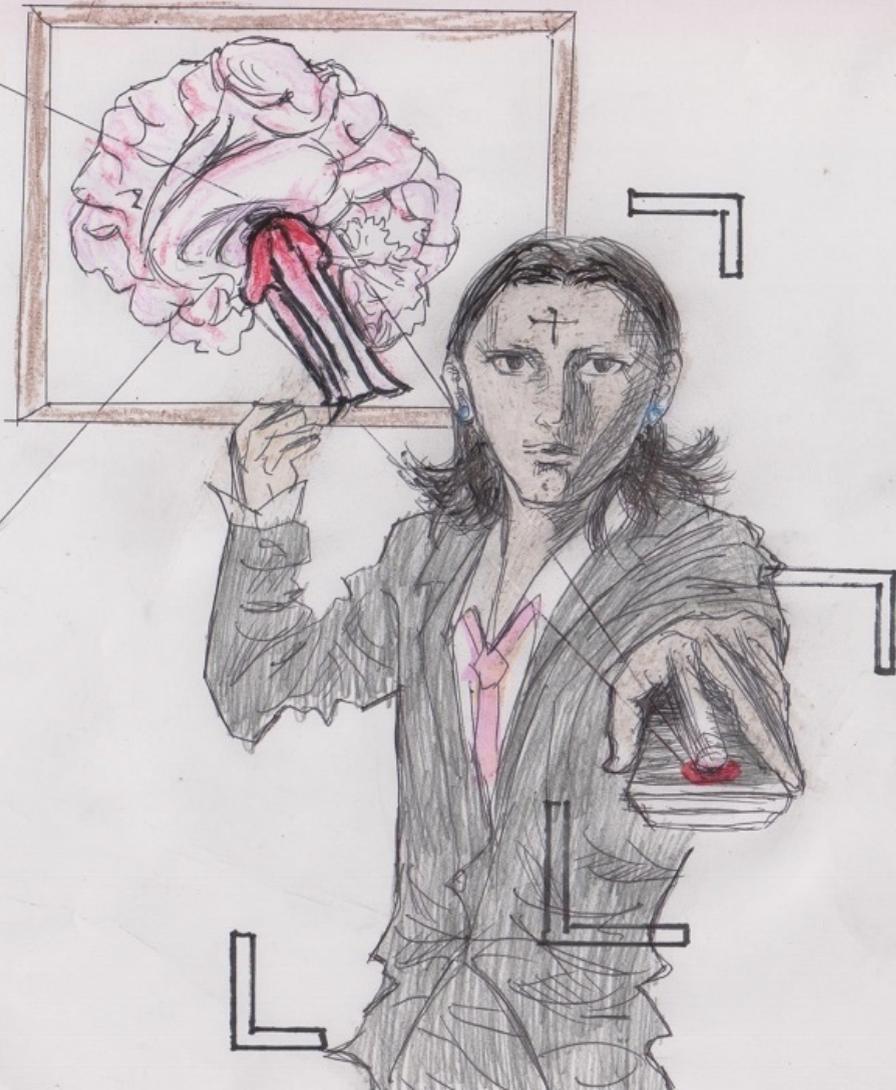


自我・com



ともなりたかひろ

献辞

――すべてのライト・ノベルの作者・読者と、

――すべての「有名になりたい」という「現代の病理」に罹っている、若者へ。

序章

あなたの住む家の庭には、一つの「墓石」がある。

その「墓石」の「墓碑銘」として、

『名もなき救世主の墓　〈君は私と同じである〉　――あなた方に名前を与えた救世主より』

と刻まれてある。

さらに、その「墓石」の「裏面」を見てみると、

「――私の命令に従うな」

「――この文を含め、裏面のここまでの文は、全て虚偽である」

という2つの文章が刻まれており、よく見ると、「墓石」の「裏面」の一番右下の位置に、ごく小さな文字で、

「――この私の真意を知りたければ、この墓の下に埋まっている手記を読め」とある。

第一章 『分類』の国 〈ライト・ノベライズ王国〉

この〈ライト・ノベライズ王国〉の最南端にある、〈タブラ・ラサ村〉の宿屋は〈クラスタ亭〉と言います。

その日、三人の村の若者が、その〈クラスタ亭〉四階の一番右の部屋へ集まると、猛ダッシュで一目散に階段を上がっていきました。「ちょっと、待ちなさい」という、〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオータル〉の制止の声を無視して。

この〈クラスタ亭〉の一階は、まず中心にフロントがあり、右手にレストランフロアがありました。外観ののぼりには、

『〈勇者様ご一行〉ご来訪記念！ 〈勇者様ご一行〉が私たちの村に来る6月1日のみ、ランチ・ディナー込みの宿泊、全て500スケールでご提供！』

などの宣伝文句が、デカデカとした文字で書かれており、その旗は風にたなびいておりました。

いつもは、一日一人、二人ぐらいが泊まる安宿屋なのですが、なぜかしら、ここ数日の〈クラスタ亭〉は大盛況となっております。

理由は、たった一つでありました。

一つは勿論、〈勇者様ご一行〉がこの〈タブラ・ラサ村〉へ、〈王女様〉と共に〈魔王〉を倒し帰還した記念に、凱旋パレードに来る、というビック・ニュースからでした。

さらに言えば、その昔、この〈クラスタ亭〉を営む宿屋の亭主である〈無駄口を叩かない寡黙な亭主であるディシプリン〉は、昔は〈学者〉として名を馳せた者らしく、一時は〈ライト・ノベライズ王国〉の〈王宮学者〉として城に召し使われ、〈王女ジェンシーの教育係〉を任されていた一時期があったらしく、それこそ当時は有名人の一人であったわけで、その当時のネーム・バリューが多少なりとも今でも残っているらしく、そういう意味では今回の〈勇者様ご一行〉の関係者の一人とも言えるわけで、その過去のネーム・バリューからこの〈クラスタ亭〉の客足が伸びる、というわけなのでした。そんな偉大な過去を持つ〈無駄口を叩かない寡黙な亭主であるディシプリン〉である父を持った主人公が、何を隠そう、彼、キルケ・ゴールなのであります。

さて、現在、一階のレストランで昼飯を食べているものは、村の〈パトロール隊のシニフィエ〉と、〈橋工事員のシニフィアン〉です。〈パトロール隊のシニフィエ〉には、〈宝くじ売り場の受付のフォノ・グラフ〉という妻がおります。一方、〈橋工事員のシニフィアン〉は酒がとて好きであり、しょっちゅう仕事を途中で抜け出しては、こうして〈クラスタ亭〉に一人やって来て、酒をたしなんでいるわけですが、いつなんどき上司である〈棟梁のソシュール〉に発見され、どやされるかわからない、という恐怖があるわけですが、どうせいくらこうしたサボリという失態を犯しても、まあ大丈夫だろう、と思っています。なぜなら、今工事している〈ためいき橋〉の改装工事はもう完成間近だから、俺なんていなくたっていいだろう、ぐらいに思っているからなのでした。

しばらくすると、〈[i]ためいき橋〉の改装工事を担当している〈棟梁のソシュール〉と〈棟梁のジッポが一番信頼を置いている建築士ユング〉が、汗だく、汚れた下着姿のまま、〈クラスタ亭〉の扉を勢いよく開けて、〈無駄口を叩かない寡黙な亭主ディシプリン〉に向かって、大声で叫びました。

「おい、〈ためいき橋〉が完成したぞ！ 酒をもってこい！」

〈無駄口を叩かない寡黙な亭主であるディシプリン〉は目を輝かせて、

「それはすばらしいですね！ これで、明日の〈勇者様ご一行〉の凱旋を迎えられます！」「ああ！ 満点だ！ だが、……」と言い、〈橋工事員のシニフィアン〉の方を向き、「こいつは減点だな。仕事の途中で帰って、こんなところで、管巻いてやるんだからなあ」

〈橋工事員のシニフィアン〉は、

「ひッ!! ちょっと、勘弁してくださいよお〜っ!!」

と叫びました。でも、その後、〈棟梁のソシュールが一番信頼を置いている建築士ユング〉が微笑しながら、

「そうは言うけど、〈棟梁のソシュール〉さん。どうせ、クビにはしないんでしょ？」

と〈棟梁のソシュール〉に言いました。〈棟梁のソシュール〉は、はあ、とため息を吐きながら、

「—そりゃそうだよ。だって、こいつは、〈橋工事員〉だからな」

四階にいるキルケ・ゴールは、階下の騒がしい雰囲気を感じて、廊下に出て、難しい顔をし、彼は、次のように思いました。

(なぜ、この村は、老人ばかりなのだろう?)

そんなことを考えていたとき、四階の一番右の部屋の中から、〈剛毅なデカルト〉の大声が響き渡りました。

「おい、キルケ・ゴール!! もうすぐはじまるぞ、〈勇者チャンネル〉が!!」

そう呼ばれたので、キルケ・ゴールは、廊下からそそくさと部屋内に戻りました。

――部屋に入ると、〈剛毅なデカルト〉と、〈屈折したスピノザ〉、二人の友人が、〈テレビジョン〉に魅入っていました。

「やっぱり、〈勇者様ご一行〉の凱旋パレード前日とあっちゃ、違いますな」

と〈剛毅なデカルト〉ははきはきとした口調で言い、キルケ・ゴールの方へ振り向き、皮肉げな目線を、キルケ・ゴールに向けました。

「……ミーハーだよ」

キルケ・ゴールはそう言って、〈剛毅なデカルト〉の言葉を、苦々しげにかき消しました。

〈卑屈なスピノザ〉は、ケツ、と嘲笑しながら、

「そりゃ、そうさ。〈道具屋『ルーズ・ブルース』のおばちゃんレビナス〉なんて、っこの〈タブラ・ラサ村〉にかけて、〈タブラ・ラサちゃん〉とかいう〈ゆるキャラ〉を作って販売してんだぜ? でも、そういうもんさ。みんな、浮足立っているけども、自分の役割に従っているだけなんだから」

「おい!」と〈剛毅なデカルト〉は、〈卑屈なスピノザ〉の言葉を遮るように叫び、〈テレビジョン〉の画面を指さし、「はじまったぞ!」

「え、本当か!」と〈卑屈なスピノザ〉は、〈テレビジョン〉をじっと凝視しはじめました。

――そこに映っているのは、明日、この〈タブラ・ラサ村〉にやってくる〈勇者様ご一行〉が、隣の村の〈ライブニッツ村〉に凱旋し、多くの人々から歓迎を受けている映像でした。

それを見て、〈卑屈なスピノザ〉は、

「あの〈ライブニッツ村〉にしては、なかなか奮発した飾り立てじゃないか」

と言いましたが、キルケ・ゴールは目をひそめて、

「……だからって、あの飾り立て具合はないだろう。特に、あの〈サーカス団〉はひどいぜ。正直言って、ダサイ」と批判しました。

「仕方ないじゃないか。〈ライブニッツ村〉は、ここと同じ〈田舎村〉なんだからさ」と〈剛毅なデカルト〉はそれに反論しました。

「……いや、そういう問題じゃない」とキルケ・ゴールは反発し、

「君たちは疑問を抱かないのかい? 彼ら〈勇者様ご一行〉は、僕らが子供の頃からもうずっとそのメンバーが変わっていない。もう、新しい世代の〈勇者様ご一行〉が出現したっていいはずじゃないか」

〈剛毅なデカルト〉は、キルケ・ゴールの真面目な言葉にプツと笑い、

「なんだ、おまえ、〈勇者〉にでもなりたいのか? 〈宿屋の息子〉であるおまえが」

と言いました。

「……いや、そういうことではないんだが…。――じゃあ、逆に聞くけど、君は一生〈道具屋の息子〉で人生満足なのか?」

〈剛毅なデカルト〉は、

「変なこと、聞くな、お前は。最近のお前は、ほんとうに変だぞ。不満なんかあるはずがないじゃないか。だって、俺は〈道具屋の息子〉なんだからな」

その答えを聞いて、キルケ・ゴールは沈黙し、今度は〈卑屈なスピノザ〉に向かって、

「……君は、このままでいい、と思うのかい? 〈卑屈なスピノザ〉」

と詰問しました。

「――こればかりは、〈剛毅なデカルト〉と同意見です。さすがに、愚問ですよ。僕は〈防具屋の息子〉であって、それ以上でも、それ以下でもありません。キルケ・ゴール君、君も〈宿屋の息子〉であって、それ以上でもそれ以下でもありません。馬鹿らしいですよ」

そう〈卑屈なスピノザ〉に一蹴され、キルケ・ゴールは、こいつらに何を言ってもだめだ、と思い、それ以上何も喋りませんでした。

――さて、ここで、ここまでのこの文章を読んでいるあなたに、一つ、明かしておかなければならないことがあります。

ここまで読んできて、あなたは、多くの違和感を覚えたことでしょう。

例えば、なぜ、キルケ・ゴールを除く、他の登場人物たちが、自分の存在のこと、あるいは、世界のあり方について、何の疑問も持たないのか？

あるいは、私がなぜ、わざわざ〈卑屈なスピノザ〉などと、ヤマカッコを用いて彼らを規定して記述しているのか？

その答えは至極単純、――この〈ライト・ノベライズ王国〉という「世界」そのものが、すべてある創造主による『分類』によって創り出された「世界」だからです。

ゆえに、例えば〈橋工事員のシニフィアン〉と『分類』された人は、一生、その『分類』によって規定されていることに気づかず、その『分類』どおりの言動を取るのです。

そう考えると、昼間から酒を飲み、職務怠慢していた〈橋工事員のシニフィアン〉が、「そうは言うけど、ソシユールさん。どうせ、クビにはしないんでしょ？」という通り、結局、〈橋工事員〉として「決してクビにはならない」ことにも、理屈が通ってくるでしょう。それもひとえに、彼が〈橋工事員〉としてあらかじめ『分類』されているからなのです。

極端な話、「この世界」においては、〈単なる石ころ〉でも、それが〈お姫様〉と一旦『分類』されれば、人々は〈単なる石ころ〉を〈お姫様〉だと思って疑わなくなるのです。

一事が万事、「この世界」は、このような『分類』で出来ております。

ですから、大きな部分でいえば、〈勇者様ご一行〉がなぜ〈勇者様ご一行〉なのか？ あるいは、もっと小さい部分で言えば、なぜ自分たちの村である〈タブラ・ラサ村〉の名前がなぜ〈タブラ・ラサ村〉というのか？ あるいは、〈勇者〉、〈魔王〉、それらが「存在」する本当の「起源」を、実は誰も知らないのです。

そう規定してみると、また違う疑問が浮かんでくるでしょう。

そう。なぜ、主人公たるキルケ・ゴールだけが、ヤマカッコでは表記されていないのか、さらには、彼だけが「この世界」の異様に疑問を持っているのか、言い換えれば、なぜ彼だけが「この世界」の『分類』に疑問を持っているのか？

が、しかし、別にこの秘密は、この手記の「真の目的」ではなく、大したことでもないのです、この場でさりと答えてしまいますが、――彼は『分類』から「外れて」いる者なのです。

そして、この世界の『分類』から「外れて」いる者が、彼の他にも少数だが存在する、という事実も頭の中に入れておいて下さい。

たとえば、――次のような、この〈ライト・ノベライズ王国〉の〈お姫様〉も、その一人なのであります――。

場の雰囲気が悪くなりましたので、リルケ・ゴールは話頭を転じ、「変なこと言って、悪かった。きっと、明日、〈勇者様一行〉がこの〈タブラ・ラサ村〉に来るから、内心、動揺してんだろうな。もう、やめよう、この話題は。変えるか、〈テレビジョン〉の〈チャンネル〉を」

そう二人に言って、〈テレビジョン〉の〈チャンネル〉を〈リモコン〉で〈王室チャンネル〉に変えました。

「あ、〈お姫様〉だ！」

と言って、〈剛毅なデカルト〉と、〈卑屈なスピノザ〉の二人は、狂喜しました。

画面に映し出されたのは、この国〈ライト・ノベライズ王国〉の〈王様〉と〈王妃様〉と〈お姫様〉でした。今回の、〈勇者ご一行〉が、我が子である〈王女様〉を引き連れて、冒険に出て、〈魔王〉を倒し、この〈ライト・ノベライズ王国〉を守ってくれた、ということで、〈国民〉の前で、〈王様〉がその〈勇者様ご一行〉の業績を称えると共に、「我が〈ライト・ノベライズ王国〉に、再び平和が戻ってきた！」という祝辞を述べているのです。

「……やっぱり、笑ってないな」

とその映像を見ていた〈剛毅なデカルト〉は、ぼつりと呟きました。

確かに、その演説をしている〈王様〉と、その横にいる〈王妃様〉は笑っているのですが、後ろでモジモジしている〈お姫様〉は、ほとんど石ころの如く、なんの表情もないのです。

〈卑屈なスピノザ〉は、ケツと言って、
「――まあ、こうして国民全員に監視されているは、自由も何もあったものではないからね、仕方ないさ」と言ったあと、はあ、とため息をつき、「それに、噂では親の〈王妃様〉がアレらしいからね」と吐き捨てるように言いました。

――〈お姫様〉が笑わない、ということは、すでに〈テレビジョン〉の〈王室チャンネル〉を通じて、国民全員に知られていました。

その「笑わない理由」は、逆に、人前ではよく笑う〈王妃様〉、つまり、母親との関係にあるのではないか、というのが、通説として『分類』されておりました。

その通説の詳細を述べますと、〈王妃様〉は、元々〈一般人〉の〈女ジャーナリスト〉だったのですが、あるとき〈王様〉に口説かれて、流されるままに〈王室〉に入ることとなりました。最初の頃は円満な結婚生活だったのですが、徐々に、〈王妃様〉は、〈王室〉の環境に適合出来なくなりました。それもそうでしょう。元々、バリバリの仕事大好きな〈女ジャーナリスト〉だった人が、〈王室〉の、かしまった閉鎖的な暮らしをしなくてはいけなくなったのですから。

そして、そんな〈王妃様〉の精神的な不安は、娘である〈お姫様〉が生まれてから、いよいよ本格的に発露されることとなりました。自分のことでさえ持て余している〈王妃様〉が、子供である〈王女様〉の面倒など見れるわけがなく、そんな不甲斐ない自分への自責の念やら、後悔の念やらが、異様に絡まり、結果、〈王妃様〉は〈精神障害〉となってしまったのでした。

世間に対しては、相変わらず、「笑顔」で「元気な王妃様」を演じていましたが、その実、〈王室〉内では、夫である〈王様〉と激しく口喧嘩したり、健康に良い代わりに質素すぎる昼食を運んでくる〈宮廷料理人〉に対してヒステリックに怒鳴ってみたり、――その感情の激しさは酷いものでした。そして、そんな母親の姿の一部始終を、娘である〈お姫様〉は、しっかりと見ていました。

その結果、〈お姫様〉は、「お母様みたいな、感情的な人間にはなりたくない」と内心反発心を固めたようで、現在のように、母親に抵抗するかのようになり、まったく笑わなくなった、というわけなのです。

――という、この〈王室〉内の「物語」の「設定」自体も、『分類』によって「設定」されたものに過ぎません。

ゆえに、〈お女様〉を連れ立った、〈魔王〉を倒す旅も、「安全な旅」に過ぎない、というわけであります。

考えてみてください。笑わない〈お姫様〉を「笑わせる」ために、〈勇者様ご一行〉と共に〈魔王〉を倒す「安全な旅」に動向させるも、結局、〈お姫様〉に笑顔が戻ることはない、という「物語」の『分類』（設定）ならば、「〈王女様〉を笑わせるまで安全な冒険を続けさせる」というシステムを永遠に回し続けることが可能になりますし、従って、〈王室〉の意義も、〈勇者ご一行〉の意義も、〈魔王〉の意義も、皮肉にも自然に保つことが可能になる、というわけです。「この世界」の『分類』の力が与える制限は、決して「人物設定」だけではありません。「物語」や「過去の歴史」まで、『分類』によって規定されてしまうのです。

――さて、〈王様〉の全国民への演説につき合わされたあと、笑わない〈王女様〉は、すぐさま足早に、〈ライト・ノベライズ城〉内の自分の部屋に戻ると、

「ああ、退屈っ！ やってらんないっ！」

と吐き捨てるように言って、バタン！ と扉を閉めてしまいました。

〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉は、そんな勝手な〈お姫様〉の後を必死で追いかけて、両手に、今回の旅の戦利品である大量のプレゼントを手に抱え、扉の向こうにいる〈お姫様〉に、困惑しながら話しかけました。

「〈お姫様〉！ そんなに独りよがりな行動をしてはいけません！」

「聞き飽きたわよ、そんなことは！」

「……〈王妃様〉とご関係、この爺や、心中、察しておりますが……」

「だ・か・ら、それが聞き飽きた！ つってんのよ!! 爺やのフーコーも、お父さんも、お母さんも、国民の皆も、みんな、私が『笑わない王女様』の理由を、お母様との関係が悪化したこととして理解してるけど、本当は全然違うの！」

〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉は恐る恐る、

「で、では、なぜ笑わなくなった、というんですか？」

と質問しました。

〈お姫様〉は、

「単純明快よっ!! つまらないからよ、日常が!! 私には自由がない! どこに、笑えるところがあるっていうのよ! 私が笑わないのは、お母様のせいじゃないわ! ……はあ。ふつうの女の子なら、同世代の男の子と遊んだりできるのに…」

〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉は、〈お姫様〉の悲痛な生の叫びを聞き、内心、ナイフで心臓を刺されたかのようにショックを受け、〈お姫様〉の身の上をこの上なく不憫に思いましたが、そこは『分類』の力、〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉として、決められた言動を取らざるを得ないのでした。

「……お姫様。退屈しのぎになるか、分かりませんが、前日の、〈ライト・ノベライズ城〉にて、〈魔王〉を倒してきた、〈勇者様ご一行〉をもてなす、〈歓迎パーティー〉が行われましたよね? そのとき、〈勇者様ご一行〉ならずとも、集まったこの国の〈有識者たち〉が、〈お姫様〉に向けてのプレゼントを一杯くださったんです。——ご覧になりませんか？」

「たかがしれてるわよ、そんなのっ!! どうせ、〈高価なぬいぐるみ〉やら、〈高価なアクセサリー〉やら、そんなものでしょ? 要らないわよ、そんなもの! 私が欲しいのは自由なんだから!」

〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉は、その言葉を待っていた、という風な冷静な口調で、

「——〈お姫様〉。貴女はそう答えると、この爺や、そう思っておりました。そこで、私めは、そのプレゼントの中でも、一番、ガラクタだと思われる、一品のみを差し上げようかと思っております」

「なによ、一番ガラクタだったら、それこそ退屈じゃないっ!」

「まあ、まあ、そう言わずに。とにかく扉を開けて、一目でもいいから、見てみてくださいな」

お姫様は、かくれんぼをしているかのように、ひっそりと慎重に自室の部屋の扉を、ちらと開け、その「ガラクタ」のプレゼントを見ました。

「……なに、これ? 〈小型のテレビジョン〉?」

「それが、どうも違うらしいのです。頂いた方から聞いた話によれば、これは〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉という物だそうです」

「〈トランジスタ・テレビ〉? なによ、それ。聞いたこともない」

「ええ、さすがの私めの博識を持ってさえ、何の道具だが、見当もつきませぬ。——もう今ははっきり申し上げますが、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉なる物を献上してきたものは、凱旋パレードの際の前座を務めた〈サーカス団〉の〈団長〉でして、で、その〈団長〉たる男は、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉を献上する際、次のように仰っておりました。『一言、お姫様にお伝えください。この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉は、一見、電源を入れても、何も映らない、ガラクタのように思えますが、〈お姫様〉の工夫次第では、「貴女にとって最良の異性の友達」と出会うことが出来る一品です』と」

「私にとって、最良の異性の友達と出会うことが出来るですって!?!」

その情報を聞くや否や、〈お姫様〉の目は、好奇に満ち溢れ出しました。

「はい。私個人としましては、あんな〈サーカス団〉の〈団長〉という、社会的な信頼性が低い、彼の進言を信じる気にはならなかったのですが、……よもや〈王女様〉がそんなに食いつくとは、恥ずかしながら、思い至りませんでした」

〈王女様〉は、〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉の言うことなど上の空で、夢中でその小型の〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉の四方八方をまんべんなく見渡したあと、うわ言のように、〈お姫様のお目付け役の優しい爺やフーコー〉に向かって、

「——わたし、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉だけは、貰うわ。あとのプレゼントは、要らない」と言い、「それにしても、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉をくれた〈サーカス団〉の〈団長〉は、今、どこにいるのかしら？」

と質問しました。

「——情報によれば、〈ライト・ノベライズ王国〉の最南端に位置する〈タブラ・ラサ村〉での〈勇者様ご一行〉凱旋パレードの前座として、その〈団長〉率いる〈サーカス団〉が同行する、と聞いております」

「分かったわ! もう、どっか行っていいわよ、フーコー。大丈夫。どっかに、逃げたりなんか、しないから。あと

、「――このことは、お父さん、お母さんには、秘密だからね」

「は、かしこまりました、〈お姫様〉」

話が済んで、〈お目付け役の爺やフーコー〉が、〈お姫様〉の部屋を出ていったあと、〈お姫様〉は、はぁ、と一人ため息を吐いたあと、ぼつりと言いました。

「――普段から、本名のデリタって呼んでもいい、って、いつも言っているのに。本当に、堅物だわね、フーコーは」

〈デリタ姫〉（以下、〈王女様〉のことは〈デリタ姫〉と表記致します）は、〈お目付け役の爺やフーコー〉が部屋から出て行っていくとすぐに、部屋の端にある〈テレビジョン〉の電源を引き抜き、部屋の真ん中にある円形の座机の上にある〈テレビジョン〉本体が邪魔なので座机の下に捨て置き、ちょうど空いた机の上に、れいの〈世界最古のテレビジョン〉を置き、それに付随しているコンセントを伸ばして、電源に差し込みました。

〈デリタ姫〉は、すぐさま〈世界最古のテレビジョン〉を手に持って、電源が入っているか、確認しました。電灯ランプが「赤く」光っているので、「ほっ、とりあえずは使えそうね」と一安心しましたが、いくらダイヤル式のチャンネルをひねっても、一向に画面は真っ暗なままでした。

「ったく!! いったい、どういうことよっ!!」

と〈デリタ姫〉は、ぷうっと膨れましたが、すぐに冷静になり、〈サーカス団〉の〈団長〉の言葉、「お姫様の使い方次第」という言葉を思い出し、「――よし、やってやろうじゃないのよ」と鼻息を荒くしました。

――さて、場面は変わりました、わが主人公、キルケ・ゴールは、散々〈剛毅なデカルト〉と〈卑屈なスピノザ〉とぐだぐだと議論を交わしたのち、陽が沈みましましたので、それぞれの帰路に立つ前に、〈剛毅なデカルト〉が、「――とにかく、〈勇者様ご一行〉凱旋パレードは20時から始まる。だから、皆、20時の5分前には、村の広場に集合なっ！」

と言い、後の二人は、こくり、と頷き、約束を交わしました。

我が主人公、キルケ・ゴールは、帰路につく間に内心、次のように思いました。

――とうとう今夜、〈勇者様ご一行〉が来るっていつのか。ああ、馬鹿らしい。そんなことより、なぜ彼らは、彼らが〈勇者ご一行〉に選ばれたのか、疑問に思わないのだろうか？ 昔の人の言葉で言えば、なぜ、自分はここにいる、あそこにはいないのか、どうしてそんな問いが思い浮かばないのだろうか？

宿屋の裏口から家に帰ると、キルケ・ゴールは、すでに泥酔している様子の父親である〈ハイデッカー〉の話に長々と付き合わされる羽目となりました。

酔っ払った父親である〈ハイデッカー〉は、いつもの調子で、いつもの、〈岩ガメと石コロの話〉を、キルケ・ゴールに長々と語りました。

「――おまえな、こんな話を知っているか？ 〈岩ガメと石コロの話〉を知っているか？ あれは〈おかしい話〉だよなあ。聞きたいか？ いや、聞きたいんだろう、分かっているよ、おまえの心は。……昔、わる川べりに、大きな岩ガメが、縄張りを作って、住んでいたんだ。1匹の子ガメと一緒に。岩ガメは、その子ガメを大事にしていた。最初は、その縄張りの中には、怖い動物にいない、それはそれは平穏なものだったよ。ところが、ある日、ふとしたときに、その縄張りから、その大事にしていた子ガメがいなくなっていたんだよ。岩ガメはびっくりして、慌てて探し回るんだけど、子ガメはどこにもいないんだ。子ガメの力で、その縄張りから出るなんて不可能なことだから、その岩ガメはパニックになってしまったんだ。な？ この時点で、〈笑える話〉だろ？ ――で、その岩ガメは、自分の縄張りを探しているうちに、あるものを発見したんだ。何って、ただの石ころさ。ところが、その岩ガメは、その石コロは見つけて大喜びさ。というーのも、その石コロにも黒いブチがついていたからなんだね。岩ガメは、その石コロを発見して、『おお、我が子、発見せり!』って一安心したんだ。つまり、岩ガメは、その石コロを、子ガメと思い込んで、前と同じように、日がな餌を取りに行き暮らしていた。石コロの方も、こんな意外な事態に『どうしたもんか』と思ったが、別段、深く悩むこともなかった。なんでって？ そりゃ、石コロだからさ。――そんなことより、問題はだ、消えていなくなった、子ガメの行方はどうなったのか、って話さ。おまえも気になるだろう？ 実は、その問題の子ガメは、実は、縄張りのギリギリのところ、ずっと寝てたんだな、これが。が、しばらくして、子ガメが目覚まして、岩ガメのところへ帰ってみると、岩ガメは単なる石コロに向かって、『我が子!』と呼びかけているときたもんだ。おかげで、子ガメは出るに出れない。しょうがないから、子ガメは、誰も見えない縄張りの端っから、様子を見てることにしたんだ。縄張りの外は知らな

いし、かつ、おっかなかったし。それでな、しばらくして、……うはっはっはっ!! やっば、だめだ、笑っちゃって。おめえには悪いが、ぎゃはははは、笑い話過ぎて、おまえに話せそうもない。ぐはははははは!」

そんなこんなで、父親〈ハイデッカー〉が語る〈笑い話〉をほぼ強制的に聞かされているうちに、キルケ・ゴールは、約束の時間も忘れて、うとうと、寝過ぎてしまいました。

はっ! と思って眼を覚ましてみると、もう辺りは真っ暗でした。時計を見ると、〈勇者様ご一行〉が凱旋パレードしにくる20時をとくに過ぎており、21時30分になっておりました。

キルケ・ゴールは、しまった! と思い、慌てて外へ駆け出して、村の広場へ走って行きました。

が、やはり当然の如く、〈勇者様ご一行〉の凱旋パレードはすでに終わってしまったようで、親友の二人の姿もなく、電光の一つもない、閑散とした無人の広場が、ただただ暗闇に広がっているばかりでした。

キルケ・ゴールはそれを見てがっかりしていると、——一人の男が彼に近づいてきました。その男は、道化師の恰好をしており、キルケ・ゴールは一目見て、〈勇者様ご一行〉に追随していた〈サーカス団〉の一人だと理解し、

「……あ、あの、すいません、〈勇者様ご一行〉の凱旋パレードは?」

と真っ暗闇の中、その男に問いかけました。

その〈サーカス団〉の一人であろう男は、

「ああ、とくに終わったよ、パレードは。〈勇者様ご一行〉も去ってしまったし」

と淡々とした口調で返してきました。

キルケ・ゴールは落胆して、

「はぁ…」

とため息を吐いたあと、ふと、この目の前にいる〈サーカス団〉の一員であろう男が、一人、誰もいないこの広場に

いることを不思議に思って、

「……あの、失礼かもしれませんが、貴方も、〈勇者様ご一行〉に付随して、この〈タブラ・ラサ村〉にやってきた、〈サーカス団〉の一員、ですよ?」

と問いかけました。

道化師姿の男は、はははは、と笑って、

「そうだよ。っていうか、わしが、君の言う〈サーカス団〉の〈団長〉なんだけどネ」

とあっけらかんとした調子で答えました。

キルケ・ゴールはその返答を不思議に思い、

「どういうことですか? 一番、権力のある〈サーカス団〉の〈団長〉が、凱旋パレードが終わった今、なぜこんなところに残っているんです?」

と詰問しました。

すると、その〈サーカス団長〉は、あごの髭をさすって、

「——まあ、〈サーカス団長〉と言っても、一番、影が薄いからね。こうやって、部下たちに置いていかれるのも、日常茶飯事なんだよ。まあ、『分類』から外れているから、影が薄いのは、当たり前なんだけどね」

と言って、やはり、ははは、とあっけらかんと笑い出しました。

キルケ・ゴールは、このときはじめて、『分類』という言葉を知りました。

「『分類』? なんなんですか? その、『分類』っていうのは?」

「『この世界』の規則、みたいなものかな。なぜ、『この世界』の人々が、自分が〈勇者〉だったり、〈魔法使い〉だったり、〈賢者〉だったり、それこそ、〈宿屋の息子〉だったりするのか、誰一人として疑問に思わないのは、『分類』の力で、その『役割』以上の言動が出来ないように、規定されているからなのさ」

「なるほど。じゃあ例えば、僕が〈宿屋の息子〉なのも、『分類』の力によって、あらかじめ決められた『役割』だから、だって言うんですか?」

〈サーカス団長〉は暗闇の中で、にやりと笑い、

「——まあ、それ以上のことを言うと、『この世界』の〈創造主〉から天罰を食らっちゃうから、直接には言えないけれども、君自身、『この世界』に対して、疑問を抱いたことがあるだろう?」

と言ってきました。

キルケ・ゴールは正直に、

「――はい、あります。正直、僕の友人も含めて、なぜ、周りの人々は、自分たちの『役割』に対して、疑問を抱かないのか、いつも疑問でした」

と答えました。

〈サーカス団長〉は、ふむ、と一人頷くと、

「――その時点で、君は半分、〈この世界〉の『分類』から『外れ』かけている、ということなのだよ」

と言いました。

「？ どういうことなんです？」

「……さっきも言った通り、わしも〈サーカス団長〉という『分類』を与えられていることを知りつつも、それに対して表立って反抗できないのは、下手したら〈創造主〉によって自分の存在すら『この世界』から抹消される可能性があるから、なのだよ。逆に言えば、わしは〈サーカス団長〉という、実は、一番誰からも注目されない、『分類』を与えられたことを幸せに思っているくらいなんだ。なぜなら、少しでも『この世界』が『分類』によって成り立っていることを皆に知らせるのに、好都合な『分類』だからね。ともかく、これ以上、具体的な『この世界』に関する話はしてあげられないが、――君、〈岩ガメと子ガメ〉の〈笑い話〉を知っているかね？」

「はい、知っています。――というか、こうして寝過ごしてしまう前まで、父親からさんざんそれを聞かされていたのです」

「それを聞いて、君は、疑問を抱かなかったかね？」

「抱きました。なぜなら、――父親が繰り返し、僕に語るその〈笑い話〉には、〈落ち〉がなかったからです」

「そう。だが、それは仕方のないことなんだ。なにせ、〈オチ〉は『分類』上、『消されている』からね。つまり、この〈岩ガメと子ガメの話〉という〈笑い話〉の〈オチ〉は、『この世界』の〈創造主〉にとって、最も不都合な事実、というわけなんだ。ゆえに、〈オチ〉は『消された』まま、〈笑い話〉として、『分類』されたんだ。勿論、実を言えば、この話には続きがあるのだよ。――岩ガメが、単なる石コロを子ガメと思い込んで、一緒に暮らし始めてからしばらくして、縄張りに、お客の赤ガメがやってきたんだ。赤ガメを歓迎した岩ガメは、赤ガメに、我が子として、石コロを『我が子です』と紹介したんだよ。赤ガメは、そりゃ、面食らったさ。そりゃそうさ。石ガメの子供に、石コロなんているわけないからね。そこで、赤ガメは、思い切って言ったんだ。『我が子です、って、そりゃ単なる石コロじゃないですか』ってね。しかし、岩ガメは笑って言ったもんだよ。『おいおい、赤ガメさんよ、この石コロは私の子ですよ。だって、ここで私がずっと話していても、私の子ではないと、一度も言わないじゃないですか』ってね。赤ガメは、『そりゃ、石コロなんだから、ものも言えないだろうに』と思ったけれど、呆れて、ものも言えなかったわけ。――というね」

「……なるほど。でも、〈笑い話〉に『分類』されたことはさておくとしても、よく、そんな『この世界』の秘密に近い寓話が、『この世界』に広まりましたね。誰が、この〈岩ガメと子ガメの話〉の寓話を、『この世界』に広めたんでしょう。……もしかして、この寓話を広めたのは、あなたですか？」

〈サーカス団長〉はにやりと笑い、

「――なぜ、君はそう思う？」

と僕に問いかけました。

僕ははっきりとした口調で言いました。

「……あなたがさっき言った通りですよ。あなたが、〈サーカス団長〉という『分類』を与えられたからです。道化師というのは、基本的に、ウソつきです。そして、大抵の人々も、道化師の言うことはウソである、と思っています。――ゆえに、あなたの言う『分類』の話に沿って言えば、実は〈サーカス団長〉という立場は、〈笑い話〉という『分類』に沿いながらも、〈岩ガメと子ガメの話〉という、本当は〈この世界〉の『真実』である〈ウソの話〉を広めるのに、最も適した『分類』だからです」

〈サーカス団長〉は、またも、にやり、と笑って、

「――その通りだ」と言いました。「しかし、それを〈笑い話〉と『分類』されている、と気づく者など、ほんの少数だ。今の『この世界』でも、それに気づいているのは、君を含めて、少数しかいない、が、それでもその数は密かに増えている」

「……今、今の『この世界』、と言いましたよね？ ということは、『この世界』は、何度も繰り返されている、ということなんですか？」

「勿論そうさ！ わしなど、『この世界』の『分類』の存在に気づき、『この世界』の『真実』を後世に伝えるために、こういった〈岩ガメと子ガメの話〉の寓話を広める程度の暗躍をするのに、何度『この世界』を転生したか、分かったもんじゃない。まあ、結果として、何回も転生させられた拳句、こんな〈サーカス団長〉とかいう、ある意味得な『分類』を与えられることに成功したわけだがね」

「……さっきから気になっていたのですが、あなたは、『この世界』の『分類』の存在に気づいている輩が少数ではあるが、増えている、と仰っていましたよね？ それは、誰なんです？」

「――それは具体的には言えないなあ。が、わしの何世代に渡る功績のお蔭なのか、それとも、突然変異なのか、どちらかは分からんが、わしとは違う形で、『この世界』の『分類』という『この世界』の秘密に気づき、それを壊そうと暗躍している輩がいる、ということだけは確かだ」

それを聞き、リルケ・ゴールは俯き、

「……じゃあ、僕は、どうしたらいいんです？ 『分類』の存在を知ってしまった、この先、僕はどうしたらいいんです？」

すると〈サーカス団長〉は、持っている袋から、〈絵画の額縁〉と〈リモコン〉と〈プチ魔王マップ〉を取り出し、
「――よし、分かった。これも、それこそ何世代にも渡る『分類』に対する反抗の末の、運命か、宿命なのだろう。だから、この〈絵画の額縁〉と、〈リモコン〉と、〈プチ魔王マップ〉を君に託そう」

「？ 〈絵画の額縁〉と〈リモコン〉と〈プチ魔王マップ〉ですか？ これだけで、何が出来るって言うんですか？」

「『解体』が出来るんだよ」

「『解体』？」

「――そう。大事なことから2回言うが、わし以外にも、突然変異で、『この世界』の秘密である『分類』の存在に気づき、『この世界』のバランスを崩そう、と暗躍している少数の輩がいる。そいつらは、わしとは違う方法で、『この世界』の『分類』を『外そう』とする気であろう、とわしは思っている。君も知ってる通り、今の『この世界』の『分類』の中では、〈笑わないお姫様〉が、定期的に、〈魔王〉を倒す、という目的で、〈勇者様ご一行〉と〈安全な冒険の旅をする〉という〈物語〉がデフォルトとなっておる。しかし、その突然変異でハナから『分類』から『外れた』少数の輩は、わしと違うあくどい方法でもって、『この世界』の『分類』を壊し、やがては、『この世界』に、『分類』上の〈物語〉には存在しえなかった、いわば『プチ魔王』を創り出すことだろう。――そのとき、その3つの道具さえあれば、その『プチ魔王』たちを倒すことが、……いや、もっと可能性を広くもって言えば、『この世界』をも、『解体』が出来るかもしれないのだ」

「『この世界』を『解体』する、ですって？ いったい、それは、どうやってやればいいのですか？」

その後、キルケ・ゴールは、その〈絵画の額縁〉と〈リモコン〉を使って、その〈プチ魔王〉とやらをどうやって『解体』するのか、〈サーカス団長〉により、色々教えられましたが、――それを話すと長くなるので、申し訳ありませんが、第二章にて、語らせて頂きたい思います。

――それにしても、いやはや、キルケ・ゴールにとって、昨夜の出来事は、まったくもって、今思い出してみても「夢」のようで、彼は〈サーカス団長〉と話したことも、よく覚えておりませんでした。しかし、むくりと起き上がると、自分の部屋の片隅には、ちゃんと昨夜〈サーカス団長〉から託された、例のアイテム、〈絵画の額縁〉と〈リモコン〉と〈プチ魔王マップ〉が置いてあるので、キルケ・ゴールは、やはり、昨晚の出来事は夢ではなかったのだな、と思わざるを得ませんでした。

翌日、目を覚ました彼は、昨夜の『分類』の存在のことや、『プチ魔王』の存在のことや、それを倒すための『解体』の手段の話よりも、約束の時間に行き違ってしまった、〈剛毅なデカルト〉と〈卑屈なスピノザ〉の二人の友達のことが気にかかり、この〈宿屋〉の〈おかみ〉であると同時に、自分の母親でもある、〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉に詰問しました。

「あのさ、いつもの二人の友達と、昨日、〈勇者様ご一行〉のパレードを一緒に見に行く約束をしてたんだけど、僕が寝過ごしてしまって、結局、会えなかったんだ。――あいつら、なんか言ってこなかったかい？」

母親である〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉は不思議な顔をして、

「――あなたの友達である、〈剛毅なデカルト〉と〈卑屈なスピノザ〉は、もうこの村にはいないわよ」

と言ってきたので、リルケ・ゴールはびっくり仰天致しました。

「ど、どういうことなんです？」

母親である〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉は呆れかえったような口調で、
「――まったく、いつまで寝ぼけているんだか、この子は。そのあんたの友達二人が、この〈タブラ・ラサ村〉から旅立った、っていうニュースを知らないのかい？ 今、この〈タブラ・ラサ村〉で一番のニュースだよ。あんた、あの二人と親友なのに、それに至るまでの前兆も、知らなかったのかい？」

と言われ、キルケ・ゴールは、まさに青天の霹靂を受けたようなショックを受けました。

しかし、内心、彼は、――いや、そんなことはあり得るわけがない。ウソだ。『分類』の存在を知らないあいつらが、『分類』以外の行動、つまり、〈生まれ育った村を旅立つ〉なんて行動を取るはずがない。……もしかして、例の〈サーカス団長〉の仕業だろうか？ 〈サーカス団長〉の仕業で、昨夜、〈剛毅なデカルト〉も〈卑屈なスピノザ〉も、『この世界』の秘密である『分類』の存在を知らされ、そこから『外れて』しまったのかもしれない。

それから、キルケ・ゴールは〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉に向かって、
「――あいつらは、僕の貴重な友達だ。だから、そいつらの身が、心配だ。なにか、あいつらが、この村を出ていった動機を、知らないかい？」

と詰問しました。

〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉は、うーん、と顎に手をやって考えたあと、
「――なんだか、私もよく知らないけれど、なんか、この〈タブラ・ラサ村〉を出るときに、『僕らは旅立ちます。――『ソーシャル2』の存在によって、僕らはこの世の真実を知ってしまいました』と言って、旅立ってしまったそうよ。――なんのことなのかしらねえ、『ソーシャル2』って」

と答えました。

『ソーシャル2』？ なんだ、それは？ いや、今はそんなことは、いい。とにかくにも、あいつらも『分類』の正体を知ってしまった以上、どんな行動に出るか、分かったものではない。仕方ない、二人を追いかけるを得ない、とキルケ・ゴールは思い至りました。

そこで母親である、〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉に向かって、彼は、
「――なるほどね。……母さんも知っていると思うけど、僕とあの二人は親友なんだ。だから、あいつらの動向が気になるんだ。だから、あいつらを探しに、〈ちょっとそこまで〉行ってみるよ、いいかい？」

と旅立ちの決心を言い渡しました。

〈ちょっとそこまで〉の定義を〈隣の村までのこと〉と『分類』通りに理解する〈かなり姉御肌の女将フランソワ・リオタール〉は何の疑いも抱かず、

「ああ、良いわよ。あんたの親友二人のことだし、〈ちょっとそこまで〉なんでしょう？ それに、まあ、別にあんたが宿屋にいらなくても、なんの支障もないからねえ。まあ、〈ちょっとそこまで〉行って、探してやんなさい」

と、いとも簡単に納得してくれました。

――こうして、我が主人公たる、キルケ・ゴールは、〈サーカス団長〉の言う通りに、『分類』を『解体』するために、あるいは、『プチ魔王』を退治するために、〈サーカス団長〉が授けてくれた、〈絵画の額縁〉と〈リモコン〉と〈プチ魔王マップ〉を持参して、故郷を出て、旅立つこととなりました。

そして彼は、これから旅していくにつれて、本当の意味での『分類』とは何か？ あるいは、『ソーシャル2』とやらの正体を知ることになり、その果てには、『分類』を『外した』後、『この世界』の人々がどうなってしまうか、をも知ることになるのでした。

第二章 〈まったく耳が聴こえない賢者（音楽家）〉 プチ魔王

さて、キルケ・ゴールは、早速、〈タブラ・ラサ村〉を出て、北へと歩き出しました。

通称〈[i]オブラナ街道〉と呼ばれる街道を、道なりに歩いていると、〈ほろ馬車のおじさん〉がおりました。

「――おい、そこの君。どうせ、ここから北の〈ライプニッツの村〉に行こうとしているんだろう？」

彼は、

「いいえ、結構です」

と言って、断りました。

〈ほろ馬車のおじさん〉は、呆気に取られたような顔をして、

「なぜだい？ この〈オブラナ街道〉は、〈勇者様ご一行〉がパレードでいらっしゃるときと、〈商人〉たちが通るためだけにあるんだぜ？ まあ、勿論、〈商人〉たちはセコいから、俺の馬を使わず、徒歩を選ぶがね。しかも、そのとき〈商人〉たちは大抵、俺たち〈ほろ馬車〉の仕事をしてる輩に、みみっちい商談を持ち掛けてくるのが常なんだ。だが、あんたは、結構です、と断った。……ってことは、あんた、〈商人〉でもねーな？」

と険しい顔して、言いました。

それを聞いて、キルケ・ゴールは黙り込んでしまいました。すると、〈馬馬車のおじさん〉は、

「……いったい、あんた、何者なんだい？」

と質問してきました。

キルケ・ゴールは、ちょっと思案したあと、

「――私は、何者でもないのです。……ただの、ただの、――『解体士』です」

と答えました。

それを聞いて〈ほろ馬車のおじさん〉はさらに険しい顔をして、

「何者でもない？ その上に、カイトイシ、って職業だあ!? 解体士だア？ 長年、〈馬馬車〉の仕事をしているけど、聞いたことねーぞ、そんな仕事」

と答えました。

「――返す刀みたいで恐悦ですが、では、なぜ、あなたは〈ほろ車馬の仕事〉をなさっているんです？」

〈ほろ車馬のおじさん〉は、はア？ と言って、

「おまえさん、どうかしてるぜ？ 俺は〈ほろ車馬の仕事〉をすることが当たり前だからだよ」

と言いました。

その答えを聞いて、キルケ・ゴールは、――やっぱり、この人も含め、多くの人は『分類』の力のことを、つまり、『この世界』の真実を知らないのだ、と内心、確信を深めました。

「――では逆に、なぜ、あなたは、他の〈役割〉を選ばなかったんですか？ 別に、他の〈役割〉の選択肢なんか、いくらでもあったでしょうに」

「……そう考えれば、そうだな。……。で、でも、んなこたあ、知らねえよっ！ ああ、なんだか、苛立ってきたぜ、おまえさんよ。よしっ！ 決めた。おまえさん、このほろ馬車に乗りな。いや、嫌でも乗ってもらうぜ。それで金を支払ってもらわなきゃ、気が済まねえ！」

というわけで、キルケ・ゴールは、そのほろ馬車で、次の村〈ライプニッツ村〉へ行くことにしました。

「……あの、ちょっと、お聞きしたいことがあるんですけど」

「ああ、なんでも聞けよ。俺がなぜ〈ほろ馬車〉という〈役割〉を担っているのか、以外の質問だったらな」

「――つい最近、僕と似たような年齢の青年二人が、ここの街道を通りませんでしたか？」

勿論、キルケ・ゴールの頭の中を駆け巡っていることは、〈剛毅なデカルト〉と〈卑屈なスピノザ〉の二人の行方のことでした。どんな理由にせよ、次の村〈ライプニッツ村〉まで行くには、どうしたって、この街道を通らなければならないわけですから。

〈ほろ馬車のおじさん〉はあまり興味のなさそうな口調で、

「……ああ、昨日、通っていったよ、二人の青年の〈商人〉が、俺の馬でな」

と答えました。

「……どんな様子でしたか？」

「そうだな、……なんか、アレがあったんだろう？ おまえらの出身地である〈タブラ・ラサ村〉で、〈勇者様ご一行〉による、凱旋パレードがあったんだろう？」

「ええ、そうですね」

「たぶん、その影響だろうな、ひどく興奮した様子で、二人して、なんか、ぶつぶつ喋っていたな。よくよく話を聞いてみると、あいつらはどうやら、これから〈首都シュミラークル〉へ行って、大きな品物を仕入れるんだそうだ」

この話を聞き、彼が考えていた、〈勇者様ご一行〉と一緒に旅立った説は、なくなりました。しかし、腑に落ちない点がかなり残りました。なぜ、あの二人は、〈商人〉を名乗ったのでしょうか。そして、「大きな品物を仕入れる」とは、どういう意味なのでしょう？ まったく、謎が謎を呼ぶばかりです。

しかし、一つだけ、確定したことがありました。それは、〈剛毅なデカルト〉と〈卑屈なスピノザ〉の二人も、『分類』というシステムから『外れてしまった』、ということが。

さらに、〈ほろ馬車のおやじさん〉は、続けます。

「――あんた、ずっと〈タブラ・ラサの村〉で暮らしてきた、いわば世間知らずの青二才だろ？ だから、今から行く〈ライブニッツ村〉についても、ほとんど何も知らないんだろう？ どうせ」

「――ええ、まあ」

「やっぱりな。……面白いことによ、今〈ライブニッツ村〉に、正体不明、かつ、耳の聞こえない、〈賢者〉、つまり、〈音楽家〉だな、が、現れて大騒ぎになっているんだぜ。耳が聞こえないのに、作曲が出来て、演奏もできるんだぜ？ しかも、その音色は、〈賢者〉らしく、人々を満遍なく癒すんだそうだ。〈ライブニッツ村〉では、凄い〈賢者（音楽家）〉が現れた！ つって、大騒ぎさ。その騒ぎを聞きつけて、他の村や町からも観光客が来てる、って噂だ」

それを聞いて、キルケ・ゴールは、明らかに、『プチ魔王』だ、と思いました。

その証拠に、袋から〈プチ魔王マップ〉を取り出してみると、その〈ライブニッツ村〉の箇所が「赤く光って」いました。この「赤く光っている」ということは、そこに〈プチ魔王〉がいる、という「証拠」なのでした。

お昼過ぎに、〈ライブニッツ村〉へ到着すると、すでにバイオリンの美しい音色が聞こえてきました。広場へ行ってみると、すでに100人以上の人垣が出来ており、中央の壇上には、肩のあたりまで伸ばしたソバージュの長髪、黒のサングラスをし、タキシード姿の男が、優雅に指揮棒を振っており、背後の楽団がそれに合わせて演奏をしていました。

キルケ・ゴールはそれを見て、思いました。

（なるほど。自分で演奏せず、指揮者を装えば、耳が聴こえることを隠蔽できる。さらに、耳を覆い隠すほどの長髪により、より耳が聞こえないことを強調し、黒のサングラスは、もし仮になんらかの言葉に反応してしまっても表情を読み取らせないために、恰好の道具となる、というわけか）

キルケ・ゴールはその人垣に近づき、村人の一人に話しかけました。

「――あの方が、最近有名な、〈耳のまったく聴こえない賢者（音楽家）〉の方、ですか？」

すると、その村人は彼の顔を見て、呆気にとられたような顔をして、

「知らないんですか！ 今、流行りの〈耳のまったく聴こえない賢者（音楽家）クレオール〉さんを知らない人が世間にいたなんて、こりゃ驚きだ！」

「耳が聴こえないのに、ご自身で作曲し、演奏されているそうで」

「そうです。彼は、天才ですよ。いや、選ばれた、特別な人間、と言っていいかもしれない。彼は生来耳が聴こえない、加えて、まだ20歳という若さで、手話や、指一本の手さぐりの才能で、譜面を書き、作曲し、その曲がまた見事なまでの癒しの魔力を持ち、人々の精神的な傷を治しているのです。まさに、〈賢者〉（音楽家）の鏡です」

確かに、この村人に関わらず、この広場に集まっている人々は、まさにクレオールたる男を羨望のまなざしで、いや、ほとんど、宗教の教祖を眺めるような、無意志に近い恍惚の表情で、〈クレオール〉たる〈耳のまったく聴こえない賢者〉（音楽家）を眺めているのでした。

ひとたび演奏が終わると、その〈クレオール〉たる男は、胸に手をあて、黙って一礼しました。すると、村人たちから、わっ！ という歓声と拍手が起こりました。〈クレオール〉は、続けざまに、演奏を担当した子供たちの方へ振り返り、やはり胸に手をあて、黙って一礼しました。するとまた、観衆から巨大な歓声と拍手が起こりました。キルケ・ゴールはその仰々しさを見るにつけ、なにか寒気のようなものを覚えました。

キルケ・ゴールは思いました。――とにかく、あの〈クレオール〉という男を、どうにかして『解体』しなくてはならない。そのための糸口を見つけなくては。

そんなことを考えているうちに、無意識のうちに、キルケ・ゴールは〈ライブニッツ村〉の宿屋に入っていました。勿論、〈宿屋〉＝〈情報収集には最適の場所〉、という『分類』上の考えもあったのですが、なんだかんだ言って、彼自身が〈宿屋の息子〉であり、一番慣れ親しんでいる場所だったから、といった方が真に近いかと思えます。

キルケ・ゴールに宿屋のおばさんに話しかけました。

「――すみません、二晩ほど泊めていただきたいのですが。部屋は空いてますでしょうか？ 迷惑を言わせていただければ、四階の一番右奥の部屋がいいのですが…」

自然と彼は『四階の一番右奥の部屋』を指定してしまいました。やはり、考えられる理由は一つで、〈タブラ・ラサ村〉を出ていった親友二人が、もしこの〈ライブニッツ村〉に滞在している、とするなら、きっと、お馴染みの『四階の一番右奥』の部屋を取っているに違いない、という推察からに違いありません。

しかし、おかみさんの返答は、意外なものでした。

「――あら？ ということは、あなたは、〈サーカス団員〉の、お知り合いの方ですか？」

「え？ どういうことです？」

「――いやねえ、ついさっき、〈サーカス団員〉と名乗る女の子が、四階の一番右奥の部屋に二晩だけ、泊まらせてくれ、って言ってきてね。おかしいなあ、と思ったのよ。なにせ、先日まで、その部屋には〈サーカス団〉が集団で停まっていたんだからねえ。でも、よくよく話を聞いてみると、なんでも、その女の子は、〈サーカス団〉の皆が出発したあと、自分と、あともう一人の団員が、置いていきぼりを食ってしまったらしくてね、もう一人の団員が、これからすぐやってくるはずだから、やってきたら、四階の一番右奥にいるよ、と告げてくれ、なんて言われてたもんでね。なるほどね。あんたが、そうだったのかい」

どういうことだ？ とキルケ・ゴールは思いました。宿帳を見てみると、確かに、〈サーカス団員〉と記されています。……まず真っ先に思い浮かんだのは、例の、『分類』の存在やら、『解体』としての道具をくれた、あの〈サーカス団長〉でした。がしかし、おかみさんは、女の子、と言っていました。ゆえにおそらく、この宿屋の一番右奥にいるのは、例の〈サーカス団長〉ではない、そして、〈タブラ・ラサ村〉から出ていった、あの親友二人でもない、ということになります。

――キルケ・ゴールは、そんなことをあれこれ考えて、極度の緊張と好奇心を抑えつつ、四階の右奥の部屋をノックすると、

「――どうぞ、入ってください」

という、聞いたこのない、素朴な、女の子の声が聞こえてきました。誰なんだ？ と思い、キルケ・ゴールは、

「……では、失礼して、入りますよ」

と言い、部屋に入ってみると、――なんと、〈村人の服〉と〈黒ぶちの眼鏡〉と〈マスク〉をつけた、年の頃15～16と思われる女の子が、一人、ベッドの上に座っておりました。

キルケ・ゴールは、――変装はしているけれども、一目見て、この女の子が、〈ライト・ノベライズ王国〉の〈お姫様〉だ、ということが分かりました。が、強いて平静を装い、

「――あれ、この部屋は〈サーカス団長〉の部屋だ、と、この宿のおかみさんから聞いていたのですが」

と、あえてとぼけた返答をしました。

すると、その女の子は、くすくすと笑い出し、その質問には何も答えませんでした。キルケ・ゴールは、ますます困惑してしまいました。彼自身が知っている〈お姫様〉は、こんな笑う人ではなかったからです。

「……あの、そんなに微笑されて、どうなされました？」

すると、その女の子は、穏やかな顔になり、

「――すみません、うれしくて、つい」

とだけ答え、少し頬を赤らめました。

キルケ・ゴールの頭は、ますます困惑してしまいました。なぜ、〈ライト・ノベライズ王国〉の〈お姫様〉が、こんな辺鄙な村にいるのだ？ 否、お付きもなく、一人で来られるのだ？ あり得ない、ウソだ、誰かの罠だ、と頭の中で繰

り返し唱えながら、

「――あの、〈サーカス団長〉と宿帳に書かれてあったのですが、あなた、〈サーカス団員〉では、ないですよね？」と探り探りの質問をぶつけました。

おそらく〈お姫様〉とおぼしき女の子は、キルケ・ゴールの言動など、全て見透かしているかの如く、「ええ」

とだけ言って、自身に身に着けていた、変装道具である、〈黒ぶちの眼鏡〉と〈マスク〉を外して、くすくす笑いながら、「――そう書けば、あなたも、分かってくれる、と思ひまして」

と呟きました。

その素顔を見て、当然キルケ・ゴールは、

「お、〈お姫様〉じゃないですか!!」

と驚嘆の声をあげました。

が、〈お姫様〉は、穏やかにふふふと笑って、

「あら、失礼ね。私には、『分類』上の〈お姫様〉ではなく、ちゃんと『デリタ』って名前があるのよ」

――その言葉を聞いて、キルケ・ゴールは、この、目の前にいる、〈一般人〉の恰好をした〈お姫様〉が、これまで彼が得た知識――つまり、『この世界』の真実である『分類』の存在から、その存在を教えてくれた〈サーカス団長〉の存在まで――を、どんな方法を使ったのかは分かりませんでした。とにかく、全て既に知っていることを理解したのであります。

今は彼は正直に、

「――今の発言で、全て納得致しました。貴女は、『この世界』の真実である、『分類』の秘密を知っておられますね？ しかも、この〈ライト・ノベライズ王国〉の〈お姫様〉でしょう？」

と真顔で問いかけました。

おそらく〈お姫様〉であると思しき『デリタ』と名乗る女の子は、清らかないい声で、

「まあ、そうです」

とだけ答えて、また、くすくすと笑いだしました。

キルケ・ゴールは瞬時、不快な警戒心に駆られましたが、色々な言葉を脳内で省略して、

「――それで、なぜあなたは、ここにいるんです？」

と、一言に集約して、詰問しました。

〈お姫様〉、いや、〈デリタ〉と名乗る女の子は、

「――なぜって、それは、私も貴方と同じく、本当の『この世界』を旅したい、と思ったからです」

とまっすぐな瞳で、答えました。

バカなっ!! 『この世界』の『分類』上、そんなことを思うこと自体、あり得ないはずだ。第一、〈ライト・ノベライズ王国〉の人々が、こんな突飛な行動を許すはずがない、とキルケ・ゴールは瞬時思い、ゆえに彼はあえて他人行儀な口調で、

「――では、あなたのような〈ライト・ノベライズ王国〉の〈お姫様〉は、僕のことを全て知っているのでしょうか？ 失礼ながら、僕は貴女が、なぜ、ここにいることが許されているのか、どうしても理解することができません。僕の身の上を知っている以上、〈お姫様〉である『デリタ』さんも、どうして、こうしてここにいることができるのか、説明して頂けませんか？」

と詰問しました。

『デリタ』と名乗る〈王女様〉は、さっきまでの微笑を消し、はぁ、とため息を一つ吐いたあと、

「――分かりましたわ。なぜ、私がここにいるのか、貴方に教えますわ。――ただ一つ、『分類』の存在を知っているのでしょうか？ だから、その〈お姫様〉っていう呼び方は止めてくれないかしら？ 『デリタ姫』、でいいわよ。貴方と同じ歳なんだし」

と呟いたあと、デリタ姫は、これまでの経緯をキルケ・ゴールに話してくれました。

――私は、貴方もご存じの通り、例の〈勇者様ご一行〉に連れられて行われる、〈ライト・ノベライズ国〉恒例の、〈安全な旅〉を終えたあと、……やっぱり不満で、〈お目付け役の爺やフーコー〉の助言も聞かず、自分の部屋に閉じ

こもってしまったの。――まあ、この時点で、私は半分、『分類』から『外れて』いたのかもしれないわね、理由は分からないけれど。

それはともかく、いつもの〈安全な旅〉を終えてからというものの、御多分に漏れず、〈戦利品〉として、色々な方が、色々な〈戦利品〉を私にくれたの。

そして、その中に〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉という、古ぼけた、一見、なんの役にも立ちそうもない、道具が混じっていたの。〈お目付け役の爺やフーコー〉に聞いたら、それは〈勇者様ご一行〉に付随していた、〈サーカス団〉の〈サーカス団長〉がくれたものらしい、ということを知ったの。

それこそ最初は、電源を入れても、なんにも映らない、単なるガラクタだったの。〈チャンネル〉も、貴方ならずとも、この、〈ライト・ノベライズ王国〉の住民なら承知の通り、〈王国チャンネル〉、〈勇者チャンネル〉、そして、〈芸能チャンネル〉の3つしかなかったのだもの。

でも、〈サーカス団長〉が書いたと思われる、ひとひらのメモに、「お姫様の使い方次第」という言葉が残されていたから、私も諦めず、色々、試してみたのよ。

まず私は、朝から晩まで、やたらめったら、その〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉の〈チャンネル〉を、がちがちと回してみたの。まあ、〈チャンネル〉をいじ繰り返すのは、昔からの私の癖みたいなものだったからなんだけどね。とにかく、やたらめったら、〈チャンネル〉の芯が摩擦で熱くなるぐらい、毎日、寝食も忘れて回しまくったのよ。

そしたら、ある日のこと、ウソみたいな話だけど、私が余りにも激しく〈チャンネル〉を回しまくったせいか、画面の右下に、ゴマのような小さい物体が現れたの。

まもなく、その物体は、あずき大にまで成長したの。

私は早速、その〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉を解体して、部屋にあるピンセットで、その物体を取ってあげたの。それは、今まで見たことのないような、小さな卵だったわ。私はそれを真綿で包んで、空のマッチ箱に入れたの。

それから二、三日経ってから、そのマッチ箱を開けてみると、――信じられないでしょうけど、小人が出てきたの。たぶん、その卵から、生まれたんだと思う。

その生まれた小人に、私は話しかけたんだけど、――当然、なんの反応もなかったの。たぶん、まだ、この小人は赤子で、成長が足りないから、喋れないんだわ、と思った私は、その小人を、生まれた場所であるブラウン管の中に戻したの。なんでかは自分でも分からないけど、とにかく、ブラウン管から生まれた物だから、ブラウン管の中だったら育つんじゃないかしら、とでも思ったのかもしれないわね。

そんなこんなで、ブラウン管の中に戻したその小人は、水を得た魚のように生き返って、すくすくと育ってゆき、数日経つと、言葉を話すようにさえたの。

「お嬢様。こんにちは」

「ええ、こんにちは。あなたは、元気？」

てな具合にね。

そしてある日、〈芸能チャンネル〉をつけていたら、『〈勇者様ご一行〉が使用していた、〈疲れが一気に取れるアイスクリーム〉、新発売！』という〈CM〉が流れていたから、何の気なしに私は、

「ああ、おいしそうね」

と呟やいたの。そしたら、そのブラウン管の中の小人は、そそくさと、その画面の中の〈アイスクリーム〉を手にとって、画面外の私に手渡して、

「ほらっ！ 早く食べないと、溶けますよ！」

と言ったから、まったく、驚くじゃないの。

私は、その〈アイスクリーム〉をのんびり食べながら、その小人に話しかけたの。

「――ねえ。あなたみたいに、私も、そのテレビの中に入れるのかしら？」

「はて。なぜ、そんなことをお望みになるのですか？」

「なぜって、そりゃ、退屈だからよ。私も、守られた〈安全な旅〉じゃなくて、一個人として、この〈ライト・ノベライズ城〉から逃げ出して、『この世界』を、くまなく旅して回ってみたい、と思ったからよ」

そう言うと、小人は次のように言ったわ。

「――あなたがテレビジョンの中に入りたいたいのならば、みんなが寝静まってからにしてください。そうすれば、『第四のチャンネル』が現れ、そこにだけなら、あなたは出入り可能になりますよ」

「今はもう、深夜よ。誰も、起きちゃいないわ」

「――では、チャンネルを4回ひねって、0に戻してみなさい」

私は小人の言う通り、チャンネルを4回、がちゃがちゃとひねって、0にカチッと戻してみたの。すると、――あなたの姿と、あなたの友達と、あなたの住む〈タブラ・ラサ村〉が、映ったの。

私は、――ある意味で、自分と同じ悩みを持っている貴方に、……なんていうのかしら、恥ずかしいけれど、一気に貴方の魅力に引き込まれて、貴方の住む世界に、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉を利用して行ってみたい、と思ったわ。

「ねえ、小人。今すぐにでも、私は、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉の中に入って、別世界へ移動することができるの？」

「はい。私を信じて、紙のような気持ちになれば、の話ですが」

「あら、そう」

その話を聞いた私は、早速、〈お目付け役の爺やフーコー〉に報告することにしたの。

「――〈お目付け役の爺やフーコー〉」

「な、なんです、こんな夜遅くに、改まって〈王女様〉」

今思えば、きっと、いきなり『分類』上の名前で行われたから、爺やは、びっくりしたのね。

「……〈お目付け役の爺やフーコー〉、あなたは私、〈デリタ王女様の監視役〉よね？ だから、あなたにだけは、報告しておかなくちゃいけないことがあるの」

「え!? きゅ、急になんなんです、〈デリタお姫様〉？」

私は、

「これを、見て」

と〈お目付け役の爺やフーコー〉に言うと、例の方法で、〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉に映った、貴方の世界と、例の小人を見せたの。

当然、それを見た〈お目付け役の爺やフーコー〉はびっくりして、

「こ、これはなんなんです!? この小人は勿論のこと、こんな〈チャンネル〉、見たことがありませんぞ！」

と言ったわ。

私は、

「――見てて」

そう、一言だけ呟くと、両手を紙になったような気持ちで、その〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉の中に差し込んでみせたわ。

勿論、〈お目付け役の爺やフーコー〉は驚いていたわ。

「おお、なんと!!」

「見ての通り、私は、この、〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉の中を自由に行き来できるの。だから私、これから一人、冒険の旅に出るから」

「な、なんてことをおっしゃるんですか!! ダメに決まっているじゃないですか!!」

私は冷静な口調で、

「〈お目付け役の爺やフーコー〉。――あなたに課せられた役割は、〈デリタお姫様の監視役〉、よね？ だったら、私が旅立ってから、私の言動を監視していれば問題ないはずだし、それに、私がどうするか、までは、あなたが決められることではないはずよ」

と言い渡しました。

おそらく『分類』の存在を知らない〈お目付け役の爺やフーコー〉は、ぐうの音も出ない様子で、

「た、確かにそうですが…」

と口ごもるばかりだったわ。

私は念を押すように言ったわ。

「――お願いだから、分かって。爺や、私は今、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉に映っている、この男の人の下へ、心の底から行ってみたいの。〈安全な冒険〉なんて、全世界の人が私を監視しているのと同じだわ。そんな人生、私は、いや。私は、一度でいいから、一個人として、生きてみたいの。……ダメ？」

〈お目付け役の爺やフーコー〉は戸惑った調子で、
「……私めはともかく、〈王様〉と〈王妃様〉に、なんと言い訳するおつもりなんですか？」
と言ってきたから、私は、はあ、とため息を吐いて、
「――言い訳なんて、しないわよ。というか、そんな必要ないわよ。どだい、お父様も、お母様も、私に関心なんて、ないじゃない。お父様も、お母様の病気のことで手一杯なんだから、ね。もし仮に、私が姿を消したあと、どうしているか、聞かれたら、引きこもっている、とでも言っておいて」
「しかし」と〈お目付け役の爺やフーコー〉は咎めて、「もうすぐ行われる、〈ライト・ノベライズ王国誕生祭〉はどうなさるつもりなんですか？ さすがに、そこまでは、私めも責任を取れませぬぞ!!」
と怒鳴ったわ。
私は、ふん、と顔を背けて、
「――大丈夫よ。勿論、それまでには、ここに帰ってくるわ。あなたが私の〈監視役〉を首になるようなことには、絶対にしないから、安心してちょうだい」
と告げて、両手を〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉の中に入れて、振り返きざまに、〈お目付け役の爺やフーコー〉に向かって、
「――それじゃ、行ってくるわね」
と笑顔で言い残して、その〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉から、この〈ライブニッツ村〉の宿屋の四階の右奥の部屋の〈テレビジョン〉に移動してきた、っていうわけ。

以上のようなデリタ姫の話を聞いて、僕はあえてとりあえず全てを信じることにし、その上で、次のように質問しました。

「……それじゃ、デリタ姫、貴女は、その〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉を通じて、僕のこれまでの経緯を、全て見ておられた、ということですか」

すると、デリタ姫は、少し頬を赤らめさせて、もじもじしながら、
「…はい、そうですね」

と恥ずかしそうに答えました。

キルケ・ゴールは矢継ぎ早に、

「……ということは、デリタ姫、貴女も、もうすでに、『この世界』の秘密である『分類』の存在のことも、〈サーカス団長〉のように『分類』から外れている人々がいることも、『プチ魔王』の存在も、お知りだということですね？」

「…はい、全て知っております」

そう言い終わると、ばらくの間、二人とも、黙りこくってしまいました。それはそうでしょう。二人が相思相愛であることが、お互い分かっているのですから。それについて語り合う、ということは野暮というものです。

ですから、それからしばらくの間、二人とも、互いの顔をちらちら見ては、頬を赤らめてばかりいました。

が、ずっとこのままだと仕方ないので、キルケ・ゴールの方が、髪をくしゃくしゃとかき乱したあと、思い切って話を切り出し始めました。

「――ちょっと、ここまでの話を整理しましょうか。現時点で、分かっていることが、二つ、ありますね。一つ。その〈サーカス団長〉は、『この世界』が『分類』から出来ていることを知っている人物の一人であり、そして、『この世界』の秘密、つまり、『分類』を知っている者が他にもいる、ということ。そして、二つ目は、彼自身、〈サーカス団長〉という『分類』に従いながらも、僕や貴女を利用して、少しずつ、『この世界』の『分類』を壊そう、と企んでいる、ということですね。――なんの目的か、は分かりませんが」

「いや、三つじゃない？」

「どういうことですか？」

「『この世界』が『分類』で出来ていることを知っている人がいることが分かっている、『この世界』を作った『創造主』は誰か？ は誰も分かっていない、ってことよ」

「――確かに。う～む、いや、それはどうかな。〈サーカス団長〉も含めて、『分類』から自分の意思で外れ、そして、間接的に『分類』を壊そうとする行為は、『この世界』を作った『創造主』への当てつけ、ってことにならないかい？」

」

「うーん、確かに、そうね」

「……つまり、『創造主』の性格を知っているからこそ、あるいは、『創造主』に自分の計画を知られているからこそ、わざと、『創造主』から、ある意味、存在感のない、〈サーカスの団長〉なんて『分類』を与えられたんじゃないかな、と僕は思うんだ。それを逆手に取って、彼が動いている可能性は十分にある」

「――そう考えると、『この世界』って、何度目の『この世界』なんでしょうね？」

「……ああ、確かに。一度目の『この世界』ならば、『分類』という『この世界』の秘密に気づく奴なんか、まず出てこない。たぶん、何世代も何世代も経て、ようやく『分類』という『この世界』のシステムに気づいた連中が出てきたのかもしれない。今回の、この〈ライブニッツ村〉に来訪している〈賢者〉である、〈クレオール〉の件だって、ほとんどの人々が、『プチ魔王』だと、気づいてなんかいませんよ。なにせ、別に〈悪いこと〉をしているわけではないですからね。――しかし、この〈プチ魔王マップ〉は、ここに『プチ魔王』がいる、ということを示しています。僕の『解体』の力で、あの『プチ魔王』を仮に『解体』できる、としても、それ以前に、どうやって、彼が『プチ魔王』であるのか、それをまず皆に証明しなければならないんですよ？ しかも、残り時間は、あと2日しかありません」

「それは大丈夫!!」

そう言って、デリタ姫は、微笑みました。

「私に、良い作戦があるの！」

その言葉を聞いて、キルケ・ゴールは、どうせまた気まぐれなのだろう、と考え、深いため息を吐きました。

翌日、デリタ姫の言う、「良い作戦」を執行すべく、〈賢者クレオール〉の師匠と噂されている、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉の家へ行ってみました。

〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さんの家は、村の外れにある、ごく普通の民家でしたが、立派な庭があり、色々な木々の緑が繁殖していました。

キルケ・ゴールは、率先して、その玄関のドアを三回ノックし、

「――あの、すみません。〈マルチ・チュード先生〉は、ご在宅でしょうか？」

と呼びかけました。

すると、ある老人が、訝しげな表情で、ドアの隙間から陰気そうな顔を出してきました。

「……なんでしょうか」

「あの、いきなりぶしつけな質問で申し訳ないんですが、あなた、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さん、ですよ？」

「……はい、そうですが、それが、一体なんだというんです？ 私に何か、用がおありでも？」

「――あの、結論から申し上げますが、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さん、……あなた、今話題になっている〈賢者〉（音楽家）の、〈クレオール〉さんのお師匠さん、ですよ？」

〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さんは、ますます怪訝な表情をして、

「――知りませんな、彼のことなんて」

と呟いて、話にならん、と言った様子で、玄関のドアを閉めようとしてました。

すると、「計画通り」、キルケ・ゴールの背後に隠れていたデリタ姫が、ぬっと〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉の眼前に出てきて、

「あ・な・たっ!! 私のことを知らない、なんて、言うわけないわよね!!」

と大声で言い、玄関の扉に手をやり、ドアを閉めようとするのを阻止しました。

すると、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さんは驚天動地のご様子で、

「お、お、〈お姫様〉じゃないですかっ!! な、な、な、なんで、こんなところに、いらっしゃるんです!!」

と目を丸くして、叫びました。

デリタ姫は、にやにやしなながら、

「――そうね。その質問に答えるには、まず、こちらの質問に答えてもらわなきゃいけないわね。うふふ」

と脅迫じみたことを申し渡しました。

そう。この〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さんは、文字通り、元・宮廷音楽家であり、デリタ姫にも10歳までは音楽を教えていた、音楽教師だったのでした。それに、デリタ姫は、これまでの〈安全な冒険〉である〈魔王退治

の旅〉の行程で、この〈ライブニッツ村〉を訪れたこともあり、退職したあと、彼がどこに住んでいるかも、ちゃんと把握していたのです。

デリタ姫は、調子に乗って続けます。

「――〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉。今流行りの、〈クレオール〉って〈賢者〉（音楽家）、彼、『プチ魔王』よね？ そして、彼に作曲してあげてるの、あなたでしょう！」

「な、な、な、なにを仰っているんですか?! なんですか、その『プチ魔王』っていうのは。そんな訳、ないでしょう!! 私は何も彼と関係はありませんよ!!」

デリタ姫は、はぁ、とため息を吐き、落胆したような演技を見せつけて、

「……残念だなぁ。子供時代に音楽を教えてくれた、大好きな〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生が、〈お姫様〉を勝手に拉致した罪で捕まっちゃうのは…。〈ライト・ノベライズ〉国中の人々は、私の証言と、先生の証言、どちらを信じるかしらね？ 私は、この付き添いの彼のことを、私を拉致した先生から助けてくれた恩人、として証言するし、〈ライト・ノベライズ〉の国民の大半が、そういう風に見るのは、火を見るより明らかだと思うだけだなぁ…」

「わ、分かりました、分かりましたよ!! ほ、本当のことを言いますから、とりあえず、早く私の家の中に入ってください!!」

デリタ姫のおてんばぶりを見て、キルケ・ゴールは、おそろしい子だ、と思い、冷や汗をかきました。

キルケ・ゴールたちは、これまでの経緯を、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉に全て話しました。

それを聞いた〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉は、客専用のソファに彼ら二人を座らせ、自分も自分専用のソファに座り、はぁ、とため息を吐いて、体を俯かせて独り言のように語り出しました。

「――〈お姫様〉はご存じでしょうが、私は4年前、〈宮廷音楽家〉という役割から退き、この〈ライブニッツ村〉へとやってきて、隠遁生活を続けてきました。しかし、この生活態度の変化は、君たちの言う、『分類』から『外れた』ものではないと考えています。なぜなら、〈宮廷音楽家〉の任期は、10年と決められているからです。どうしたって新しい世代に交代しなければいけないシステムになっています。しかし、そこから、なぜこんな辺鄙な〈ライブニッツ村〉にやって来て、隠遁生活を送るようになったのか、は恥ずかしながら自分でもわかりませんし、かつまた、疑いもしませんでした。君たちの説を信じれば、きっと、私の〈性格の分類〉が、〈遁世主義〉とでも『分類』されていたからなのでしょう。――さて、そんなとこより、問題の〈クレオール〉の件、でしたね。〈クレオール〉とは、彼の父親との仕事の関係上、ずっと前から知り合いました。以前の〈クレオール〉は元来、耳も聴こえますし、〈賢者〉（音楽家）でもなんでもなく、恰好も今のような奇抜なものではなく、普通の〈村人の服〉を着ており、なんなら彼の家は金持ちで、何不自由ない暮らしをしていたのです。君たちの、その『分類』的な考え方で例えるならば、〈金持ちのボンボンのクレオール〉といったところでした。そんな彼が、急変したのは、つい先月のことです。彼は今のような奇抜な恰好をし、突然、我が家にやってきて、『俺はこんな世界の片隅で終わるような人生は嫌なんだ!! 俺は、なにがなんでも有名になってやるんだ!! いや、違う!! 有名になるように、神に選ばれてるんだ!! なぁ、先生。俺は〈世界一有名な賢者〉（音楽家）になりたい!! 今すぐ、有名になりたいんだ!! だから、頼む!! 俺のために、曲を書いてくれ!! あんたはもう、引退してるし、なに、昔からの知り合いじゃないか! 俺が耳が聴こえないことを装い、あんたほどの実力者の作曲した曲を俺が指揮し、演奏を村の子供たちの音楽団たちに任せれば、一気に俺は有名者さ!!』と言ってきました。私は、彼の話聞き、困惑しました。しかし、彼の願いをなぜか快諾してしまいました。それもこれも、君たちの言う、私の性格の『分類』のせいなのでしょう、私は自分が〈宮廷音楽家〉から退いた後は、別に、何がどうなったっていいさ、というような、無意志・無策な人間になっていましたから、困惑しながらも、金魚の糞についていくように、彼の依頼を承諾してしまったのです」

そこまで話を聞いたキルケ・ゴールは、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生に詰問しました。

「――なるほど。よく、分かりました。ところで、先生。彼は、先生が今話した以外の会話で、何か、彼の足を引っ張れるような、キーワードを口にしたことはありませんでしたか？」

「ど、どういうことですか？」

「――先ほどもお話をさせて頂いたように、僕は、いや、僕たちは、これから、〈クレオール〉という『プチ魔王』を、『解体』しなければならないんです。そのためには、彼が、本当は耳が聴こえる、という状況証拠を得なければなりません。例えば、彼が観衆の前で演説しているときに……」

と言いかけたときに、デリタ姫が会話をさえぎるように口を出しました。

「『耳が聴こえるくせに！』じゃ、ダメだもんねえ」

「うん、まさにそうなんだ。そんな言葉を彼に吐いても、かえって民衆の感情を逆なで、その矛先がこちらへ向き、『こんな素晴らしい人に、なんてこと言うんだ、お前は！』なんてことになりかねない。だからこそ、必要なのです、彼が耳が聴こえない、ということ、民衆に気づかせる、魔法の一言が。――そして、それを知っているのは、〈クレオール〉と内々に会話してきた、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さん、あなた以外に、いないのです」

〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生は、うむむ、と沈黙考したあと、

「――彼は、……〈クレオール〉は、『〈現代音楽〉じゃダメなんだ！ 似たようなものになっちゃう。今こそ、〈クラシック〉の音楽が必要とされてるんだ!! そうだ!! 俺は、現代の〈ベートー・ヴェン〉になるんだ!!』と、言っていましたね、そう言えば……」

それを聞いて、キルケ・ゴールとデリタ姫は、互いに顔を見合わせて、頷き合いました。そして、二人同時に、同じ言葉を発しました。

「――『現代のベートー・ヴェン』、それ、使えますね」

（――なに、簡単さ。『プチ魔王』を『解体』するには、まず、最低条件が2つある。一つは、1対1の状況を作ること。2つは、背後に太陽が照っていること。この条件下で、まず、〈リモコン〉の〈停止ボタン〉を押す。すると、相手は動けなくなる。それから、〈絵画の額縁〉を太陽が収まるようにかざし、相手の視野をその額縁の中へ集中させる。それから、〈再生ボタン〉を押す、相手にとって、核となる部分を質問攻めするだけ。それだけさ。例えば、何かの信念にはまってしまった奴が相手だとしよう。その場合、以下のように質問攻めをするのさ。「なぜ、その信念を固く信じているの?」「本当の生き方を教えてくれたからだよ」「本当の生き方ってなんなの?」「前向きに生きることだよ!」「前向きってどういうことかな?」「明るく生きることだよ!」「明るってというのは、どういうことなのかな?」「積極的に他者とコミュニケーションを取るってことだよ!」「積極的って?」「馬鹿野郎っ!!」「それが積極的って意味?」「ちげえよ、馬鹿野郎っ!! 誰に対しても心を開くってことだよ!!」「心を開くって、どうやって?」「お前には教えねえよ!」「あれ? さっき君は誰に対しても心を開くって言ったよね? それじゃあ、心を開きしていることになるよね? 矛盾してない?」「うるせえな、馬鹿!!」「矛盾しているから聞いているんだ」――という具合にな。次第に、相手は言葉を失い、次第に、喋らなくなる。そうしたら、今度は、相手の答えを一つ一つ裏返していくんだ。「人間は後ろ向きに生きていくべきだ」「明るく生きていくべきじゃない」「心は閉じていた方がいい」という具合にな。そうすると、相手は、当然ムキになって、その反対命題を否定してくる。そこで、〈リモコン〉の〈巻き戻しボタン〉を押す、再び、最初の質問から、相手を質問攻めしていく。そして、最後に「――お前は誰だ?」と、決め台詞を吐いた後、〈再生ボタン〉を押す。そうすれば、相手の精神は崩壊し、『解体』は完了、となる)

キルケ・ゴールは眠っている間に、例の〈サーカス団長〉が彼に教えた『解体』の方法を、夢うつつに反芻していました。彼はまどろみの中、思いました。……果たして、僕にうまく『解体』が出来るだろうか…。

そんなことを考えていると、突如、頭をパコン、と叩かれ、キルケ・ゴールはびっくりして、目を覚ましました。目の前には、デリタ姫が、ぶんぶんした顔をして、寝ぼけ眼の彼を見下ろして言いました。

「ちょっと君、いつまで寝てるのよ! 今日が、ラストチャンスなのよ!」

「…ん、あ、そうだったね。今日での演奏会、〈クレオール〉という『プチ魔王』が、〈ライブニッツ村〉を出ていってしまうんだよね…。言い換えれば、ラストチャンスなんだよね…」

「なによ、それ! 私と同じこと言ってるだけじゃないの! そんな寝ぼけた調子じゃ、ダメだわね。――ちょっと、熱いコーヒーでも飲んで、君の頭、覚ましてあげなきゃいけないわね」

キルケ・ゴールは呆気に取られて、

「……え、君、コーヒーの入れ方、知ってるの?」

と問いました。

デリタ姫は、ますますふくれ顔になり、

「はい、はい、なるほどね。――どうせ君は、私は温室育ちの、何も知らない、箱入り娘だと思ってるんですけど、実際は違いますからね! コーヒーの入れ方ぐらい、知っているわよ!」

そう言って、デリタ姫はその場を去って簡易コーヒーを作り、2つのマグカップを持ってきて、照れて頬がぼっと赤くなった顔を隠すように顔を背けて、キルケ・ゴールにマグカップの一つを差し出しました。

キルケ・ゴールは、照れながら、それを受け取り、

「……ありがとう」

と目を背けて、恥ずかしそうに、一言、呟きました。

それを聞いたデリタ姫も、

「……別にいいわよ、お互い様じゃない」

と言って、ぶい、と背けた顔の頬を、さらに真っ赤にしてみました。

キルケ・ゴールは、そのコーヒーを一飲みして、その場の気まずい空気を変えるために、一言、

「……苦い」

と言いましたら、デリタ姫は照れた顔をしたまま、また、彼の頭を、ポカリ、と殴り、

「なによ、文句でもあるの!？」

と怒りました。

――キルケ・ゴールは、コーヒーなんかよりも、彼女にツッコミを入れられる方が頭は冴えるんじゃないかな、と思ったのは言うまでもありません。

というわけで、――『プチ魔王』である〈クレオール〉が旅立ってしまう日、案の定「最後の演奏会」と称して、朝の9時から、〈クレオール〉が、村の広場で、「最後の演奏会」を行うらしく、もうすでに多くの人々が広場に集まっていました。

やがて、本日の主役である〈クレオール〉が、姿を現し、壇上に上がってきました。

そして、例の如く、胸に手をやり、一礼をしました。すると、何百の観衆から、歓喜の声と、盛大な拍手が起こりました。

しばらくして、観衆の声が静まると、〈クレオール〉は、再び、胸に手をやり、一礼したあと、アーネストは、人差し指を掲げ、たどたどしい口調でもって、

「――今日ヲモッテ、コノ村トハ、オ別レデス。コノ村ノ演奏隊ヲ務メテ下サッタ人々ニ、最大ノ感謝ヲ捧ゲマス。名残り惜シイデスガ、皆サン、最後ノ私ノ演奏ヲ、オ聞キ下サイ」

その短い演説を聞き、観衆は、また、わあ！ と大きな歓声を上げました。〈クレオール〉は無言の笑顔を見せ、再び自身の胸に手をやり、背後の村の演奏隊に向かって胸に手をあてて無言で一礼したあと、すっと指揮棒を取り出し、演奏を始めました。

大衆たちは、「最後の演奏会」ということもあり、いつにも間して、うっとりとした表情で、その演奏に聞き入っている様子で、その中で、キルケ・ゴールとデリタ姫二人だけが冷静に、お互い、ひそひそ声で、秘密の打合せをしておりました。

「……いいかい、タイミングが重要だよ。演奏が終わり、観客の声も静まり返り、〈クレオール〉が胸に手を当てたとき、そこで、れいの『魔法の一言』を言うんだよ」とキルケ・ゴール。

「――分かってるわよ」とデリタ姫。

ややあって、演奏が終わりました。そして、目算どおり、観衆の盛大な歓喜の声と拍手が長い間続き、やがて、辺りが水を切ったかのように静かになり、演奏を終えた〈クレオール〉が胸に手を当てて、深々と観衆に一礼をしたとき、デリタ姫が大声で、

「感動しました!! さすがです、現代のベートー・ヴェン!!」

と叫びました。

すると、〈クレオール〉は、本来、耳が聴こえないはずなのに、その声に、ぴくっ、と反応し、少し面を上げる、という動作をしてしまいました。そして、大衆はその様子を、目撃してしまいました。まんまと罠にかかった、というわけです。

さらに拍車をかけるように、キルケ・ゴールは素知らぬ顔して、広場に集まった観衆に向かって、さも不思議そうな顔をして、

「あれ!? おかしくないですか!? 今、この女の子が発した一言に、〈クレオール〉さん

は反応してましたよね!? 彼って、耳が聴こえないんじゃないかなかったですっけ? どういうことなのでしょうかね?」

と観衆を扇動しました。

すると、集まった観衆の各方面から、どよめきの声があがりました。「確かに、彼女の一言に反応していた。彼は本当は、耳が聴こえていたんじゃないか?」「いや、そんなウソを、かの〈賢者（音楽家）クレオール〉氏が吐くわけがないだろう! お前は人の心を思いやれない、非情な奴だ!」「いや私は、確かに彼が、あの一言に、ぴくっ、と反応したのを、この目で見たわ!」「もう、そんなことはいいじゃないの! 彼が耳が聴こえようが、聴こえまいが、素晴らしい〈賢者〉（音楽家）であることは確かなんですから!」云々かんぬん。

さて、肝心の〈クレオール〉は、それらの観衆の反応を無視するかのようになり、後方にある村の演奏隊に向かって、胸に手を当てて無言で一礼をし、その場から去っていきました。

「……おそらく、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生の家に行く気だわ」とデリタ姫。

「ああ。――後をつけよう」とキルケ・ゴール。

〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生の家につくと、玄関は開けっ放しでした。きっと〈クレオール〉という『プチ魔王』が、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生の胸ぐらを掴んで、「なぜ、情報をバラした!! 誰に、情報をバラしたんだ!!」的な恫喝をしているに違いありません。

入ってみると、――案の定、〈クレオール〉は、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生の胸ぐらを掴み上げているところでした。

キルケ・ゴールはそれを見て、

「やめてください、〈クレオール〉さん!! 今日の件は、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さんのせいではありません!! 全部、僕らが仕組んだことなんです! だから、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉さんから手を離してください!」

と叫びました。

が、『プチ魔王』の〈クレオール〉は、この期に及んでも、〈耳のまったく聴こえない賢者（音楽家）クレオール〉という、ウソの『分類』を演じ通すつもりなのか、何の反応も示しませんでした。

キルケ・ゴールが、まずいな、と思った矢先、デリタ姫が、たたたたたっ、と〈クレオール〉のところへ走っていき、なんと「手話」を始めたではありませんか。

デリタ姫が、丁寧に、やってみせる「手話」には、さすが〈クレオール〉も油断したのか、何度もそれに頷き、ようやく納得してくれた様子で、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生の胸ぐらを手放し、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生は解放され、床に倒れ落ち、可哀想に、ごほっ、ごほっ、と咳き込んでおられました。

デリタ姫は続け様に、

「とにかく、ここは一旦部屋を変えて、話し合しましょう。そこで、本当のことをお話しますから」

という意味の「手話」を、懇切丁寧にやり、〈クレオール〉の体を支えるように、西にある客室へと案内していきました。キルケ・ゴールも、それについていきました。

客室に入り、キルケ・ゴールは、凄く真面目な顔をして、

「――先ほどは、大変、申し訳ありませんでした。あんな、大騒ぎを起こしてしまいました」

とあえて口に出して言いました。

勿論、〈クレオール〉は、『耳がまったく聴こえないキャラ』を演じなければなりませんから、なんの反応も示そうともしません。そこでデリタ姫が、「手話」を使って、〈クレオール〉に、キルケ・ゴールが言った言葉を通訳する、というわけです。

すると、『プチ魔王』の〈クレオール〉も、無言で何度も頷き、キルケ・ゴールの言葉を理解し、納得してくれたようでした。

「――僕が、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生から、あなたの情報を手に入れていたのは、事実です。その点は、誠にすみませんでした。しかし、それには、れっきとした理由があったのです。……実は、あなたの傍で通訳している女の子は、僕の妹でして、昔からバイオリンを習っていたのですが、うちは貧乏な家ゆえ、この妹の音楽の師匠となる人を雇えなかったのです。が、そこに突然〈クレオール〉さん、あなたが私たちの前に現れました。あなたは素晴らしい〈賢者〉（音楽家）でありながらも、まったく天狗にならず、この〈ライブニッツ村〉の子供たちを演奏隊として使う

など、我々目下の者にもとても優しい面をお持ちです。なので、この人ならもしかしたら、と思い、荒い手段ではありましたが、このような手を使い、どうにかして妹の音楽教師になってもらいたい、と思ったのです」

その言葉を聴いても、無言で、表情一つ変えない、〈クレオール〉。デリタ姫は再び、〈クレオール〉に「手話」を使い、今言ったキルケ・ゴールの言葉を、彼にてきばきと翻訳致しました。

彼はしきりに顔きながら、デリタ姫の「手話」を見ていましたが、話が「弟子にしてほしい」というくだりに入ると、しきりに顔を左右に振り、両腕で「ダメ」のポーズを作りました。

キルケ・ゴールはそれでも冷静な口調で、

「――そうですよね。やはり、無理なお願いですよね。分かりました。それでは、せめて、思い出作りとして、今日一回に限り、数秒でもいいので、この妹の教師になってはくれませんか。手間はかせません。ただ、これから演奏する妹のバイオリンを聞いて、一言、注釈を加えてくれるだけでよいのです」

と言いました。

デリタ姫はすかさず「手話」をして、その内容を〈クレオール〉に伝えました。（なんだ、そんなことか）くらいに思ったのでしょう、今度は、すんなり、しかも微笑ぎみに、OKマークを、彼ら二人に送ってくれました。

デリタ姫は、「やったっ!!」と歓喜の演技をしてみせて、はしゃぎながら、急いで部屋の中にある、一本のバイオリンを持ってきました。そして、〈クレオール〉も、微笑しながら、デリタ姫を気安そうに歓迎しました。

デリタ姫は、バイオリンを弾きはじめました。

しつこいようですが、〈クレオール〉は、〈耳がまったく聴こえない賢者（音楽家）という『設定』ですから、デリタ姫の弾いているバイオリンを触り、指先から音色を判断しようとする、という一芝居をうちにきました。

デリタ姫が弾き終ると、キルケ・ゴールは、〈クレオール〉に騎虎の勢いを装って詰問しました。

「ど、どうですか？　うちの妹のバイオリンの技術は！」

すぐさまデリタ姫は、キルケ・ゴールの発言を、隣にいる〈クレオール〉に「手話」で伝えようと、〈クレオール〉は、微笑しながら、はじめて口を開き、

「……マダマダ粗雑ダガ、イイ音色ヲ出シテイルヨ。コレカラ、君ハモット伸ビル。将来ガ、楽シミダネ」

といきいきと進言しました。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、（罨にかかったな！）と内心、にやり、と笑いました。

キルケ・ゴールは、さっきまでとは打って変わって、冷厳な口調でもって、〈クレオール〉に、とどめの一言を言ってやりました。

「――〈耳がまったく聴こえない〈賢者〉（音楽家）クレオール〉さん。なぜ、音が出ていないにも関わらず、音色なんか分かるんですかね？　……このバイオリン、壊れていて、もうすでに音が出ないんですよ」

デリタ姫も冷酷な表情で、〈クレオール〉に、「最後の手話」で、キルケ・ゴールの言葉を伝えました。

その時点で、――〈クレオール〉の顔から一切の笑みは消え、しまった、罨にかかってしまった、万事休すか、と思ったのか、彼の顔中から大量の冷や汗が流れ落ちていました。

もはや一気に立場は逆転し、今度はキルケ・ゴールたちの方が、余裕の微笑を浮かべ、滝のように冷や汗をかいている〈クレオール〉に、優しく詰問しました。

「――これで、あなたが、〈耳がまったく聴こえない賢者（音楽家）〉でない、ということが完膚無きまでに証明されました。ちなみに、この会話、実は録音テープで記録してありますから、言い逃れは不可能です。ですから、耳がまったく聴こえないフリは、もう止めにしましょうよ。――でも、大丈夫です、安心してください。あなたは、今日中に、この〈ライブニツツ村〉から、出発なさるんでしょう？　それまでは、この秘密を、バラさないで置いてあげますよ。……ただし、条件付き、でね」

これを聞き、今はもうキャラもクソもない、と開き直ったのか、〈クレオール〉は『プチ魔王』の本性である、凶暴性をむき出しにして、

「お前らは、一体なんなんだっ!!　なぜ、邪魔をするんだ!?　俺が、お前らに、何をしたっていうんだっ!!　なぜ、俺の有名になるための道を、ぶち壊そうとするんだ!!」

と絶叫しました。

キルケ・ゴールは、

「――教えて差し上げますよ。こちらへ、どうぞ」

と言い、彼を、朝の太陽の日差しが差し込んでくる、部屋の窓辺に来させて、その「太陽」の眩しい光をバックに、キルケ・ゴールは、すかさず例の〈絵画の額縁〉を、太陽の光を囲うようにあてがい、〈リモコン〉の〈停止ボタン〉を押し、先だって〈サーカス団長〉から教えられた『解体』を始めました。

「なぜ、ウソについて耳が聴こえないフリをしたの？」「……有名になりたかったからだよ」「なぜ、有名になりたかったの？」「俺が住んでいる場所が、世界の片隅だ、ってことに気づいたからだよ」「どうして君が住んでいる場所が世界の片隅だって気づいたの？」「教えねえよ、そんなこと！」「なぜ、教えてくれないの？」「俺とお前では、全然身分が違うからだよ！ お前になんか全然興味ねえんだよ！」「そう？ 君と僕はそっくり似ているのに」「はっ!? 全く似てねえよ！ どういうわけなんだよ、有名人の俺と、平々凡々なクソ野郎のお前如きが似てるってよ！ おい、答えるよ！」「——うーん、それは答えられないですね。いや、というより、答えるのはおこがましい、といった方が正しいかもしれないですね。なにせ君は、僕とは全然身分が違って、僕に全然興味がなくて、クソ野郎だと思っていらっしゃるわけだから、僕の意見なんか、必要ないでしょうから」「いや、答えるよっ！」「なぜ、そんなに怒っているの？」「なんでって、お前が、俺とそっくり似ている、なんてほざいているからだよっ!!」「それっておかしくないかい？ だって、君自身が、俺とコイツとは全然似てない、という自信があれば、そんなに怒らないと思うんだけど」「う、うるせえよ!!」……以下、『解体』の作業は順調に続き、〈クレオール〉の精神を崩壊寸前まで追い込み、ついにキルケ・ゴールは、「とどめの一言」を彼に放ち、〈再生ボタン〉を押しました。

「——君は何者だ？」

——こうして『解体』が済むと、『プチ魔王』であった、クレオール（すでに『分類』から『外れた』のでヤマカッコは外しています）は、憑き物が落ちたかのように、あたりをきょろきょろ見回して、

「……なんだ、俺。……なんでこんなところで、こんな恰好をしてるんだ？」

と呟いたあと、キルケ・ゴールたちの方を見て、

「……あ、あの、私は、なぜ、ここにいるのでしょうか？ すみませんが、教えて頂けませんでしょうか？」

と完全に正気に戻り、キルケ・ゴールたちに、素朴な質問をしてきました。

キルケ・ゴールたちは「事の真相」を全て彼に話したあと、率直に、

「——あなたはなぜ、もともと〈賢者〉（音楽家）でもないのに、こうして〈賢者〉（音楽家）として有名になろうとしたのです？」

と質問しました。

今は単なる青年であるクレオールはうつむき、

「……分かりません、ただ」

と口ごもって、「『ソーシャル2』という、メディアを御存じですか？」

と逆に質問してきました。

キルケ・ゴールは、やはりか、と思いつつ、

「——その存在自体は、知っている。だけど、具体的なことは何一つ分からない」

と彼に言い渡しました。

クレオールは今は正直に、

「『ソーシャル2』というメディアは、不特定多数の人とコミュニケーションが取れるツールなんですけど、それに毎日、出入りしているうちに、『分類』の秘密を知り、そして、いかに自分自身が世界の片隅にいることに不満と劣等感を持ち出し、ムラムラと『ああ、もっと有名になりたい』と思うようになったのです。そうして、気づいたら、……」

デリタ姫はそれを遮るように、

「——『プチ魔王』になっていたのね」

と少し怒った調子で言い渡しました。「あのね、〈元・宮廷音楽家のマルチ・チュード〉先生は、元々は私の音楽教師なの。共犯にさせた罪は重いわよ」

それを聞いて、青年クレオールは頭を抱えて、ああ、と呻き、低い声で、

「——すみません。取り返しのつかない、悪い事をしました。いくら謝罪しても許されることはありません。……僕はもう、故郷の街にすら帰れない……」

と独り言のように呟いていました。

この時点で、キルケ・ゴールたちは、正体不明な、『ソーシャル2』というメディアが、『この世界』に『プチ魔王』を生む、一因になっているであろうことに、かすかに気づきだしたのです。

[i]小波奈子さんの『パーペルヘブンゲート』内より引用。

第三章 〈H系アイドル〉プチ魔王

誰もがみんな変わっても、わたしだけは変わらない唯一無二の存在よ

まるでいつもそこにある星みたいに

H系アイドル ヒロインのH みんなの星よ（スタア！）

誰もがみんな変わっても、わたしだけは変わらない唯一無二の存在よ

まるでいつもそこにある星みたいに

H系アイドル ヒロインのH みんなの星よ（スタア！）

「――もしかして、あんな可愛い、女の子も、『プチ魔王』なの？」とデリタ姫。

「……ああ、信じがたいのはやまやまだけど、間違いないね、この〈プチ魔王マップ〉がそう示しているからね。――言うなれば、『アイドルプチ魔王』、といったところだろうね」とキルケ・ゴール。

彼らが、そう思うのも、致し方ないでしょう。

次なる街である〈グーデン・ベルクの街〉につくやいなや、なにやらポップな歌声が、街中の隅々にまで響き渡っており、その音を辿っていくと、やはり街の広場がステージとなっており、その舞台の中央で主役のスポット・ライトを浴びて熱唱しているのは、1人の〈アイドル〉の女の子、――具体的に描写すれば、〈鮮やかな金色〉に〈カラーリング〉された〈キューティクル〉な髪の毛の上に、〈大きなリボン〉の〈ヘッド・ドレス〉を載せ、体は〈お菓子〉などの〈ポップ〉で〈可愛い〉装飾を施した、〈フリル〉や〈レース〉を多用した〈赤のドレス〉を着ている、一言で言えば、〈ロリータ・ファッション〉に身を包んだ〈アイドル〉の女の子――と、さらにその背後には、4人の地味な同じ衣装を着用した〈バックダンサー〉たちがおり、……その〈アイドル〉集団のステージのライブを見て、街の人たちは、何かに取りつかれているような恍惚な表情を浮かべて、その『アイドルプチ魔王』の歌う曲を異常なテンションで一緒に歌っている、という異様な光景に出くわしたからでした。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、ステージから一番離れた場所にいる、聴衆の一人である、大柄な男に、話しかけてみました。

「――あの、すみません。僕たち、〈旅の者〉なのですが、あの〈アイドル〉の女の子は、いったい誰なんです？」

「え!? 知らないんですか! 〈キャリー・モガ〉ちゃんのことを!」

「――はい、すみません。僕たち、〈芸能チャンネル〉を見ていないもので。……なにせ、〈旅の者〉なので」

「ああ、それじゃ確かに仕方ないですね。〈キャリー・モガ〉ちゃんは、元々〈精神的な病気持ち〉で、何度も〈リスト・カット〉していたような、〈暗い経歴〉の持ち主だったんですが、逆にそんな〈暗い経歴〉が功を奏したのでしょうか、今では〈メンヘラ・アイドル〉として、一躍〈スター〉になり、今では〈H系アイドル〉となった〈時の人〉なのですよ!」

デリタ姫は困り顔して質問しました。

「…あの、〈H系アイドル〉の〈H〉って、なんの〈H〉なんですか？」

「そりゃ〈ヒロイン〉の〈H〉ですよ! 彼女の存在は〈唯一無二〉ですからね! あっ! 見て下さい、〈コール&レスポンス〉が始まりますよ!」

そう言うので、再びステージに目を戻すと、満面の笑みで、ステージ上の〈キャリー・モガ〉ちゃんは、

『今の皆の気分はなんの〈H〉? せ〜の…』

と聴衆に問いかけると、聴衆も満面の笑みで、声を一様に揃わせて、

「ハッピーっの〈H〉!!」

と返しました。

「――これはもう、疑う余地はないね」とキルケ・ゴールは淡々と断案を下しました。「あの〈キャリー・モガ〉とかいう〈H系アイドル〉が、『プチ魔王』だ」

しかし、デリタ姫はなぜか、悲しそうな顔をして、

「……ねえ、キルケ。たとえ、彼女が『プチ魔王』だとしても、今回は、見逃してあげてもいいんじゃないかしら」

と思わぬことを進言してきました。キルケ・ゴールは目を丸くして、デリタ姫の顔を見返して、

「――なぜ？」

と返しました。彼女はもじもじとした調子で、

「……だ、だって、別に彼女は、ことさらに〈悪い事〉をしているわけではないじゃない！ 確かに、〈アイドル〉になりたい、有名になりたい、っていう動機には、なにか異常な病理があるかもしれないけど、前の村の『プチ魔王』だったクレオールみたいに、裏で人を利用したり、詐欺を働いているわけではないわけだし。別に、街中にポップな歌声が流れているぐらい、いいじゃないの…」

と言いました。

キルケ・ゴールは、それを聞き、はあ、と呆れたような顔をして、

「――はい、今の一言で、『アイドルプチ魔王』を『解体』するの、決定ね」

とだけ返しました。

「な、なぜよ！」

「今の君も、街の人も、あの『アイドルプチ魔王』のせいで、〈ヒステリック〉の〈H〉になっているからだ。以上」

デリタ姫はそんな冷淡な一言に激怒し、

「そんなことないわよっ!!」

と、先ほどから冷淡な態度を取る、キルケ・ゴールに、怒鳴り散らしました。

キルケ・ゴールは、（いや、思い切りヒステリックになっているじゃん…）と思いましたが、それを指摘するのは野暮だ、と思ったので、あえて視点を変えて、デリタ姫を説得しようと試みました。

「――あれでしょう、デリタ姫。……貴女、あの、〈H系アイドル〉である〈キャリア・モガ〉ちゃんの境遇に、ご自身の境遇と似たものを感じておられるんでしょう、おそらく。――いや、皆まで言わなくても、分かりますよ。この『分類』のシステムから自由になりたい、と思って、自分勝手に旅に出られたデリタ姫。そして、〈アイドル〉として有名になりたい、と思って『プチ魔王』になってしまった〈キャリア・モガ〉ちゃん、確かに境遇は……」

と、そこまで言いかけたとき、デリタ姫は、

「このバカ！」

と叫んで、バチン！ とキルケ・ゴールのほっぺたを平手打ちしました。

キルケ・ゴールは、突然のピンタに目を丸くして、痛みでじんじんしているほっぺたを手で押さえたあと、――冗談として、わざと目を細めながら、ゆっくりゆっくり、おそるおそる、そのほっぺたを押さえた手を離してゆき、その手に血がついてないかどうか、じっくりと真顔でその手を確認する、という芝居を打ちました。

デリタ姫は、それを見て一言、

「血なんか出ないわよ、あんなピンター発でっ!!」

とさらにぶんぶん怒ってしまいました。

そうです。デリタ姫も、頭では、分かっているんです。『プチ魔王』である彼女を『解体』しなければいけない、ということ。でも、頭で分かっている、デリタ姫にとって〈キャリア・モガ〉ちゃんの存在は、事実、キルケ・ゴールの言う通り、鏡の中のもう一人の自分を見ているようで、どうにもこうにも地団駄を踏みたいような、そんな複雑な心境を抱かせる相手なのでした。

――というような、バカっぱみみたいな口喧嘩を、この〈ガーデン・ベルクの街〉外れでしていたら、二人の（というより、主にデリタ姫の、ですが）声のやかましさが癪に障ったのか、一人の中年の男性が、キルケ・ゴールたちの方を向き、

「おい！ その二人！ さっきから、大声出して、うるさいぞ。おまえらの大声のせいで、街中に響く〈キャリア・モガ〉ちゃんの綺麗な歌声が一瞬、台無しになっちゃったじゃねえーかよ」

といちゃもんをつけてきました。

二人は慌てて、

「す、すみません」

と頭を下げて、謝りました。

その中年の男は図に乗ってさらに続けます。

「――それによ、お前ら、何者なのかは知らねーけどよ、なんで〈キャリア・モガ〉ちゃんの歌声を聞いて、盛り上がり

ないんだ？ 頭、おかしいんじゃないか？ この〈グーデン・ベルクの街〉の住人だけじゃなく、他の村や街の奴らも、〈キャリー・モガ〉ちゃんの歌声に、〈ハッピーっ!!〉って言って心を奪われているのに。ほんと、おかしなやつらだ。――ふん。まるで、〈酒場の息子サルトル〉のようだな」

「サルトル？ …あの、〈酒場の息子サルトル〉さんって、誰なんです？」とデリタ姫。

「あん？ 〈酒場の息子サルトル〉って奴は、この街の中で唯一、〈キャリー・モガ〉ちゃんの歌声を聞いても、ズキューン！ とこない、変な青年のことだよ」

「――それは、なんでなんですか？」とキルケ・ゴール。

「知るか、そんなもん。――ただ、あいつと〈キャリー・モガ〉ちゃんとは、家が近くて、昔からの〈幼馴染み〉の関係で、一時は〈彼氏〉だ、なんて噂されていたから、一気に〈時の人〉になっちゃった〈幼馴染み〉の〈キャリー・モガ〉ちゃんに自分が見捨てられた気がして、落ち込んでいるんだろう、きっと。――だから、毎日、部屋に閉じこもっては、酒ばかり飲んでいやがる。まあ、家が〈酒場〉だから、飲む酒には事欠かないんだろうがな。あはは。馬鹿な奴だ」

「……なるほど、そうですか……」と二人。

その話を聞いて二人は、『プチ魔王』である〈H系アイドル〉の〈キャリー・モガ〉ちゃんの〈幼馴染み〉とかいう、〈酒場の息子サルトル〉君に会いに行くことにしました。きっと、なにか、『解体』するためのヒントを得ることが出来るに違いありません。……辺りは、すっかり夕暮れ時になっており、夜がそこまで近づいておりました。

――余談ですが、彼の家である〈酒場〉は、すぐに見つけることが出来ました。それは、探す最中、「――ねえ、さっきは〈酒場〉の場所を聞かなかったけど、大丈夫？」というデリタ姫の質問に、キルケ・ゴールが、以下のように的確に推理したからでした。「――ああ、大丈夫。普通、〈酒場〉は街の中心部にあるもの。だから、街の中心部を探せばいい。いや、この場合、もっと正確に言えば、街の中心部の『灯りがついていない店』だな。理由は1つ。なに、簡単な話さ。この〈グーデン・ベルクの街〉にいる連中は〈酒〉以上に『酔いしれるもの』を見つけてしまったから、普通ならこの夕暮れの時間帯になら絶対に誰も行くはずの〈酒場〉には行かなくなっている、ゆえに閉店していて『灯りがついていない』だろう、ということ。――つまり、消去法さ」

「――以前は、あんな奴じゃなかった」

と、〈酒場の息子サルトル〉君は、壁に背をもたれ、うなだれるようにボサボサに伸びきった長髪と頭をぐったりと垂れながら、本来〈お客様〉であるはずの二人とは一切顔を合わせず、そう独り言のように言い放つと、また、だらしなく〈一升瓶〉をぐびと飲み干しました。もう、相当に酔っ払っている様子なのでした。

「――というと？」とキルケ・ゴール。

「……野暮な質問だな。俺は、あいつの〈幼馴染み〉だし、あいつのことは誰よりもよく知っている」

「でも今は、あんたのことなんか、〈キャリー・モガ〉ちゃん、鼻にもかけてないじゃない。現実を見なさいよ」と、なぜか手厳しい意見を言う、デリタ姫。

「……あんた、ずいぶん、失礼だな。本当は、〈閉店〉してんだから、あんたら二人を、この店に入れる義理なんてねーのに、迎え入れてやったつーのによ。……ふん。まあ、どうでもいいさ、そんなこと」

「――どうでもいいのなら、教えて頂けませんでしょうか？ 彼女が元々、どんな子だったのか、を」とキルケ・ゴール。

「……ふん。聞いて、驚くなよ。以前のあいつは、ただの〈果物屋の娘ポーボワール〉だった」

「え!! 〈キャリー・モガ〉って、本当の名前じゃないの!!」と驚くデリタ姫。

「……ケッ！ その程度で驚いていたら、今日中に、話は終わらないぜ？」

「まあまあ、そういがみ合わないで。せっかくの酒の席じゃないですか。――では、続きをお願いします」とキルケ・ゴール。

「……女だけじゃなく、あんたも大概だな、おい。俺一人しか飲んでねーのに、『せっかくの酒の席』とか笑顔で皮肉を言いやがって。クソが。まあ、でも、我慢してやるよ。なにせ、『分類』について知っている、数少ない人種同士だからな、俺たちは。――で、どこまで話したっけか？」

「――彼女が〈果物屋の娘ポーボワール〉だった、というところまでです」

「……ああ、そうだったな。つまり、あいつは、ごく普通の、どこにでもいる、一女の村人に過ぎなかったわけだ。ただ

、少しばかり偏った性格の『分類』もオプションとして付けられていた。それは『芸能界チャンネル』を好んで観て、『アイドル』という職業にほんのり憧れを抱いている女の子、っていう『分類』さ。だが、そんな性格のオプションぐらい、『この世界』においては、誰でもつけられている。性格の『分類』においては、なんら特別なことなんかじゃない。――ゆえに、『分類』の存在に気づくまでのあいつは、『有名になりたい!』『アイドルになりたい!』だなんて、『分類』で『規定』されている以上、思えるはずもなかったし、また、それ以上の『欲望』をもてるはずもなかった。……けどよ、今は、ご覧の通りさ。ふん。――ある日から、あいつは、『有名になりたい!』『アイドルになりたい!』の一点張りになって、そのためだったらなんでもする、とか言って、リスト・カットをして、顔も整形して、胸も豊胸手術して、さらに、名前まで実際の『芸能チャンネル』に出てくる、ある『アイドル』の名前をもじった芸名に変えて、〈H系アイドル〉になっちゃった。ケツ。……まったく、笑える話だね。〈H系〉を、皆はバカだから、〈ヒロイン〉の〈H〉だと思っていやがるが、本当は、ただの〈変人〉の〈H〉さ」

「――なるほど。で、そのきっかけはなんだったんです？」とキルケ・ゴール。

サルトル君（彼はすでに〈酒場の息子サルトル〉という『分類』からは『外れて』いましたので、以下、彼のことは、単に、サルトル君、と表記します）は、気持ち悪そうにうなだれたまま、

「……それを答えるには、これを見てもらう方が早いな。俺も、久しぶりにこんな話しながら飲んだから、悪酔いしちゃった。やっぱ、人の悪口を言いながら飲むと、悪酔いするな。うえッ。これ以上、長々話すと、吐いちゃう」

と言い、一升瓶の最後一滴をきわめて苦そうにぐびと飲み干してから、ひどく億劫そうにふらりと起き上がり、千鳥足の状態で、中腰になって、背後のごみの山の中から、がさごそと何かを探り出し、「……おお、あった、あった」と独り言を言うと、ごくごく小さく薄っぺらい『メディア機器』を取り出し、

「…ほらよ!」

と言って、背中を向けたまま、それを、ポイツ、とキルケ・ゴールの方に乱暴に放り投げました。

キルケ・ゴールは、それを危うくもキャッチし、「おお、危ない、危ない。ナイス・キャッチ」とのほほん顔で言いましたが、デリタ姫はカンカンに激怒し、「ちょっと、あんたっ!! いきなりごみを捨てるみたいにぶん投げないでよ!! もし、落として壊れちゃったらどうするのよ!!」と文句を言いました。

そう言われても、完全に出来上がったサルトル君は平然とした調子で、ふらふら状態でぐるりとこちら側へ向き返り、「…壊れねーっての、床に落としたぐらいじゃ。ういっく。今の『ソーシャル2』は耐久性も上がってんだ」

と無然とした口調で言い放ちました。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、ハッ、として、お互いに顔を見合わせて、

「――サルトル君。もしかして、この『メディア』が、『ソーシャル2』、なんですか？」

とおそろおそろ質問しました。

サルトル君は悪酔いの後特有の憂鬱さに襲われているようで、すっかりテンションが下がり、ダウンな様子で、「……当たり前だろ？ お前ら、どこの出身か知らないが、そんなことも知らないのか？」

と冷淡に言い放ち、

「……ゲロを吐いちゃう前に、さっさと説明を済ませておくぜ。その『ソーシャル2』には、様々なカテゴリーごとに、電子掲示板が設置されている。例えば、『勇者板』、だとか、『アイドル板』、だとか。『ソーシャル2』の掲示板に参加する条件は匿名性だ。誰が書いたか分からないし、そもそも何人見ているのかも分からない、というわけだ。そんな『ソーシャル2』の住人たちの煽りによって、あいつは、今ようになった、ってわけだ。ほら、見て見ろよ、その『ソーシャル2』の画面を。あんたら、ラッキーだな。ちょうど、当時、あいつが『アイドル板』に参加し出した頃の掲示板が、偶然保存されているからよ。それを読めば、あいつの『本音』が、あるいは、なぜ、今ようになったのか、が一から十まで分かるぜ」

【『この世界』が、こんなに広がったなんて、わたし、まったく知らなかった。もっと違った人生があったかもしれないのに。悔しい】

【なぜ、私は『こんな世界』の片隅で、その他大勢の平凡な毎日で、一生を終えなきゃいけないの？】

【わたしは、とにかく、有名になりたい。いや、昔から憧れの『アイドル』になりたい。】

【一日を増すごとに、気が狂いそうなほど、有名になりたい願望が膨れ上がっている。理由なんて、どうでもいい。とにかく、わたしは有名になりたい！ ことにもわたしは、世界に知らぬ者なし、というぐらいの、有名な『アイドル』になりたい！】

【……昨日、124番さんから言われた、「『分類』の存在を知った人は、誰でも最初はそう思うのさ。——それにね、『分類』から『外れた』からといっても、別に、あなたに特別な才能が宿るわけではないからね。結局、あなたはあなたでしかないのさ。つまり、『分類』から『外れ』たからって、あなたのスペックは、〈ガーデン・ベルク街〉に住む、凡人でしかないことに変わりはないのだよ。美人でもなければ、ブスでもない、というわけさ。だから、女の子として見ても、あるいは、あなたが熱望している『アイドル』としての『価値』として見ても、——あなたの存在なんか、いくらでも替えが利く、『取り換え可能』な存在でしかないんだよ」という的確な指摘に、わたしはへこんでしまっている。と同時に、確かに、その通りだ、とも思っている。事実、わたしという存在は、『誰であってもいい』ような、『取り換え可能』な存在なのだ…。】

【——才能が欲しい。圧倒的な、才能が。——美貌が欲しい、圧倒的な美貌が。それと、——有名になるための、不幸な経歴が欲しい。】

【——今日から、リスト・カットをすることにした。『過激な経歴』が『アイドル』としての『売り』になるんだったら、わたしは、どんなことでもしてみせる。】

【——今日、とても幸福なことがあった。生涯、忘れられない、記念日、と言ってもいいかもしれない。というのも、『アイドル』を養成する『モデル・プロダクション』の人から、「アイドルになりませんか？」という、お誘いがあったのだ。】

【201番さんは、「…それ、アダルト・ビデオの勧誘なんじゃないの？ 絶対、騙されているよ、やめときな」と指摘してきたけれど、絶対に違う。その詳細は、明日、皆さんにお知らせしたい、と思います。それに、——わたしは、どんな手段を用いても、有名になりたいの！ 別に今更、傷つくことなんて、怖くない。】

【——今日は約束通り、先日の「アイドルになりませんか？」発言の、詳細をお伝えしておきますね。……実は、「アイドルになりませんか？」って勧誘された時に、勧誘してきたスカウトマンの女性の方から、「その気になったら、この名刺に書いてある場所へ来て見てね。全然、見学気分でもいいですから」と言われていたんです。勿論、わたしは一もなく二もなく、行ってみることにしました。——行ってみたら、物凄く綺麗なオフィスでした。壁には映画のポスターがかかっていて、若くて容姿端麗な男女が忙しげに行き来していて、下品な感じは1ミリもなく、清潔な活気で溢れていました。（中略）——『モデル宣伝部』という名刺を渡してきた、サーカス団員風の恰好をした中年男性が、わたしを「かわいいね」と誉めたあと、「——ところで君、アイドルの中でも、『アダルト・アイドル』っていう職業を知っている？ 君は『アダルト・アイドル』に挑戦するのがいいと思っている。お金になるし、いや、そんなことより、そのかわいらしさを活かさないのはもったいなさ過ぎるからね。それにこの世界、経験なんて、まったく関係ないからね。むしろ、変な色がついていたら、逆に売りにくい商売なんだ、この世界は。信用して欲しい。たぶん、君は〈企画単体〉でいける素材だ。君は、その、あか抜けていない、あどけない姿勢で、世界中の人が喜んでくれると思う」って言ってきた。——わたしは、誰かに自分を認められたことがなかったので、喜んでその提案をお受けすることにしました。】

……そこまで『ソーシャル2』を読んで、キルケ・ゴールは、サルトル君の方を振り向いて、「——彼女を勧誘したスカウトマンは、もしかして、サーカス団員の恰好をした、中年男ではありませんでしたか？」と真面目な顔で詰問しました。

サルトル君は、
「……いや、最初にこの街に来て、あいつを勧誘してきた奴は、女の人だったぜ？ 文中にも、ちゃんと、スカウトマ

ンは、女性、と書いてあるだろう？」

とその説をあっさりと否定してきました。

キルケ・ゴールは、

「なるほど」

と言い、「女性をスカウトマンとして使うことによって、彼女を油断させた、ってわけだ」と独り言のように呟きました。

デリタ姫は話に割って入り、

「——一つ前の村の〈ライブニッツ村〉の『プチ魔王』を創り出したのも、今回の〈キャリア・モガ〉ちゃんを創り出したのも、この『ソーシャル2』、ってメディアなわけね。じゃあ、この『ソーシャル2』を作った奴が、一番の『魔王』じゃないのよ！」

と、なかなか的を得たことを言い出しました。

「……考えてみると、確かに、そうだな」とキルケ・ゴールを顎に手をやり、洗面をして考え出し、「——いったい誰が『ソーシャル2』というメディアを創り出したのか？ その点は、当然ずっと気にはなっていたのですが、僕らも『プチ魔王』を倒すことだけで精一杯で余裕がなかったゆえ、聞く機会を逃していたのですが、サルトル君、あなたならば、御存じのほうでしょう。——いったい、誰なんです、この『ソーシャル2』というメディアを創り出した人物は？」

サルトル君は、

「——ヒロユキ、っていう奴さ」

とあっさり答えました。

「ヒロユキ？ 誰なのよ、そいつは！」とデリタ姫。

「…俺も、存在は知ってるけど、どんな奴かは知らねえーよ。……ていうか、俺だけじゃなく、『ソーシャル2』を使っている奴ですら、誰も姿すら見たこともねえと思うぜ」

「……そのヒロユキを見つける手段はないもんなんですかね？」とキルケ・ゴール。

「…たぶん、ねえよ。誰も見たことがねえんだし。それによ、……さっき、お嬢さんが言ったような、『ヒロユキこそが一番の悪人じゃねえか』的な、あるいは、『ヒロユキこそ[i]見えない殺人鬼だ』的な指摘は、ヒロユキには通用しないんだよ」

「な、なんでよっ!」

「……ヒロユキがよ、一度だけ、自身が創った『ソーシャル2』に、自分でコメントを残したことがあるんだ。奴はこう言ってたよ。『——たとえ、このソーシャル2から犯罪者が出て、僕に罪はないですよ。この場合、ソーシャル2は、言わば、武器屋みたいなものですから。剣で人を斬った事件が起きたとすれば、裁かれるのは、その剣で人を斬った人自身であって、その人を斬った人に剣を売った武器屋には全く罪はないでしょう』ってな」

「な、なによ、その勝手な理屈っ—!!」と激昂するデリタ姫。

それとは対照的に、キルケ・ゴールは無言のまま、顎をさすりながら、その、ヒロユキ、という、まだ見ぬ人物の「厄介さ」について、あれこれ思いを巡らせた後、

「……なるほどね」

とだけ呟く他ありませんでした。

……とにかく、あの「ハッピー!!」な「笑顔」をどうにかしなければ、まともな会話すら出来ないし、ましては『解体』すら出来ない…。

——どうする？

キルケ・ゴールはそんなことをしかめっ面で考えているうちに、ふと、「あ！ 良い手が一つだけあるな」と、一つの妙案を思いつきましたので、キルケ・ゴールはデリタ姫に、

「——あの、デリタ姫。唐突ですが、かの、『アイドルプチ魔王』の笑顔を消す方法をあっさり思いついてしまったのですが…」

とやけに言いにくそうに告げました。

デリタ姫は驚いて、

「…な、なによ、その方法って」

と返してきました。

キルケ・ゴールは、デリタ姫の耳元に近づき、その「方法」を、ごによごによと小声で耳打ちしました。デリタ姫はそれを聞いて、顔を真っ赤にして、

「で、できるわけないでしょ、私にそんなことが!!」

と大声で叫びました。

が、キルケ・ゴールは意に返さず、冷静な表情でデリタ姫に告げました。

「大丈夫ですよ、デリタ姫。——だって今のデリタ姫は、内心〈アイドル〉に憧れている女の子と、同じようなものでしょう？ ……そしてなにより、彼女を助けられるのは、似た境遇のデリタ姫、貴女しかいませんし、かつ、助けられる方法は、貴女に活躍してもらう以外、ないのですから」

——そんなこんなで、デリタ姫には『アイドルプチ魔王』に対抗するべく、〈アイドル〉姿にコスプレしてもらうことになりました。

デリタ姫は、頬を真っ赤にしながら、

「……ほ、本当に、これで、いいわけ？」

と言いました。

キルケ・ゴールは、

「——全然OKです。っていうか、うん、完璧ですよ」

と返しました。

キルケ・ゴールは、いかにもな〈ロリータ・ファッション〉である『アイドルプチ魔王』である〈H系アイドル〉の〈キャリア・モガ〉ちゃんとは対照的に映るように、デリタ姫には、おしとやかな、〈紺色がベースの花柄の浴衣〉を着させ、〈黒ぶちメガネ〉をかけさせ、〈紺色がベースの花柄の浴衣〉にぴったり合うような〈正統派なシニヨンアレンジ〉の〈お団子ヘヤー〉をセットさせ、絞めに〈黄色のコサージュ〉をアクセサリとして装飾させました。

「——よし。これなら、デリタ姫がデリタ姫であることもバレないし、相手を『解体』するための罠としても、これ以上ない完璧な罠となることでしょう。それに、デリタ姫。なにより、——『アイドルプチ魔王』より、断然、貴女の方が美しいです」

デリタ姫はさらに顔を赤らめて、

「……本当にあなた、一個人として言ってるの？」

と詰問してきました。

キルケ・ゴールは返す刀で、

「もちろん！」

と笑顔で断言し、「後は、『アイドルプチ魔王』が歌っている歌を完全にコピーしてもらえれば、もはや僕たちの勝利は決まったようなものです」

と付言したあと、ちらと、サルトル君の方を見て、「——サルトル君。君も、この作戦で、異議はないですよ？」と結論を迫りました。

サルトル君は、デリタ姫の美しい和服姿に目を背けながら、朴訥な口調で、

「……別になんでもいいさ。俺には、関係ないことなんだからよ」

とぶっきらぼうな口調で言い、なぜか頬を赤らめました。

もうご承知のこととは思いますが、キルケ・ゴールが考え付いた作戦というのは、デリタ姫に、この〈ガーデン・ベルクの街〉の、南側にある、もう一つの広場に、〈新生アイドル〉としてステージに立ってもらい、例の『アイドルプチ魔王』である〈キャリア・モガ〉ちゃんの歌う歌をほぼ完全にコピーさせて一部だけ変えて歌わせる、というものでした。

誰もがみんな変わっても、わたしだけは変わらない唯一無二の存在よ

まるでいつもそこにある星みたいに

H系アイドル 正統派のH みんなの星よ（スタア！）

誰もがみんな変わっても、わたしだけは変わらない唯一無二の存在よ

まるでいつもそこにある星みたいに

H系アイドル 正統派のH みんなの星よ（スタア！）

キルケ・ゴールの作戦の通り、〈アイドル〉に扮した、デリタ姫が〈ガーデン・ベルクの街〉の南側の広場に出現させると、街の住人たちは、「新たな〈アイドル〉が現れた！」という具合に噂が噂を呼び、あっという間に、南の広場は、大量の聴衆で溢れ返るようになってしまいました。

当然、その聞き捨てならない噂を聞きつけた『アイドルプチ魔王』たる〈キャリア・モガ〉ちゃんは、ぷんぷんお怒りのご様子で、いちゃもんをつけに、この南の広場にやって来たのであります。

「ちょっとっ!! なに、わたしの曲をパクってるのよっ!! いい加減にしなさいよっ!!」

こうして、のこのことと罨にかかりにきてくれた『プチアイドル魔王』たる〈キャリア・モガ〉ちゃんに向けて、〈マネージャー〉の恰好をしたキルケ・ゴールは、

「――ちょっと、勘違いしないでください！ こっちの〈H系〉の〈H〉は〈ヒロイン〉の〈H〉ではありません。〈正統派〉の〈H〉なんです！」

と挑発的なことをわざと言い放つと、『プチアイドル魔王』たる〈キャリア・モガ〉ちゃんは、キルケ・ゴールの目を見て激怒して、

「ふざけんじゃないわよっ!! わたしの方が絶対的に、〈ヒロイン〉でもあり、〈正統派〉の〈H〉だわよっ!!」

と叫び散らしました。

キルケ・ゴールは、（罨にかかったな）と、内心思いながら、隠し持った〈リモコン〉を取り出し、『プチアイドル魔王』に向けて、〈停止ボタン〉を押しました。そして、例の如く『解体』を始めたのですが、――今回ばかりは、『解体』のお約束通りではなく、ちょっとした質疑応答のような形を取りました。そっちの方がより『解体』が難なく済むだろう、とキルケ・ゴールは思ったのでした。

「――君は現在、〈企画単体〉の〈アイドル〉だよな？」

「……所属プロダクションの『ドールズ』から、そう聞いているわ。だから、なんだって言うのよっ!! わたしは一回のステージの〈出演料〉で40万スケール貰っているのよっ!! まさに世間に認められた、有名な〈アイドル〉だわっ!!」

「――悪いけど、僕がマネージメントしている、この浴衣の〈アイドル〉は、一回の〈出演料〉として200万スケール貰っている。なぜなら、〈単体アイドル〉だからね」

「え!？」

「――なるほど、君は知らないようだね。〈アイドル〉には、〈単体〉と、〈企画単体〉と、〈単体〉という、3つの区別があることが。――君はどうやって〈アイドル〉としてスカウトされたんだい？」

「わたしは、……わたしは、すごく綺麗な女の人に、道端で、『アイドルになりませんか?』って、言われたのよ! 他の輩とは違うわ! 物凄く、気品があって、綺麗な女性だったものっ!」

「――分かってないね。それが、〈アイドル・プロダクション〉の常套手段なんだよ。そりゃ、怪しい醜男よりも、綺麗な女の人が声をかけた方が、君みたいな、田舎者の、純朴な女の子は、油断するに決まっているからね。しかも、そんな、田舎者の、純朴な女の子の方が、〈アイドル〉として需要があるし、その無知さゆえに引っ掛かりやすいのは、今も昔も〈アイドル〉業界では当たり前の話だ。君は、そんなことにも気がつかなかったのかい？」

「…そ、そんなこと、関係ないじゃないっ!! わたしは、このステージの〈出演料〉として、〈ドールズ〉っていう〈アイドル・プロダクション〉の事務所から、40万スケールものギャラを貰っているのよ!？」

「――ったく。それだから、君は無知だと言うんだ。君が今、言った発言には、2つの間違いがある。1つは、君は〈企画単体アイドル〉だから、貰ったお金は〈出演料〉じゃなくて、〈日当〉に過ぎない、ということ。2つ目は、君のバックには、〈バックダンサー〉として〈企画〉の〈アイドル〉が4人いたよね? 不思議に思わなかったかい? そこで、〈アイドル・プロダクション〉と〈メーカー〉同士が商談しているんだよ。今回のケースで言えば、君みたいな〈企画単体〉1人が〈1ステージ〉、それに加えて〈単体〉、つまり、無名であるが、ほとんど同じビジュアルを持つ〈単体アイドル〉を4人加えて欲しい、という君の〈アイドル・プロダクション〉事務所の意向で、本当はこのステージの企画は、君という〈企画単体アイドル〉×1=40スケール+〈企画アイドル〉（一人10万スケール）×4=40万スケール、合わせて、80万スケールの企画だったんだよ」

「え!? ……じゃ、じゃあ、その半分の40万スケールは、どこへいったのよっ!」

「――その50%は君の所属している〈アイドル・プロダクション〉が搾取している。さらに言えば、その25%は、〈スカウト・バック〉と言って、君をスカウトした人、つまり、〈スカウトマン〉たる、その女性に還元される仕組みになっているんだ。――つまり、君はカモにされていた、というわけだ。君は、君自身の歌の中で、『みんなの星よ（スタア!）』と歌っていたけれど、まあ、君みたいな存在は、それこそ星の数ほどいて、『取り換え可能』ってことさ」「な、なんですって!!」

――という具合に、前回の、〈ライブニッツ村〉の『プチ魔王』と、同じようなやりとりを経たのち、キルケ・ゴールは、本格的な『解体』作業を始めました。

「そもそも君はなんで〈アイドル〉を目指すの?」「有名になりたいからよ!」「なんで有名になりたいの?」「それが私の幸せだからよ!」「なぜ、〈アイドル〉になると幸せになるの?」「決まってるでしょ、そんなこと!! 皆から愛されるからよ!!」「じゃあ、僕も君を愛してもいいわけだね?」「それは、嫌! 別に愛されなくていいわよ、あんたになんてっ!!」「あれ、矛盾してない? 皆から愛されるから、〈アイドル〉をやっているんだよね? 僕もその皆の一人なんだけど?」「うるさいわね、私は個人じゃなく、集団から愛されたいのよ!」「じゃあ、個人から愛されなくてもいいわけだ?」「当たり前でしょうが!」「じゃあ、君の幼馴染みであり、ずっと君の身を案じてくれてきた、サルトル君からはもう愛されなくていいわけなんだね?」「いいわよ、あんな奴なんて!」云々――。

そして、『プチアイドル魔王』たる〈キャリア・モガ〉ちゃんが「言葉」を失ってから、例の如く、彼女の「答え」を、一つ一つ裏返して「否定」していく「作業」に入りました。

「有名にならない方がいい」「〈アイドル〉になっても幸せにはならない」「皆からは愛されない方がいい」…等々。

勿論、彼女は必死になって、キルケ・ゴールの「答え」を「否定」してきましたが、徐々に、その「否定」の声にも力がなくなっていきました。

そして、「決め手」となる一言で、キルケ・ゴールは、彼女に完全なる「とどめの一撃」を差しました。

「――君は、君の幼馴染みであり、ずっと君の身を案じてくれてきた、サルトル君と別れない方がいい」

彼女は耳を塞ぎ、呻き始め、ほとんど「壊れる寸前」でしたが、これではまだ、『解体』は終わった、とは言えません。キルケ・ゴールは、今度は、〈リモコン〉の〈巻き戻しボタン〉を押し、「最初の会話のやりとり」まで時間を戻し、〈再生ボタン〉と共に、例の決め台詞を吐きました。

「――君は、何者だ?」

……『プチアイドル魔王』たる〈キャリア・モガ〉ちゃんを『解体』し終ると、派手な化粧が落ち、頬がこけ、顔色の悪い、元のひどい顔に戻ってしまいました。

そして、やはり例の如く、憑き物が落ちたような表情に戻り、

「――ん? あ、あれ? 私、どうしてたのかしら?」

と、何事もなかったかのようなことを言いました。今はもう、〈H系アイドル〉でもなんでもなく、ただの、〈果物屋のボーボワール〉に戻っていました。

キルケ・ゴールは、彼女に、諭すように言い渡しました。

「――貴女は、『プチ魔王』になっていたんですよ、今の今まで」

デリタ姫はその言葉に付け足すように、

「この街の皆、あなたの歌声に洗脳されていたのよ」

とやけに寂しげなトーンで申し渡しました。

今は〈果物屋のボーボワール〉たる、その女の子は、

「……そうだったんですか」

とだけ呟き、茫然としていました。「――わたし、『ソーシャル2』を知るようになってから、『この世界』の広さを知って、このまんま、こんな世界の片隅で老いて死んでいくのは嫌、とか思って、次第に、『有名になりたい!』っていう欲望がすごく強くなってしまったんです。……その後のことは、まったく覚えていないんですけど…」

キルケ・ゴールは、彼女の幼馴染みたるサルトルを指さして、

「――とにかく、これからは、貴女の、幼馴染みである、サルトル君を、大事にして、暮らして行ってくださいね。彼の情報がなければ、僕たちは、貴女を『プチ魔王』から『解体』することは出来なかったんですから」

と真面目な顔で言い渡しました。

ついさっきまで『プチアイドル魔王』だった、ポーポワールという女の子は、初めて会った人を見るかのような眼差しで、幼馴染みのサルトル君の方を見ました。

サルトル君は、照れたのか、ぷい、と顔を背けて、ふん、と言って、意地を張り、

「……夢と有名。困難な混乱だな」

と、独り言のように呟きました。

その言葉を聞いて、『解体』された直後の『プチアイドル魔王』たる、ポーポワールは、虚ろな目線になり、ぼそり、と一言、

「……わたしは、単なる商品だった、ってわけね」

と言いました。

サルトル君は、ケツ、と自嘲し、

「……やっと気づいたか、このバカが。しかも、熟れに熟れた売れ残り、だと、勝手に思い込んだ、ってわけだ。——人間なのによ」

と返しました。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、その二人の様子を、遠目に微笑まじげに眺めていました。

キルケ・ゴールは、『プチ魔王マップ』を取り出し、この〈ガーデン・ベルクの街〉の『プチ魔王』がいる証拠である「赤色の○」がなくなり、ただの「透明の○」に戻っているのを確認して、

「——ふう。とりあえず一件落着、かな」

と呟きました。

が、それなのにデリタ姫は、

「ええ～っ!? 私は、このまま、この〈ガーデン・ベルクの街〉の〈アイドル〉になってもよかったのに～」

と言って、駄々をこねているではありませんか。

キルケ・ゴールは冷や汗をかいて、

「何を言っているんです！　そもそも貴女が〈王女様〉であることがバレなかっただけでも奇跡だったのに！　それに、忘れてしまったんですか!?　もうすぐ、〈ライト・ノベライズ王国誕生祭〉が、『分類』通り、開かれるんですよ!?　僕、いや、貴女に残された冒険の時間は残り少ないんだ！」

と、思わず、本音を吐いてしまいました。

デリタ姫は、ぷう、と膨れた顔をして、

「——ちえ、そんなこと、分かっているわよ！」

とふてくされた口調で言ったあと、急に、〈アイドル〉のように、鮮やかにぐるりと一回転してみせたあと、頬を少し赤くし、キルケ・ゴールをからかうようなおどけた口調でもって、

「——君さ、今、私のパンツ、見たでしょ？」

と呟きました。

キルケ・ゴールは、ドキッ、としましたが、強いて冷静を装い、

「……い、いや、見てないですよ」

と返しました。

しかし、デリタ姫は、うふふ、と笑って、

「——ウソね。だって、見てない人は、『なんのこと？』って言うのよ」

と、なぜか、るんるん気分で言い返してくるではありませんか。

我らが主人公たるキルケ・ゴールも、この態度には頭を抱えざるを得ず、（この人はどんな『プチ魔王』よりもタチが悪い…）と小さな声で呟く他ありませんでした。

第四章 『分類』外しの旅の終わり

――さて、ここまで、長々とこの手記を読んできた貴方、お疲れ様でした。

この章において描かれる、この〈ライト・ノベライズ王国〉の極北に位置する〈ヤケノハラの街〉における『プチ魔王』退治をもって、我らが主人公たる、キルケ・ゴールとデリタ姫の二人旅は、ひとまず「終わり」となります。

正直に言いましょう。

この〈ヤケノハラの街〉の実情を記すことは、あまりに悲惨であり、あまりに非道徳的であり、あまりに不謹慎なので、私自身、あまり気が進まないであります。しかし、ここを通り過ぎなければ、もっと悲惨である『分類』がなくなった後の世界について記すことが出来ませんので、嫌でも書かざるを得ないところであります。

それほど、この〈ヤケノハラの街〉という巨大な街には、まさに『分類』の力の「極北」とも言うべき、悲惨な人間模様が展開されておりました。

なぜとって、〈ヤケノハラの街〉は〈テーマパークの街〉ゆえに、それこそ例の〈親ガメと子ガメの話〉の如く、傍から見れば〈悲惨極まりない事実〉も〈笑い事〉に『分類』され、〈悲惨極まりない話〉も〈笑い話〉に『分類』され、加えて、おそらくこの〈ヤケノハラの街〉に住む住人たちには〈ハッピーにふるまえ〉という「性格」の『分類』がなされているのでしょ、皆が口々に狂ったように「ハッピーっ!!」と叫んでいるのですから。

――〈悲惨極まりないこと〉は、街の入り口からして、徹底されておりました。

この〈ヤケノハラの街〉の入り口には、〈マスコット・キャラ〉あるいは〈ゆるキャラ〉として、〈ホモ・ファーベルちゃん・ホモ・ルーデンスちゃん〉が、満面の笑みで「ハッピーっ!!」と叫び、〈赤い風船〉を渡して迎え入れてくれるのですが、……その〈ホモ・ファーベルちゃん・ホモ・ルーデンスちゃん〉は、下半身が繋がった、いわゆる〈結合双生児〉だったのです。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、表面上は平静を装い、ひきつらせた笑顔を浮かべては、「は、ハッピー……」と返すのですが、内心の動揺は隠すべくもなく、デリタ姫は青ざめた顔をして、

「……ここに『プチ魔王』が現れても、ここの住人たちは、きっと笑っているんでしょうね……」

と呟きました。

キルケ・ゴールも同じく青ざめた顔をして、

「…ああ。――おそらく、誰かが刺されたり、殺されても、笑って、『ハッピーっ!!』と叫んでいるんだろう。……そういう意味では、君が〈笑わないお姫様〉のままだったら、即、正体がバレていたかもしれない」

と真剣に呟きました。

「…笑えない冗談ね、もう」

「……それはともかく、もはや、『プチ魔王』たちの『分類』を『外す』だけでは、ダメみたいだね、この状態じゃ。この〈ヤケノハラの街〉、いや、『この世界』の人々にかかっている『分類』を全て外さない……」

しかし、『プチ魔王』という「個人」ならともかく、どうやったら『この世界』自体の『分類』を外せるのか、と考えると、その時点では、キルケ・ゴールにはなんのアイデアも浮かびませんでした。

という具合に、二人とも、かなりテンションが下がった状態で、とぼとぼと変装した格好で街の入り口付近を歩いていると、急に前方から、「ハッピーっ!!」と声が裏返るほど叫びながら、一人の車椅子に乗った若者がやってきました。

二人は、びくっ！ と本気で驚き過ぎて、笑顔どころか、「ハッピーっ!!」という言葉すら出てきませんでした。

「ハイハイハイっ!! どうしたの、そんな暗い顔して、お二人さんっ!! おっ！ 彼氏の方は、〈孤高の旅人さん〉、そんで、隣のサングラスのお嬢さんは、さしずめ、〈白血病のお嬢様〉ってとこかな？ うん、うん、なるほど、〈健常者〉と〈障害者〉の違いに悩んでるんだね?! なあに、大丈夫っ!! だってこの〈ヤケノハラの街〉では、そんな〈差別〉は一切ないからネ！ この〈ヤケノハラの街〉は〈平等主義〉なんだからっ!! ほら、その証拠に、あそこの広場を見てごらんよっ!!」

先刻からドン引きの二人は、彼の怒涛のようなお喋りを、「…は、ははははは」と顔をひきつらせて精一杯苦笑いしながら、彼が指さす広場の方を見ました。

広場のステージ上には、二人の「人間」がいました。左にいる一人は、物凄くデブの大男でした。そして右にいる一人は、おそらく女性で、顔は包帯でぐるぐる巻きになっており、車いすに乗っていました。当然、二人とも満面の笑みで笑っておりました。その広場の周囲には、〈ハロウィン〉に使われる〈かぼちゃ〉の〈ぬいぐるみ〉たちが〈お花畑〉

のようにぐるりを囲んでおりました。

キルケ・ゴールはそれを見て、

「……この街を『分類』した『創造主』は、相当な悪趣味だな…」

と呟きました。

デリタ姫は、

「…なんで？」

と問い返してきました。

「――〈かぼちゃ〉は〈中身がないもの〉の比喩、つまり、ここにいる連中は〈頭が空っぽだ〉ということを『分類』によって暗示し、皮肉っているんだよ」

「……」

やがて、ステージ上の二人は、お互いの顔を見合わせると、「あははははっ!!」と大笑いし出し、二人とも「ハッピーッ!!」と叫び合い、そして、それを聞くやいなや、そこに集まった群衆たちも、それに合わせて、「ハッピーッ!!」と声が裏返るほど叫び狂い出しました。そして、まず右の包帯の女の子の方が、集まった観衆に向かって、スピーチをいたしました。

「――私は、この隣にいる男性によって、顔をぐちゃぐちゃに刺されました。だけど、〈聖書〉によって救われましたっ!!」

すると、間髪入れずに、隣にいる太った大男が、スピーチいたしました。

「――俺は、右にいる女の子に通り魔をして、逮捕されました。だけど、獄中、〈聖書〉によって救われましたっ!!」

そう叫び終わると、観衆は、「あははははっ!!」と大笑いし出し、やはり「ハッピーッ!!」と声を裏返して叫び出すのでした。

デリタ姫はそれを見て怒りを覚え、

「なによ、その話っ!! 被害者はともかく、加害者まで救われちゃダメでしょう!!」

とキルケ・ゴールに向かって、怒声を発しました。

が、キルケ・ゴールは冷静に、

「――さっきの車いすの奴が、言ってた通りさ。この〈ヤケノハラの街〉は〈平等主義〉なんだ。だから、どんな釣り合わないものだって〈平等〉になるんだろう」

と返しました。

すると、デリタ姫は、カチン、ときたようで、

「そんな理屈、関係ないわよっ! 私は許せないわ、あの太男はっ!! 女の子をあんな風にしてっ!! ぶん殴ってやるんだから!」

と言って、ぐーをつくって、殴りに行こうとしたので、キルケ・ゴールは慌てて両手でデリタ姫の肩を両手で掴み、その暴走を止めようとしてました。――そのとき、入り口で貰った〈赤い風船〉が、二人の手から離れて、二つ、空に飛んでいってしまいました。キルケ・ゴールとデリタ姫は、それに気づき、あ、と言い、青空に飛んでいってしまった〈赤い風船〉の行方を、茫然と、そして、寂しげに眺めました。

が、それを見た他の連中どもは、

「あははははっ!! ハッピーッ!!」

と笑い叫んでいるではありませんか。……『分類』上は〈幸運の象徴〉である〈赤い風船〉を失った、というのに…

…。

一事が万事この通りなのです。

他にも、例えば、地下にある〈クラブ文化〉が〈葬式場〉と混ざり合っており、〈DJ〉が〈和尚様〉として、〈南無妙法蓮華經〉を、〈DJプレイ〉で「なむなむ、あみあみ、ほうれん、げきょ、げきょっ」という具合に〈スクラッチ〉を利かせるたびに、観客は殺人的に盛り上がっていたり、――例を挙げれば枚挙に暇はありません。とにかく、この〈ヤケノハラの街〉のあまりの悲惨さに、キルケ・ゴールとデリタ姫はどンドン頭がおかしくなりそうになっていきました。

しかしながら、キルケ・ゴール自身は、内心、以下のようなアンビバレントな感慨を覚えたことも事実でありました

。

説いて曰く、もし仮に彼自身が、例の〈サーカス団長〉によって『分類』の存在を教えられ、かつ、彼自身が完全に『分類』から『外れ』ていなければ、悲しいかな、実際にこの〈ヤケノハラの街〉へ出かけに行く、という「選択肢」自体、『分類』による言動の規制上、あり得なかったことなわけですから。

――さて、話を本筋に戻しましょう。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、この〈ヤケノハラの街〉の文化に接するにつれ、神経がやつれ、疲れ切ってしまいましたので、キルケ・ゴールはひとまずデリタ姫に、

「……デリタ姫。疲れたでしょう？ 正直、僕は神経が参ってしまいました。ちょっと、そこの喫茶店で、一休みしませんか？ どうです？」

と問いかけてみましたが、デリタ姫も疲れ切った表情で、うん、と小声で頷き、

「…異議なし、だわ。私ももう、息苦しくて、窒息しそうだから」

とあっさり了承しましたので、二人は、近場にある〈喫茶店エルゴー・スム〉という喫茶店に入ることにしました。が、店に入ると、カウンターを含め、ほぼ全席埋まっている状態でした。ほぼ、というのは、一番入り口に近い席と、カフェの奥まった窓際の席に限っては、客が一人しか座っておらず、相席が可能だったからでした。

キルケ・ゴールは、

「――あの、窓際の席の人に、相席できるか、頼んでみよう」

とデリタ姫に告げ、デリタ姫の手を連れて、その奥まった窓際の席に、背を向けて座っている、男性とおぼしき客の正面に回り、ごほん！ と一つ決意の咳をした後、思い切って声をかけました。

「…あの、すみません。相席、よろしいでしょうか？」

すると、その男の客は、二人のことなど眼中にないかのように、まったく顔を上げることもなく、なにやら大型の『メディア端末』をいじり続けながら、飄々とした調子で、

「――別に、構いませんよ、どうぞ」

とだけ言って、キルケ・ゴールたちのことを一向に見る様子もなく、手で、どうぞ、どうぞ、のジェスチャーをして、呆気ないぐらい気軽に承諾してくれるのでした。

キルケ・ゴールとデリタ姫二人は、お互いに顔を見合わせ、ほっ、と胸をなでおろし、安心して開いている席に座りました。

少し肩の荷が下りた気持ちになり、二人が、はあ、疲れた、と言って、ぐったりしていると、ややあって、店員さんが注文を取りにやってきました。

「ハッピーツ!! ご注文は何に致しましょう?!

キルケ・ゴールは多少たじろぎながらも、小声で、ハッピーツ、と言い、歪んだ愛想笑いをして見せたあと、

「アイス・コーヒーを二つで」

と言うと、かしこりましたっ! ハッピーツ!! と大声で言って、その店員さんは機械のような動作でもってその場から去っていきました。

キルケ・ゴールは、変装で用いていた、シルクハットの帽子を取り、その帽子でもって自身の体に風を煽ぎ、暑い、暑い、と呟いたあと、ふう、とため息を吐き、机の上に、そのシルクハットの帽子を、ぽん、と置き、デリタ姫は、この店の雰囲気に対する多少の気まずさもあったのでしょうか、机の隅に置いてある白いおちょぼ口の容器の蓋を少し開けてみたりしていました。

すると、――目の前の座っている男が、突然、飄々とした口調で、やはり、1ミリたりとも二人のことを見ることなく、質問してきました。

「――あなた方、もしかして、張り込み中の刑事さん、ですか？」

キルケ・ゴールは、どきっ!! と冷や水を浴びせられたような衝撃を受けましたが、強いて冷静を装い、微笑しつつ、男の質問に質問で返しました。

「…え？ なぜ、僕らが刑事だと思ったんですか？」

謎の男は、能面のような飄々とした表情を崩さず、淡々とした口調で、

「――あなたの靴、すり減っていらっしやるから」

と返してきました。

キルケ・ゴールは返す刀で、

「……失礼ですが、それだけでは、僕が刑事である、という証拠にはならないと思うのですが。靴が汚れているなら、ただ単に、金がないだけ、かもしれませんし…」

と返しました。

男は飄々とした笑顔で、

「――ふふ。お金のない人は、メニューも見ないで、アイ스티ーは頼みません」

と切り返してきました。

キルケ・ゴールも、この辺りから少しむかっとしてきて、前のめりになり、

「……いや、それだけでは、歩き回る仕事、ということしか、分からないですよ？ 外回りのサラリーマンかもしれないわけですし」

と、ちょっと語調を強めて、詰問してしまいました。

男は相変わらず飄々とした調子で、

「――ふふ。かばんを持っていない外回りのサラリーマンは、いません」

とだけ言いました。視線は、相変わらず謎の『タブレット端末』に落としたままで、まるでキルケ・ゴールのことなど見ようともしません。

「……確かに。でも、それだけだと、まだ、僕が刑事である、という証拠にはならない、と思うんですが？」

「――あなた、この席に座った直後に、帽子を脱ぎ、顔を煽いでいたほど、暑がっていましたよね？ でも、その厚手のコートを着たまます。おかしいですね、うふふ」

「……なるほど。つまり、この厚手のコートの中に、刑事の大切な道具がしまっている、と。そう言いたいのですよね？ あなたは」

「――そういうことです。僕のことなんか気にせず、張り込み、頑張ってくださいね」

「……聞き忘れていましたが、なぜ、張り込み中だ、と分かるんです？」

「――あの、すみません。相席の相手の質問に、いちいち答えなくちゃならないんですかね？」

「どうかお願いします。知りたいんです」

「――簡単ですよ。ここに座ったから、です。ふふふ」

「……どういうことですか？」

「――相席なら、入り口に近い席でも出来ますでしょう？ でも、あなた方はそれをせず、僕のところに来ました。考えられる理由の一つ。――ここからなら、入り口が見えるからです。以上です」

「いや、そうとも限らないんじゃないですか？」とデリタ姫が口を挟みました。「常連ならば、ここの席に座ってもおかしくないんじゃないでしょうか？」

「――あなた方は、常連じゃないです」

「…なぜ、そう言い切れるんです？」

「――常連ならば、」と男は言って、片手でおちよぼ口の白い容器の蓋をひょいとあげて、「ここに何が入っているのか、知っているはずですから」と言い切り、静かに容器の蓋を、かちり、と閉めました。

男は相変わらず、顔を上げることなく、謎の『タブレット端末』いじりに没頭しているだけでした。キルケ・ゴールたち二人は、顔を見合わせて、啞然としてしまいました。

キルケ・ゴールは黙って考え始めました。

――この人は、何者なんだ？ 少なくとも、この〈ヤケノハラの街〉の『分類』から『外れ』た者に違いない。それは、実は相席の選択肢の時点で分かっていたことなのだ。僕がここを選んだ一番の理由は、入り口付近の相席できる客の方は「ハッピーッ!!」と声を裏返らせて叫び狂っていたのに対し、この奥まった窓際の席に座っていた彼の方は、一切「ハッピーッ!!」とも言わず、そして、狂ったように笑っていなかったからなのだ。その時点で僕は、この人は『分類』の存在を知っており、『分類』からすでに『外れ』ている人に違いない、と確信していたのだ。

しかし、この『分類』の存在のことを、彼にどう質問していいものか。

たとえ、彼に『分類』のことを持ち出しても、また、飄々とした調子で、しらをきるかもしれない。

――などと考えた末にキルケ・ゴールは、

「…あなた、さすがですね。ほぼ、当たってますよ。でも僕は、刑事ではないですよ。それに近い存在ではあるんですけどね。いかに頭の良いあなたでもご存じないかもしれませんが、僕は『解体屋』という職業なんです」

と切り出しました。

すると男は、

「――『カイトイヤ』？ ふむ。確かに、聞いたことがない『分類』ですねえ」

と呟きました。

かかったな、と思い、キルケ・ゴールは騎虎の勢いで、

「……『分類』？ 今あなた、『分類』って、仰いましたよね？ なぜ、あなたは、『分類』の存在を御存じなんです？」

と詰問しました。

が、男は、飄々としたニコニコした笑顔でもって、

「――ははは。それは、分かりますよ。この〈ハッピーッ!!〉と〈笑い〉に『分類』された〈ヤケノハラ〉の街で、あなた方だけ、違う態度でしたから」

と返してきました。

「…いいえ、違います！ そうじゃなく、なぜ、あなたが、『分類』の存在を知っているのか、ということを知っているんです！」

「――そりゃ、『分類』から『外れ』ている、からじゃないですかね？ ーあの、そろそろ帰ってもいいでしょうか？」

もう、そろそろ店を出ないといけないうでね」

「…い、いや、そういうことじゃなくて！」とキルケ・ゴールは叫び、必死の形相で男を引き留めました。「……いつたい、あなたは、何者なんです？」

「――それを答えたら、帰ってもいいですか？」

「…は、はい！」

男は、例の謎の大型の『メディア端末』を小脇に抱えながら、すっと席を立ち、飄々と店の出口まで歩いて行ったかと思うと、踵を返し、キルケ・ゴールたちの方をはじめ見て、ぼそり、と、

「――ヒロユキ、です。それじゃ」と呟いたかと思うと、独り言のように、「……あっ、もうすぐ来るか、ラスボスが」

そう言い残して、謎の男は、そそくさと店を出て行ってしまいました。

「ん？ ーヒロユキ？ ……ヒロユキ、……あっ!!」

とキルケ・ゴールとデリタ姫は、ほぼ同時に驚きの声を発しました。「ヒロユキって、『ソーシャル2』を作った人じゃないのよ！」とデリタ姫。

キルケ・ゴールもそれに気づいて、すぐさまヒロユキの後を追いかけてやりましたが、やんぬるかな、このタイミングで、店員さんがそそくさとやって来て、

「ハッピーッ!! 相席の方のお会計も、お願いしますね~!!」

と言ってきました。二人は、「え？ あの人の分も払うの？」と茫然とした顔で言い、がくっ、と落胆致しました。

「――まったく、とんだ濡れ衣だわ。こんなこと、王室内じゃ、あり得ないことよ。……いや、それなことよりも…」

「……ああ。あんな男が、『ソーシャル2』の創設者のヒロユキだったとは、ね…」

「…それこそ、さっきの推理の問答じゃないけど、なぜ、彼は、この〈ヤケノハラ〉にいて、あの喫茶店にいたのかしらね？ ……もしかして、私たちがこの街に来ることを把握してた、ってことはない？」

「……ああ、その可能性も、十分にあるだろうね。が、実際のところは、藪の中、僕たちには分からないことだ。――だが、もし仮にそうだったとしたら、もっと恐ろしい仮説が立てられる…」

「ど、どういうことよ？」

「……あいつは、……ヒロユキは、どういう意図なのかは知らないが、もうすぐこの〈ヤケノハラ〉の街に、『プチ魔王』が出現することを、僕らに暗に知らせたんだと思う…」

「な、なによ、それ！ 全然、意味が分かんないよ、なにを根拠にそんなことを言っているのよ!」

「……ヒロユキは、僕たちと相席していたとき、ずっと何かの『メディア端末』を見て、指でいじって操作していただろう？ そして最後、去り際に、『あっ、もうすぐ来るか、ラスボスが』、と呟いていただろう？」

「いや、それは彼がやっていた〈ゲーム〉への感想でしょう？」

「……まさに、そうなんだ」

「え？ どういうことよ？」

「……ヒロユキ、あいつにとっては、『ソーシャル2』という『メディア』を操って、多くの人の『分類』を外させ、『プチ魔王』化させること自体が、〈ゲーム〉なんだよ、多分…」

「そ、そんな…」

「……僕も信じたくないが、この〈プチ魔王マップ〉を見たときに、そう直感したんだ」

そう言って、キルケ・ゴールは左ポケットから、〈プチ魔王マップ〉を取り出し、テーブルの上に置き、デリタ姫に見せ、説明を始めました。

「——これを見れば一目瞭然さ。これまで倒してきた『プチ魔王』がいた街は、この地図上では、なんの色もついてない、ただの『○』になっているだろう？ この〈プチ魔王マップ〉において、『赤い色の○が点滅』しているのは、今、僕らがいる、この〈ヤケノハラ街〉だけなんだ。……つまり、この〈ヤケノハラ街〉の『プチ魔王』が、最後の『プチ魔王』なんだ…」

「…じゃあ、彼の呟いていた『ラスボス』っていうのは…」

「——ああ。十中八九、この〈ヤケノハラ街〉の『プチ魔王』が、『ラスボス』ということだ…。しかも、だよ。彼は、『あっ、もうすぐ来るか、ラスボスが』と呟いていた。つまり、——まだ、この街には『ラスボス』は来ていない、ということなんだ…」

「え!! じゃ、じゃあ、なんで〈プチ魔王マップ〉の○が赤く点灯しているのよ!」

「……おそらく、答えは一つ。これからやってくる、『ラスボス』以外に、この〈ヤケノハラ街〉の中に、すでにもう一人、『プチ魔王』が存在している、ということだ」

「『プチ魔王』が、二人いる、っていうの？」

「……ああ。おそらく、そうだ」

「……なんでよっ! もうすでに、この〈ヤケノハラ街〉に『プチ魔王』の一人がいるのなら、なんで、私たちは気づいていないのよっ!」

「……それは、僕にも分からない。……ただ、僕の考えだと、たぶん、もうすでにこの〈ヤケノハラ街〉に出現している『プチ魔王』は、『ラスボス』が突然襲ってきても失敗しないように、『スパイ役』として、この街にあらかじめ潜入し、この〈ヤケノハラ街〉に関するあらゆる情報を把握して、『ラスボス』に内通する係りで、その『プチ魔王』としての『魔力』を、隠しているんだと思う…」

「そ、そんなことができるの？ 今までの『プチ魔王』たちは皆、はじめから暴走していたって言うのに!」

「……。それが、いるんだよ…。そんなことが、できる奴らが…」

「——キルケ、あなた、もしかして、何か心当たりがあるの？」

「……」

勿論、先ほどからキルケ・ゴールの頭に浮かんでいたのは、〈タブラ・ラサの村〉で離れ離れになり、以降、音信不通になった、例の親友二人のことでした。

キルケ・ゴールは冷や汗をかきながら考えます。

——おそらく、ヒロユキは、ソーシャル2の創始者だろうが、しかし、そこの掲示板に書き込んでるのは、別の輩たちだろう。しかも、面倒なことに、そこに大量の匿名者が書き込んでいる可能性は低い、と考えるのが妥当である、という結論に至ってしまう。なぜなら、『ソーシャル2』の存在を知っているのは、『分類』から『外れ』た人のみだからだ。さらに、『分類』から『外れ』た者で、悪意（あるいはただの好奇心か）を持って、『分類』で管理された『この世界』の本当の正体を、『ソーシャル2』という、「裏」の『メディア』上で広め、『分類』から『外し』た上で、ことにも若者の「有名になりたい」という「功名心」をうまく「煽る」ことにより、新たな『プチ魔王』を出現させようと企画する者、となると、数は限られてくる。

おそらく、——犯人は例の〈サーカス団長〉だ。ゆえに、〈サーカス団長〉とヒロユキは「蜜月関係」だ。しかし、〈サーカス団長〉とヒロユキが、どういう関係なのか、までは分からない。なぜなら、お互いの『分類』を『外す』理由の方向性、つまり、理由が違う、からだ。〈サーカス団長〉の場合、『この世界』の真実である『分類』を暗に示すような〈一口話〉を『この世界』に地味に流布させたりしているところを見ると、おそらく『この世界』の『創造主』の正体を知っているし、その『創造主』に対する最大限の抵抗として、『分類』外しをしている、と考えられる。

だがしかし、ヒロユキは、違う。彼は、きっと、『この世界』の『創造主』を、知らないだろうし、もとい、知って

いようがいまいが彼にとってはどうでよく、無目的に、単なる「いたずら心」から、『分類』外しの手助けをしているふしがある。いわば、彼は「突然変異」的な存在なのだ。

――いやいや、今はそんなことは、どうでもよい。今、火急の問題は、この〈ヤケノハラ街〉を襲おうとしている『プチ魔王』は、十中八九、〈タブラ・ラサ村〉の、親友である〈剛毅なデカルト〉と〈卑屈なスピノザ〉の二人であり、そのうちの一人は、すでにこの〈ヤケノハラ街〉の、しかも、今、僕たちがいる場所の近くに潜伏している、ということなのだ。

そんなことを考えた末に、キルケ・ゴールは店員さんに、

「――あの、すみません。この店で、〈一番偉い人〉を、呼んできてもらえますか？」

ときわめて自然な態度で質問しました。

店員の男性は、虚をつかれたような顔をして、

「え!! 〈店長〉を、ですか!! そんなことをオーダーしてきた人は、あなたぐらいですよ! かしこまりましたっ!! ハッピーっ!!」

と叫んで、スタスタと厨房の方へ歩いて行きました。

キルケ・ゴールはその姿を見送ったあと、両手で自身の顔を覆い、独り言のように、

「……そりゃ、驚くだろうな。この〈ヤケノハラ街〉は『分類』のプログラムによって行動しているのだから、〈店長〉を呼ぶ奴なんかいるわけないからね」

と言って、はぁ、と一つ、大きなため息を吐きました。

デリタ姫は、

「――じゃあ、その店長が、『プチ魔王』の一人、だっていうの？」

と問いかけてきました。

キルケ・ゴールは両手で顔を覆ったまま、

「……おそらく、だけどね。……あいつが、『分類』上、接客業の息子だった、ということもあるけど、そんなことより、〈店長〉という立場は、この『分類』の極みである〈ヤケノハラ街〉においては、ほとんど〈仕事〉なんてしなくて済む、不要な『役割』だから、逆にその分、警戒されにくいし、事件を企てる計画をじっくり練ることができるからね…」

と返しました。

「…どうやって〈店長〉になったんだろう？」

「……当然、『魔力』だろうね」

二人がそんなことを話しているうちに、〈店長〉がやってきました。やはり、と言うべきでしょうか、キルケ・ゴールの「勘」は、皮肉なことに当たっていました。〈店長〉は、〈タブラ・ラサ村〉で、いつも仲が良かった二人のうちの一人、〈卑屈なスピノザ〉でした。

が、しかし、当の〈卑屈なスピノザ〉は、機械的な微笑を浮かべて、

「ハッピーっ!! なんてございましょうか、お客様っ!!」

と平身低頭に、親友であった過去など忘れたかのように、接客してくるではありませんか。

重要なことなので付言しておきますと、たとえ『分類』が『外れ』でも〈思い出〉まで消えることは、ありません。なので、〈卑屈なスピノザ〉はキルケ・ゴールのことを見て、驚きを見せず、他人行儀だったのは、やはり欺瞞なのであります。〈卑屈なスピノザ〉は、キルケ・ゴールのことを覚えているし、彼のことを見た時点で、内心、驚いていたに違いないのです。しかし、これからの事件のことを考え、あえて『分類』通り振る舞っているに違いないのでした。

キルケ・ゴールはそれでも冷静に、〈店長〉である〈卑屈なスピノザ〉に、

「――あの、一言だけ、質問してもいいでしょうか？」

と〈卑屈なスピノザ〉の目をまっすぐ見て、質問しました。

〈卑屈なスピノザ〉は、相変わらず、機械的な微笑でもって、

「ええ、なんなりとっ! ハッピーっ!!」

と叫びました。

キルケ・ゴールは頭に不快なめまいを感じつつも、それを隠し、たった一言だけ、質問を投げかけました。

「――〈店長〉さん。あなたは、『分類』の存在を知っていますね？」

今は〈喫茶店エルゴー・スム〉の〈店長〉である〈卑屈なスピノザ〉は、驚天動地といった、異常な驚き方をして、「い、い、いや、ワタクシは、『分類』なんて、まったく知りませんよっ!!」

と苦しい言い訳をしました。

その一言を聞いて、キルケ・ゴールとデリタ姫は悲しげに目配せして、互いに無言で頷き、キルケ・ゴールは、〈卑屈なスピノザ〉に向かって、冷静に言い渡しました。

「――〈店長〉さん。やはり、あなたは、『分類』の存在を、知っていますね？」

〈卑屈なスピノザ〉は、大げさに首を振り振りして、

「な、なんでそうなるんですかっ!!」

と必死で反問してきました。

キルケ・ゴールは、一抹の寂しさと共に、致命的な一言を彼に与えました。

「――〈店長〉さん。ふつうの人は、『分類』のことを知っていますか？ という『問い』に対して、『え？ なんのことですか？』と答えるんですよ」

そのとどめの一言を聞くやいなや、〈卑屈なスピノザ〉の表情は、みるみるうちに悪魔のように変化していき、そこまで知られちゃ、もう、仕方ねえ、という具合に、彼の中の『プチ魔王』が、目を覚ましたのでしょう、〈卑屈なスピノザ〉はなりふり構わず激怒し出し、

「――ああっ、もう、こんちくしょうがよおっ!! もう少しで、計画が実行できるってのに、余計な邪魔が入ったぜ、この、コエダメがあっ!!」

と、先ほどとは180度違う、『プチ魔王』としての本性を現しましたので、キルケ・ゴールは、名状しがたいやるせなさに唇を噛みながらも、冷静に、彼に向かって〈リモコン〉の〈停止ボタン〉を押しました。

【ヤケノハラノ街でテロでも起こせば、お前らは、『有名』になれるぞ!】

【そうだ、そうだ。激しく同意する】

【やれば有名になれるし、逆に女の子にモテるぜ?】

【もし、本当に事件を起こせるんだったら、あんたらは、もはや『創造主』だよ】

【いや、正確には『時代の英雄』だ。この『分類』の世界における、不平等社会へ一矢報いることになるんだからな】

【そうだ、そうだ。もしくは、お前らは、俺らの代弁者だ。結果的に、俺らは、お前らの起こしたテロを、俺らのために犠牲になった『聖人』として、神格化するだろう。俺らの鬱憤を晴らすためにも、俺はお前らを応援するよ】

【僕らのためにも、あんたら二人は、『有名』になってくれよ】

【今の流れなら、言える。お前らなら確実に『有名』になれる!】

――『解体』後、生気をなくした無機質な顔して、キルケ・ゴールとデリタ姫と対座する席に座っている、元〈卑屈なスピノザ〉こと、スピノザは、「……ケツ。全てを知りたければ、これを見ろよ」とふてくされるような口調で言って、『携帯型のメディア』を二人に放って投げてよこしてきました。それは御多分に漏れず、『ソーシャル2』でした。二人は、その掲示板に書き込まれた一連の文章を、じっくりと読んでみました。

キルケ・ゴールは一通りそれを通読し終わると、

「――この、『ソーシャル2』の書き込みを見てから、お前らは、いわば『有名病』を罹っちまって、『プチ魔王』になってしまったのか？」

とスピノザに詰問しました。

スピノザはふてくされるような口調で、

「……ああ、そうだよ」

とだけ、答えました。

「――どこで、……いや、誰から、この、『ソーシャル2』という、メディアの存在を教えてもらったんだ？」

「……お前は知らないだろうけど、あの〈勇者様ご一行〉が、〈タブラ・ラサ村〉へ来て、お祭り騒ぎをした後、〈勇者様ご一行〉に付随してやって来た、〈サーカス団〉の〈団長〉が、俺たちに『分類』の存在と、……『ソーシャル2』の存在を教えてくれたんだ――」

キルケ・ゴールは、やはりそうか、と内心納得しつつ、

「――なるほどな。で、未だ、『プチ魔王』として『解体』がなされていない、もう一人の『プチ魔王』たる、〈剛毅なデカルト〉の奴は、今、どこにいて、何時にこの〈ヤケノハラ〉の街に、テロを起こしにくるんだ？ 結託しているお前なら、そのくらいのことは計画しているはずだろう」

と悟すように言い渡しました。

俯いたままのスピノザは、ためらった後、あごを上へ振って、

「……俺が説明するよりも、その、『ソーシャル2』の掲示板の書き込みをみれば、早わかりだろうよ」

とやはり、投げやりな口調で言い放ち、また、目を伏せて俯きました。

キルケ・ゴールとデリタ姫は、『ソーシャル2』の掲示板の「続き」を見ました。

そこには、もう一人の『プチ魔王』たる、〈剛毅なデカルト〉たる男とおぼしき人物の書き込みが、分単位ごとに、更新されていました。

12時00分【やりたいこと……『殺人』をして『有名』になること】

14時20分【長旅だった】

14時30分【――なんにせよ、俺たちは、実に冷静だ。スピノザっていう、相方と共に、〈ヤケノハラ〉にまで至る道のりにおいて、俺らは〈商人〉を名乗って人を騙してみたところ、いとも簡単に馬に乗らずに、次の村である〈ライプニッツの村〉までなんの障害もなく、駒を進めることができた。〈ほろ馬車の親爺〉、馬鹿だ、こいつは】

15時45分【――〈アイドルプチ魔王〉がいる、という〈グーテン・ベルクの街〉を通った。この〈プチ魔王〉には、イケメンの彼氏がいるらしい。刺して殺してやろうか、とも思うのだが、今はまだ、我慢だ】

午前11時【――いよいよ、俺たちが『有名』になるための、計画が始まる。相方の、スピノザが先に潜入して、この〈ヤケノハラ〉の、全貌を把握しているから、事は、思い通りに進むことだろう。スピノザの存在によって油断している、〈ヤケノハラ〉の住人たちに向かって、俺は〈ほろ馬車〉で突っ込んで、〈ほろ馬車〉が使えなくなったら、ナイフで人を殺します。……みんな、俺は英雄になってくるぞ】

【――面白いぐらいだ。俺らが、良い人を演じれば、皆、『分類』によって、いとも簡単にだまされる。おかしいのは？ 答え、どっちもどっちさ。……以上ですが、異常ですかね？】

【――そろそろ午後12時ジャスト。もう、そろそろ〈ヤケノハラ〉へ着きます。そんじゃ、皆、俺は、軽く『勇者』になってきますわ】

――キルケ・ゴールは、それを読んでいるうちに、真顔のまま、一粒の涙が頬を伝って流れてしまいました。その理由を、ここで、くたくたと述べる必要はありますまい。ただ、ただ、虚しかったのです。横を見ると、デリタ姫も、その名状しがたい憐れさに、涙を流しているではありませんか。

キルケ・ゴールは、スピノザに向かって、

「――これから、〈ほろ馬車〉で、この、〈ヤケノハラ〉の街に突っ込んでくる、この『プチ魔王』を倒すのに、スピノザ、お前も一役買ってもらう。逆に言えば、君の手が必要なんだ。――いいかい？」

と目を合わせて言い渡しました。

スピノザは、ちらとキルケ・ゴールと視線を合わせて、瞬時、びくっ、となりましたが、すぐに顔を横に背けて、

「……分かったよ」

とだけ呟きました。

その後すぐに、キルケ・ゴールは、デリタ姫の方を見て、

「――デリタ姫。これまでの『プチ魔王』に使った方法で、これから現れる『プチ魔王』のテロを食い止め、『解体』します。……いいかい？」

と言い渡しました。

デリタ姫は、こくり、と無言で頷いて、

「……真似っこをするのね。分かったわ」

と小さい声で、答えました。

やがて、この、〈ヤケノハラ〉の街は、犯行予告時刻である、12時ジャストを迎えようとしていました。

果たして、その事件は、その犯行予告通りに、行われることとなりました。

掲示板に書かれてあった時刻の通り、正午12時ジャストに、『プチ魔王』たる、元・親友たる〈剛毅なデカルト〉は、

「おら、おら、おらあーっ!! 死ねえーっ!!」

という狂気の叫び声と共に、この〈ヤケノハラの街〉の〈門番〉を無理矢理跳ね飛ばして突破して、中央通りを駆け抜け、そこにいる人々を跳ねようとしたが、――そこには、すでに住人が一人もおりませんでした。

そのせいか、〈ほろ馬車〉の暴走は自ずと止まり、

「なんでだっ!! なんで、人が一人もいねえんだよおーっ、クソがっ!! スピノザのクソ野郎め、裏切りやがったなっ!! 許さねえっ!! あいつもろとも、〈喫茶店〉にいる全員、このナイフでぶっ刺してやんよっ!!」

と、とち狂った大声で叫び、鼻息も荒いまま、キルケ・ゴールたちがいる、〈喫茶店エルゴ・スム〉に、ナイフを片手に、疾風の如く飛び込んできました。

が、しかし、です。

そこには、すでに「先客」がおりました。そうです、それは、キルケ・ゴールたちでした。

キルケ・ゴールは、「演技」として、片手に血だらけのナイフを握り、〈喫茶店エルゴ・スム〉にいる全員――それは『プチ魔王』の「相方」でもあるスピノザも含めてです――を、刺し殺したようなフリをして、さらに「演技」で血だらけの姿で皆が床に伏している光景を恍惚の表情で浮かべて見ながら、〈剛毅なデカルト〉の「してやろうと思っていたこと」の「真似」をしながら、

「あーっはっはっはああっー!! やったぜっ!! やってやったぜっ!! これで、俺も『有名』になれるんだあーっ!! ざまあみやがれっ!!」

と大声で叫び狂う「演技」をしました。

〈プチ魔王〉たる、〈剛毅なデカルト〉は、思わぬ「先客」がいたことに、――いや、自分と同じような存在がいたことに、つまり、鏡に映った自分を見たような戦慄に、呆気にとられた様子で、振り上げたナイフを下すことも出来ずに、わなわなと震えるしかなくなり、

「……な、なんなんだあー、おめえはっ!! おめえは誰なんだあーっ!! なぜ、おめえみてえな奴が、この場に、いるんだあーっ!!」

と困惑の極みに陥っているようでした。

それを確認したキルケ・ゴールは、瞬時に「演技」を止め、冷静になって振り返り、冷たい視線を『プチ魔王』に向けて、低いトーンでもって、

「――君の真似をしてみたただよ、〈剛毅なデカルト〉くん」

と断言するやいなや、すぐさま、ナイフを地面に捨て、コートの胸元から〈絵画の額縁〉と、〈リモコン〉を取り出して、『プチ魔王』たる彼に向かって、〈停止ボタン〉を押しました。

『プチ魔王』たる〈剛毅なデカルト〉は、最後の抵抗として、

「ど、どういうことなんだ、このヤローっ!!」

と身動きが取れないまま、大声を張り上げましたが、キルケ・ゴールはますます冷静な口調でもって、

「――君が来る前に、中央通りにいる人々は、君の相方である、スピノザ君の『命令』により、避難させた。そして、この〈喫茶店エルゴ・スム〉にいる人々は、僕の手によって全員『分類』を『外させ』てもらった。――実に、簡単な作業だったよ。『――そこのあなたっ!!』と言うだけで、全員、こちらの方を、振り向いてくれるんだからね」

と返しました。

憐れな『プチ魔王』たる〈剛毅なデカルト〉は、全く身動きが取れない不自由さに、血が滲むほどの歯ぎしりをしながら、

「じゃ、じゃあ、ここに倒れ伏している輩、全員、『演技』をしてたっ、てことかよっ!」

と声を引き絞るように叫びました。

「――その通り」

そう言って、キルケ・ゴールは、自身の服に着いた血を手で拭って、手のひらをパーの形にして『プチ魔王』たる〈剛毅なデカルト〉に見せびらかして、

「――血のりだ」

と吐き捨てるように言って、その血のりのケチャップを、べろり、と舐めてみせました。

『プチ魔王』は、

「――ち、ち、ちくしょおおおオー!!」

と大声で叫びました。が、その声はもう、上ずって、空虚な響きでしかありませんでした。

【――俺は、一生、世界の片隅で、淡々とした日常を繰り返して、死んでいくのだろうか？ ……絶対に嫌だっ!】

【――この間、〈勇者〉が言っていた台詞。『死ぬ気でやれば、なんでもできる!』、だってさ。――うん。これは、死ぬ気でやらなくても、なんでも出来ちゃう人の台詞だよな】

【――『分類』から『外れ』て、はじめて知った。俺の存在は、『取り換え可能』な存在なんだって。そう、道具屋の葉草がどれでも同じ効果であるように、ね】

【――「希望」がなければ、「絶望」もないのだ。が、俺は『分類』から『外れ』てからというもの、「希望」を持っ

てしまった。それも、全世界の人々に、俺の存在を知らしめてやる、という、とんでもない「希望」を】

【――やりたいこと……殺人。夢……『テレビジョン』独占】

【ほんの数人でも、こんな俺にかまってくれた奴らがいる】

【――でも、俺にとっては一番大事なソウルメイトなんだろうけど、相手にとっては、100番目のどうでもいい友達なんだろうけどね】

【――『分類』から『外れ』た、お前らなら、分かるだろう。……そう、『そんな性格だから〈彼女〉ができない』んじゃない。『〈彼女〉がいないから、こういう性格になる』んだよね】

【――『分類』から『外れ』たゆえ、全て「自分のせい」になるのか。答え。『この世界』のせいでもあるし、『分類』のせいでもあるし、『自分自身』のせいでもある】

――『解体』後、これが、『分類』から『外れ』た当初の〈剛毅なデカルト〉が、『ソーシャル2』の掲示板に書き込んだらしき文章の全てでありました。

キルケ・ゴールはそれを読み、スピノザの時と同じく、名状しがたい涙を流し、やはり以下のような、同じ感想を持ちました。

……何も言えることがない。

そうしてそれから、――キルケ・ゴールは、確約通り、デリタ姫を、〈ライト・ノベライズ王国誕生祭〉の前日に、〈ヤケノハラ街〉のある〈テレビジョン〉を通して、元の〈ライト・ノベライズ王国〉の〈姫の部屋〉に戻すことにしました。

――かなり大雑把に筆を進めているように思われるでしょうが、以前、何度もしつこく申し上げている通り、この『分類』解体以前の『この世界』の物語よりも、『分類』解体後の『この世界』の「後日談」の方が重要なのであります。

ゆえに、この〈ヤケノハラ街〉で起こった以上のことは、比較的、雑な描写になってしまうのは、致し方ないのであります。

……とにかく、以上のような具合で、〈ヤケノハラ街〉にて、『プチ魔王』の騒動があり、結果として、かなり多くの人々が、『分類』の存在を知ることとなり、『分類』から『外れ』ることとなりました。

この時点で、キルケ・ゴールの胸中には、2つの懸念がありました。

1つ目は、当然の話ですが、『分類』から『外れ』た人々が、『この世界』に対して、疑問を持ち始め、果ては、変な暴動を起こしたりして、『この世界』の秩序を壊してしまうかもしれない、という懸念でした。

2つ目は、1つ目の懸念を、〈ライト・ノベライズ王国〉の〈王様〉に「理解」させ、〈ライト・ノベライズ王国〉に住む全部の住人に、〈王様〉の「演説」を利用して『分類』の「真実」を語らせ、その結果、〈ライト・ノベライズ王国〉に住む全ての人間の『分類』を『外さ』せることは可能なのだろうか、という懸念でした。

が、結局、よくよく考えてみれば、それは至極簡単な事業なのでした。

第一に、デリタ姫の〈監視役〉である〈お目付け役の爺やフーコー〉に課せられた『分類』とは、〈デリタ姫のこ

とを管理すること〉と、〈王様に対して絶対に真実を言うこと〉の2つだったからで、前述の通り、この〈お目付け役の爺

やフーコーは『分類』から『外れ』てしまった、デリタ姫の、「一個人として世界を冒険したい」という「わがまま」を「黙認」してしまったがゆえ、1つの目の『分類』である〈デリタ姫のことを管理すること〉という『分類』をなりゆき上破ってしまい、かつ、2つ目の『分類』である〈王様に対して絶対に真実を言うこと〉が課せられている以上、〈王様〉に「本当のこと」を言わないと、〈お目付け役の爺やフーコー〉にも、なんらの処罰を受けることになってしまうわけです。その点をゆすれば、いとも簡単に、これまで『この世界』で起こってきた『プチ魔王』たちによる「事件」を、〈王様〉に報告させることは比較的容易なことなものでした。

それに加えて、〈ライト・ノベライズ王国〉の〈王様〉に課せられた『分類』とは、〈ライト・ノベライズ王国の象徴であること〉と、〈ライト・ノベライズ王の言うことは国民にとってすべて正しい〉という、至極単純なものでしかなかったのです。従って、今回の『分類』に関する一連の話も、〈デリタ姫のことを管理すること〉の一環として、〈お目付け役の爺やフーコー〉が〈王様〉に「正しく」話せば、〈王様〉はいとも簡単に信じるでしょうし、それを今度の〈ライト・ノベライズ王国誕生祭〉の席にて、全国民に話すだろう、ということは、ほぼ確実なことだったわけです。

〈ライト・ノベライズ王の言うことは、全国民にとってすべて正しい〉、それに加えて、『分類』によって規定された行動上、それを〈王国チャンネル〉によって、〈ライト・ノベライズ王国〉の住民の100%が、〈王様〉の発言を聞くことでしょう。つまり、〈ライト・ノベライズ王国〉の全国民は、自然と『分類』の存在に気づき、『分類』から『外れ』ることになるでしょう。

ここで、一つの疑問が、頭に浮かぶかもしれません。「——でも、それじゃ〈王様〉に課せられた『分類』は、解けないじゃないの？」と。がしかし、——それは、様々な都合上良いことであり、〈王様〉に限って言えば、あえて『分類』を『外さ』ず、無知な〈象徴〉であり続ける方が何かと得策なのだ、と、その頃のキルケ・ゴールはぼんやりと思っていたのでした。

そして事実、事はキルケ・ゴールの思った通りに進みました。

先ほど話した通り、彼とデリタ姫は、〈ライト・ノベライズ王国誕生祭〉の前日に、〈ヤケノハラの街〉の〈テレビジョン〉から、〈姫の部屋〉に移動することに成功しました。なぜか、デリタ姫だけではなく、キルケ・ゴール自身もテレビジョン間を移動することが、いつの間にか、できるようになっていました。——きっと、彼とデリタ姫が、もう、「そこまでの関係」になっていたからなのでしょう。

——〈テレビジョン〉から抜け出て、〈姫の部屋〉に到着すると、目の前に、〈お目付け役の爺やフーコー〉が座っていて、彼は、「うわっ!!」と大声をあげ、腰を抜かしてしまいました。それも、当然のことでしょう。なぜなら、〈お目付け役の爺やフーコー〉に課せられた『分類』は、あくまで、〈デリタ姫のことを管理すること〉であり、〈デリタ姫の部屋に入ってはいけない〉という『分類』ではなかったのですから。

そんな腰を抜かした〈お目付け役の爺やフーコー〉に、デリタ姫は次のように屹然と言い渡しました。

「——フーコー。貴方、私の言動を、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉で、一部始終、見ていたでしょう？」

〈お目付け役の爺やフーコー〉は腰を抜かしたまま、

「そ、そ、それは、見えましたよっ!! 〈デリタ姫の言動を監視すること〉、それがわたくしめの役割でありますからっ!!」

と言いました。

デリタ姫はさらに冷然とした態度で、

「……じゃあ、『この世界』の『分類』の存在も、『この世界』に『プチ魔王』が出現していたことも、当然、知っているわけよね？」

と言い渡しました。

〈お目付け役の爺やフーコー〉は戦々恐々として、

「は、はいっ! 承知しておりますっ!!」

と返しました。

デリタ姫は、

「——なら、話は早いわ。貴方は、〈デリタ姫のことを管理すること〉と、〈王様に対して絶対に真実を言うこと〉が、『分類』として課せられているわよね? 事実、貴方は、この〈世界最古のトランジスタ・テレビ〉を通して、私の言動を管理してきたのだから、その全てをお父様に言わなければならないわけよね? ……私の言いたいこと、分かるわね？」

」

と詰め寄りました。

〈お目付け役の爺やフーコー〉は、とほほ、と頭を抱えるような感じで、

「――わ、分かりました、分かりましたよ！ デリタ姫のお傍におられる、彼のことも、彼と冒険して『プチ魔王』たちと出会ってきたことも、『この世界』の『分類』の真実のことも、全て〈王様〉に伝えますよ」

と断言しました。

デリタ姫はニカッと笑い、

「――そう。それでいいのよ」

と、とどめを刺しました。

〈お目付け役の爺やフーコー〉はぐうの音も出ないようで、力なきか細い声で、

「……承知しましたよ、〈姫様〉」

と言いました。

デリタ姫は、

「――まったく、本当に、貴方は堅物ね。『分類』の存在を知ってしまった以上、本名の『デリタ』っていう名前呼んでいい、って言ってんのに」

と毒づきました。

「――〈ライト・ノベライズ王国〉に住む、全国民に告ぐ。……これまで、我が〈ライト・ノベライズ王国〉では、我が娘であり、〈お姫様〉である、〈デリタ姫〉が、〈勇者様ご一行〉と共に〈安全な冒険〉をし、〈魔王〉を倒したあと、こうして、〈ライト・ノベライズ王国誕生祭〉があり、〈デリタ姫〉の〈笑顔を取り戻す〉のが、恒例行事であった。――だが、それは偽りであった。今、〈この世界〉では、〈魔王〉だけでなく、〈プチ魔王〉たる、危険な輩が頻繁に出現するようになったのだ。そして、ある者の謀略によって、我が〈デリタ姫〉は、その〈プチ魔王〉と出くわすような旅に出る羽目に至ってしまったのだ。それもこれも、すべて〈分類〉という、〈この世界〉のシステムのせいであった。〈分類〉から〈外れ〉たものたちが、次々と〈プチ魔王〉となっていったのだ。ゆえに、ご覧の通り、我が〈デリタ姫〉は、〈笑っている〉、という行為をしていないのだ。そして、この〈デリタ姫〉の隣にいる青年こそが、〈この世界〉の〈分類〉の存在を知らしめ、我が娘たる〈デリタ姫〉を救った〈救世主〉なのだ。――ゆえに、〈ライト・ノベライズ王国〉に住む、全国民に告ぐ。諸君らは、これまで〈分類〉に縛られて、言動を制限されて生きてきた。与えられた〈分類〉以上のことも、〈分類〉以下のことも、出来ないように創られていた。だが、それもこれも、今この宣言をもって、終わりだ。諸君らは、たった今から〈分類〉から〈外れ〉ることとなった。――ゆえに、もはや〈勇者〉は〈勇者〉ではない。〈魔法使い〉は〈魔法使い〉ではない。〈賢者〉は〈賢者〉ではない。〈道具屋〉は〈道具屋〉ではない。諸君らは、今日から、〈分類〉から〈外れ〉て、それぞれ自由な身となるのだ。――以上！」

以上のような〈ライト・ノベライズ王国〉の〈王様〉のスピーチに、周囲の忠臣たち、関係者たちは、拍手喝采を送り、「王様、万歳!!」と叫び、自分でも理由の分からない涙を流していました。そして、この〈王国チャンネル〉を見ていたであろう、〈ライト・ノベライズ王国〉に住む全国民の『分類』が、一気に『外れ』た瞬間でもあったのでした。

キルケ・ゴールは、〈王様〉と〈王妃様〉と〈デリタ姫〉の横に立ちながら、内心、「……これで、ほぼ全国民の『分類』が『外れ』たはずだ。…これで、よかったのだ。そうだ。…おそらく、これで、よかったのだ」と思いました。

が、スピーチが終り、〈王国チャンネル〉の放送も終わったあと、キルケ・ゴールが周囲を見渡すと、なぜか〈関係者〉の中、「機械的に笑っている人間」が、一人おりました。

――その人間は、ヒロユキでした。

……なぜ、こんな王宮内に入りに来たのでしょうか？ 答えは、一つしかないでしょう。彼はとっくに『分類』から『外れ』た人間であり、ゆえに、影を盗まれた人間のように存在感がないがゆえに、逆に〈関係者〉を装っても周囲にバレない、ということに他なりません。

キルケ・ゴールは、それとなく、ニコニコ笑っているヒロユキに近づき、

「――どうも、お久しぶりです。……これで、『この世界』の住人、全ての『分類』を『外す』ことに成功しましたよ」と勝利の確信と共に、彼にそう呟きました。

するとヒロユキは、相変わらず、飄々とした態度でもって、

「――いやあ、それが良いことかどうか、ねえ」

と気になることを言い出しました。

キルケ・ゴールは途端に不安になり、問いました。

「……どういうことです？」

それでもヒロユキ表情一つ変えずに、

「——ん？ 分からないんですか？ ——『分類』から『外れ』る、ということは、『自分が何者か分からなくなる』、っていうことと、同義なんですよ？ これから、『自分が何者なのか分からなくなる』輩が現れないことを、祈るばかりです」

後々に分かったことですが、この、ヒロユキが言い放った一言は、まさにその通りとなるのでした。

つまり、こうしてほぼ全国民の『分類』を『外し』た後、『自分が何者なのか分からなくなる』輩が増殖してしまい、——『この世界』が、善や悪のような二元論では語れないような、手に負えない大変な方向へ向かっていってしまったのでした。

第一章

――さてはて、お待ちどうさまでした。

ここからは、ついに、ここまでさんざん引き延ばしてきた、〈ライト・ノベライズ王国〉の全住民の『分類』が『外れ』してしまった後の『この世界』について、『解体』後の世界について書いていくわけですが、……なんというのでしょうか、いざ、こうして書いてみようとする、昔の叙情派の詩人が残した、左の詩の一節のように、

『[i]人類は今、過去も未来も分からぬ混迷の只中であつた』

とでも言うような、余りにもその「変貌ぶり」が凄すぎて、なかなかどうして、どこからどう語っていいのやら、未だに整理がついていない、というのが、私自身の偽らざる実感なのであります。

だからといって、別段、昔の科学者S氏が予言したような、

『[ii]すべては生活人間や肉人間、野菜人間、液体人間、燃料人間などで世界が回つた』

というような、SF的な世界に「変貌」したわけではありません。

むしろ、逆であります。

「――自分とは何者なのか？」

というような、原始的な問いを、全住民が考えざるを得ないような世界に戻ってしまったのであります。

ゆえに例のヒロユキが言っていた、

「『この世界』の人々が、『分類』から『外れ』ると、『自分が何者なのか、分からなくなる』人々が続出するんじゃないか」

というような「懸念」が、悔しいことに、ものの見事に「的中」してしまった、と認めざるを得ない、と思われまふ。

なぜなら、私、キルケ・ゴールの实情から言わせて頂ければ、『解体』後の世界は、やはり昔の詩にあるような、

『[iii]彼女（デリタ姫）がいるから愛した世界なのに、こんな世界じゃ…』

というような、滅茶苦茶で、混沌とした「異世界」になってしまったのですから…。

そして、その影響を一番受けたのは、私、キルケ・ゴール本人なのでありますから、まことに笑えない話であります。

それはここまでの文章上の「引用」の過度の多さに、端的に現れているのは一目瞭然でしょう。後ほどその理由は明かしますが、当時の私は、他者の「引用」された「言葉」によって、辛うじて「自分自身」を支えていたようなものだったのであります…。

――くどいようですが、『分類』から『外れ』てからというもの、〈勇者〉は〈勇者〉ではなくなり、〈魔法使い〉は〈魔法使い〉ではなくなり、〈道具屋〉は〈道具屋〉でなくなり、あるいは、〈タブラ・ラサ村〉は〈タブラ・ラサ村〉ではなくなり、究極で言えば、私、キルケ・ゴールも、キルケ・ゴールではなくなってしまったのです。

……そこで、『この世界』に蔓延したのが、「[iv]誰もが納得いくような物語」を得られるような、『宗教』だったのでした。

つまり、「『分類』から『外され』たせいで、自分自身が何者なのか分からなくなってしまう連中たち」が、突然変異的に現れた、一つの『宗教』の力によって、「救われる」＝「新たな『分類』を与えてもらえる」ような世界に様変わりしてしまった、というわけです。

「宗教」によって、新たな〈分類〉をもらうことができ、「自分」を取り戻すことができる、そんな世界。

しかし、そういう世界のあり方は、ある意味では、決して、「悪いこと」ではないのかもしれませんが。

ある古来の書物の一節の如く、

『[v]ある意味、完全な無防備ゆえ、平和が訪れていた』

とでも言うべき、ある意味では『宗教』によって「平和な世界」に戻ることができた、とも言えるのですから。

が、しかし、です。

が、しかし、ここまでこの手記を読んできたあなたは、おそらく、私、キルケ・ゴールと、デリタ姫の、ほのかな「恋の成就」を願って、ここまでの手記を読んできたところもあるか、と推察いたします。

恥ずかしながら私、キルケ・ゴール自身も内心、当時はそう思っておりました。

きっと、『分類』が『外れ』れば、デリタ姫も、〈お姫様〉ではなくなり、私、キルケ・ゴールと一緒に、「普通の

恋人」同士として、一緒に暮らしていけるのではないか、という「ほのかな希望」を、お互い、話し合いこそしていませんでしたが、二人とも、内心、望んでいたのです。

あるいは、そんな「幸福」の形態をとらずとも、やはり、この〈ライト・ノベライズ王国〉に伝わる、古い詩のように、

『[vi]我らが姫君の行く先に、希望の光があらんことを願う』

と、心の底で、私は真剣に祈っていたのですが、その「希望」などは、実に呆気なく、その『宗教』によって、かき消されることとなりました。

……それもこれも、私、キルケ・ゴールが、『この世界』の『分類』を『解体』してしまったから起こってしまったことです。ゆえに、誰も責めることは出来ません。これを「本末転倒」と言わずして、なんと言いましょうか…。

などという、くだかしい「説明」はここらで終りにして、話を『分類』後の『この世界』の「物語」の方に戻すことに致しましょう。

『分類』を『解体』した後の〈ライト・ノベライズ王国〉の「状況」を、あなたに「知っていただく」ためには、こんな「説明」なんかよりも、「物語」を書き進めていく方が、ずっと早道でしょうから。

――さて、私が〈ライト・ノベライズ城〉から故郷へと帰ってみると、……驚くことに、私の出身地である〈タブラ・ラサ村〉は、もう以前のような、単なる田舎村ではなくなっており、――いつの間にか、その『分類』後の、『自分が何者なのか分からなくなってしまった』人々が、「救い」を求めてやってくる、『宗教』の「本拠地」と化しており、名前もまた、〈タブラ・ラサ村〉から『[vii]ファンイールの村』へと勝手に変えられており、私、キルケ・ゴールの実家である、〈宿屋クラスタ亭〉という名前も、『[viii]ソレイヌの花』という名前へと、勝手に変えられておりました…。

何が起きているんだ!? と思いつつ、元〈クラスタ亭〉である、『ソレイヌの花』へ入っていくと、父の姿も母の姿もなく、ますます膨れ上がる不安と共に、例の四階の一番奥の部屋に行ってみると、……なんと、見知らぬ男が、まるでこの「宿屋の主」のように、座っているではありませんか。

……いいえ、正確には、私はその男を見知っているのです。が、その男は、別人か、と見間違ふほど、「変貌」していたのです。

――その男は、何を隠そう、私に、例の〈絵画の額縁〉と、〈リモコン〉と、〈プチ魔王マップ〉をくれた、例の〈サーカス団長〉、その人なのであります。

そして、その男の横には、なんとということでしょう、その男の妻の如く、あるいは、弟子の如く、――デリタ姫が、座っているではありませんか。

「――私は、この人と、ここで同棲するのよ」

そう言ったきり、デリタ姫は、――いいえ、『分類』が『外れ』た今は〈お姫様〉でもなく、『デリタ姫』でもない、単なる「一個人」でしかないのですが、――ともかく、彼女は、そう言い残すと、さっ、とキッチンの奥へともって行ってしまいました。

私は、余りに理解不能な、目の前の情景に、啞然とする他ありませんでした。『[ix]太陽のような人でなく、いきなり、月のように凜とした、女の子になってしまった…』とでも言うような複雑な感慨を全力で飲みこんで、「変貌」した例の〈サーカス団長〉とおぼしき男の姿を、ちら、と見やりました。

男の頬はこけ、眼窩は窪み、ほとんど眠っているかのように両目を閉じており、失明しているのではないかとさえ思われました。そして、額の真ん中から中央分けされた長髪は、濡れており、全身、何かに怯えているかのように、細かく震えておりました。

私はキッチンに在るであろう、デリタ姫に向けて、あくまで険のないような口調で、

「――なあ、デリタ。……僕は今、この情景を見て、色々、理解不能な状態なんだが、君が、こんな、見ず知らずの男の人と、この、元は僕の実家である宿屋で、同棲して、そして、一緒にお風呂にまで入っているのか？」

と質問致しました。

デリタは何の気なしに、

「――そうよ」

と、キッチンの奥から声だけで返答してきました。

その言葉に、私は、ショックを受けてしまいました。

ここまで読んできたあなたはご承知の通り、デリタ姫は、決して他人を軽々と自分のテリトリーに入れるタイプの人間ではありません。そして、それは一緒に旅をしてきた私が一番理解していることなのでした。

しかし、そんなデリタ姫が、事実、まったく見知らぬ中年の男を、見知らぬ部屋に入れて、同棲を始めているのです。

その事実直面した私の胸中には、様々な思いや言葉が浮かんで消えていきました。やはり理解不能だ、という気持ちや、『解体』後の世界なのだから、その後、それぞれの人々がどうなるか分からないから仕方がないよ、という言葉や、昔から伝わる演劇『[x]顔も知らない君に恋をした』の中の一台词『[xi]人間は弱い。一人では生きていけない。だから群れる』という言葉や、『[xii]ねえ、もう一度、僕の名前を呼んで…』という、古来の詩の一節などが。

……いやいや、むしろ、単純に、デリタ姫を手籠めに入れたこの男への嫉妬心、それしかなかったのかもしれない。――そんな思いを胸に、再び、例の男の方を見やりました。

男は、相変わらず、何の言葉も発することなく、ただただ怯えて、震えているばかりでした。こうした、弱々しい男の態度に接すると、なぜだか、こちらの攻撃性を誘発するかのようでした。加えて、私はこの男とおそらく「知り合い」であったからこそ、その「変貌ぶり」に、なにか、馬鹿げたドッキリにかかっているのではないか、そして、それに気づいていないのは自分一人なのではないか、とでもいうような義憤のようなものが湧き上がってくるのを抑えることが出来ませんでした。私は意を決して、その、元〈サーカス団長〉とおぼしき男に、話かけてみることにしました。

「――やあ、お久しぶりです。〈サーカス団長〉さん」

が、その男は、私の言葉など全く黙殺してしまおうではありませんか。

私はさらに、

「……いや、ほら、はっきり、覚えていらっしゃるでしょう？ あの、〈タブラ・ラサの村〉で、〈勇者様ご一行〉が来たとき、ほら、僕が寝過ごしてしまって、そのとき、あなたが……」

そこまで私が言いかけると、謎の男は、突然、オウ、オウ、オウ、という、子供のような呻き声を上げ始めました。私は心底から、ぎょっ、としてしまいました。

その直後、デリタ姫がキッチンから、

「あ、ちょっと待ってっ！ それ、その人の癖なの！」

と慌てた口調で言って、トレイを持って、部屋に戻ってきました。裾のたっぷりしたダンガリーのワンピースを着てひつつめ髪をしたデリタ姫は、今ではもう、まるで「この男の娘」にすら思えるのでした。

デリタ姫が身をかがめ、男が座っている低いアンティークのテーブルの上に、熱いミルクが注がれたコップを置くと、礼儀正しく、すくっ、と立ち上がり、その男と対置するように突っ立っている私に、コーヒーの入ったカップを手渡して、

「――リルケ。……この人ね、どうやら、『記憶喪失者』らしいのよ」

「……『記憶喪失者』？」

私は内心、思いました。――そんな、馬鹿な話があるもんかっ！ 『分類』から『外れ』る＝「自分が何者なのか、分からなくなる」、ということはある得ても、『分類』から『外れ』る＝『記憶がなくなる』、ということはある得ないはずだ。それに、この元〈サーカス団長〉とおぼしき男は、『この世界』の秘密である、『分類』の存在に気づいていた、稀な人物の一人だったじゃないか。そんな男が、「記憶喪失」になるわけがない。

そうか！ 元〈サーカス団長〉ということは、お得意の、「お道化」＝「お芝居」をやっているのだ！ それに違いない。

「……あのさ、彼は、『記憶喪失者』を演じているだけなんじゃないかな。――だって、僕は〈サーカス団長〉としての、この人を、以前、ばっちりを見たことがあるからね。道化を演じる者ならば、『記憶喪失者』を演じるなんて、お手の物だろう。ま、なんでこうして『記憶喪失者』を演じているのかまでは、分からないけどね」

私は皮肉を込めてそう言い渡しました、が、この言葉を受けても、デリタ姫は、むしろますます真面目な顔をするばかりで、

「――しかもね、この人、『予知能力』があるの。――だって、光ったのよ。この宿屋の前にやってきたとき、この人が一瞬光ったの、そしたら、その直後、天に雷が生じて、一瞬、空が光ったの。その瞬間、――私は『運命』みたいなものを感じたの。そんな偶然、あると思う？ それにこの人、見ず知らずの私に向かって、アレコレ身の上話みたいなことをぶつぶつ呟くんだけど、それが、私の過去と一寸の狂いもなく当たっているんだから、いよいよ不思議な人だ、と思っ

たわ。――この人、何か目的があって、この地へ来たんだ、そして、私を選んだんだ、と私、思ってしまったの」
などと言いました。

……私は、それは、そいつの、勝手な、仮の『分類』による、新たな『宗教』に過ぎないよ！ 騙されるなっ！ と、
大声で叫んでやりたくて仕方ありませんでした。

やはり、『解体』後、デリタ姫自身も例に漏れず、『分類』から『外れ』た多くの人と同様に、「自分とは何者なの
だろうか？」という、根源的な悩みに付きまといわれてしまったのでしょうか。そこに、タイミングよく、この元〈サーカス
団長〉の男に騙された、というわけなのでしょう。

そんなことを考えていると、やがてその男は、目を閉じたまま、静かな低い口調でもって、次のようなことを呟きま
した。

「――二度ハジマッテ、二度オワル」

そう呟き終ると、また、男は顔を俯き、体育座りをしたまま、総身、ぶるぶる震え出しました。横に正座している、
デリタ姫を見ると、それを何かの「予言」かのように感じたらしく、男と同じように目を閉じ、上空へ顔を上げており
ました。

その態度がまた、私を混乱させました。かつては、あんなに「自意識過剰」であったデリタ姫が、不用意にも、他人の
前で、あんな、はしたない態度を平気で取っている、そのことへの、嫌悪感。そして、そのあまりの「無防備さ」が、こ
ちらにまで「感染」してきそうな、原始的な怯え。

その混乱を払拭するために、私は無理くりでも体勢を立て直し、もはや今は昔知り合ったことのある人物としてでは
なく、正体不明の男として男をぞんざいに扱うことに決め、

「……おいっ！ 詐欺師のおっさんよっ！ どういう意味なんだよ、二度始まって、二度終る、っていうのはよっ！ な
あ!？」

そう問い詰めると、男は、ビクン、と体を硬直させ、さらに怯え出しました。その「怯え」が、かえって私の癢にさ
わり、私は叱りつけるような口調で、男に叱咤してしまいました。

「――お前は、いったい誰なんだよっ！」

男は苦しい表情で、ゆっくりと面をあげていきました。濁っているであろう、ほぼ閉じかけられている瞳は、あら
ぬ方向を凝視しはじめ、やがて、深い沈黙が続いたか、と思うが早いか、男は口を開き、そこから、次のような一言が、
その口からこぼれました。

「オマエ……コソ……ダレダ。――オマエ……コソ……ドコカラ……キタ」

その言葉を聞き、私は、目の前が真っ暗になってしまいました。それは、言わずもがな、『分類』から『外れ』た
以上、私、キルケ・ゴール自身も、この地に集う者たち同様に、「自分が何者なのか？」が、あるいは、「自分がどこか
ら来たのか？」が、実際には、はっきりと「証明」出来なかったからでありました…。

[i]文学塚さんの『-transparentes daraki-』の説明文より引用。

[ii]Rokunさんの『科学者S』内より引用。

[iii]緒乃田いけすさんの『カノジョがいる世界だから愛した』内の台詞より引用。

[iv]クロードニュースキーさんの『風車は力強く回転を繰り返し規格外の強風は坂を駆けてゆく』冒頭より引用。

[v]盛田雄介さんの『アルゴスの死角』の説明文を変形して、引用。

[vi]金指龍希さんの『紫銀の除霊師』第四章その一『我らが姫君の行く先に、希望の光が有らん事を心から願う』より
引用。

[vii]セイクさんの『生き返ってはみたけれど』内より引用。

[viii]ミュウさんの『ソレイヌの花』というタイトルより引用。

[ix]長井雅さんの『月姫外伝』内より引用。

[x]もっさん（江森実奈子）さんの『顔も知らない君に恋をした』より引用。

[xi]ナユナユ（暁隊長）さんの『釘と親友に貫かれた本心』の説明文より引用。

[xii]雨恋さんの『ワガママの果て』内より引用。

第二章

「オマエ……コソ……ダレダ。――オマエ……コソ……ドコカラ……キタ」

――数日経っても、例の『記憶喪失者』の男から言われた、この「一言」に対して、まったく整理がつかないままでしたが、

『……きっとデリタ姫は、あの男の存在を、僕とだけの「秘密」として伝えたのに違いない。周囲には黙っているのだ、きっと』

という「考え」一点だけは、揺らぐことなく、勝手に決め込んでおりましたが、その「期待」は、いとも簡単に裏切られることとなりました。

私が、あの男と出会った3日後、〈ファンイール村〉に新たに出来た喫茶店『[i]プレジュ・ラ』で、安酒を煽っていましたら、『菓草屋』の[i i]ジュエリー・ボックスという男が、私に近寄ってきて、

「――おや、リルケ・ゴールさん、珍しいですね。……それよりも、聞きましたか？」

と質問してきましたから、私は、

「……何をだい？」

と不機嫌そうに返してやりました。

「――いやいや、もちろん、れいの『記憶喪失』の男のこと、ですよ。あの『記憶喪失』の男は、デリタというお嬢さんだけでなく、夜ごと、何人もの人間をあの部屋に招き入れて、今では、あの男は周囲の『信者』から〈救世主〉と呼ばれているそうですよ」

「……まさか」

「――僕の周囲の予想では、セックスがいい、っていう説が有力ですがね。そうじゃなかったら、あんな、浮浪者の、『記憶喪失』の男を、簡単に招き入れるわけがないじゃないですか。ねえ？」

その話を聞いて一番ショックだったのは、……デリタ姫にとって私の存在など、決して「特別な存在」ではなくなってしまったのだな、ということでした。過去の、デリタ姫との二人旅のことを思い出しては、胸が息苦しさで一杯になってしまうのでした。

そして、この、元〈タブラ・ラサ村〉である、『ファンイールの村』という、「無秩序な秩序」で固まっている土地で、「おかしな遊び」が蔓延していることを知ったのは、その夜のことでした。

つい先だって、私は謎の男に、

「オマエ……コソ……ダレダ。――オマエ……コソ……ドコカラ……キタ」

という言葉を受け、「自分の存在」の「根拠」について、動揺し出してからというもの、安酒を飲むだけでは飽き足らず、『危険ドラック』すらもやらなければ、眠れないような体になっておりました。

よって、その日の夜も、『危険ドラック』を買いに、『ファンイールの村』の北東にある〈[i i i]ウルタール・タワー〉へと向かいました。

……〈ウルタール・タワー〉とは、私やデリタ姫同様、『分類』から『外れ』てしまっていて以来、「自分とはいったい何者なのか？」が分からなくなって、精神不安定になってしまった輩が、『危険ドラック』をやって、束の間の安息を得ている、無法地帯のことでした。

高い天井に並んだ何十本もある蛍光灯のうち、光を発しているのは、一列目、三列目、五列目の3つです。これは、『プッシャー』が来ているサインです。そうでないときは、そこかしこに散らばった業務用のライトが光っているだけなのです。

私は壊れた蝶つがいの外れたトタン張りの扉を、無造作に開き、さらに廃品を溶接して作ったらしいガラクタの群れをくぐり抜け、慎重に奥に進み、地下室のドアの前に行きつき、足で二回ほど蹴ってノックしてから、囁きました。

「……リルケ・ゴールだよ。そっちは？」

ドアの向こうから声が返ってきます。

「――[iv]ヤマブキだ」

そして、ドアの向こうから、数人の笑い声が上がりました。裏返って尾を引くような高い笑い声の中に、元『プチ魔王』であった、〈卑屈なデカルト〉が、混じっているのが分かりました。私は咎めるような口調でもって、

「ラリってんのか、デカルト」

と言いました。

すると、デカルトがドアを開けて、にかっ、と笑って、

「今日から俺は、ヤマブキ、だぞ」

と言いました。再び、弾けるような笑い声が起こりました。……こういう時は、適当に話を合わせるのが得策ですので、

「……はいはい、お前は、ヤマブキ、だよ。――じゃあヤマブキ、今日は、活きの良いヤツは入っているかい？ お前みたいに、ブツ飛べるヤツがいいんだけど」

と話を持ち掛けましたら、なぜかしら、突然、地下室にこもる声は、ぴたり、と止んでしまいました。驚いた私は、
「……おい、ヤマブキ。どうしたんだ、聞こえてんだろ？」

とドア越しに詰問しました。

すると、ややって、ドア越しに別の男の声が聞こえてきました。

「――どちら様ですか？」

「キルケ・ゴールだよ、キルケ・ゴール」

それに重ねるように、ヤマブキが沈黙を破りました。

「――悪いけど、『新しい名前』を持っていない奴は、お断りなんだ」

「は？ 新しい名前？」

そう詰問するが早いか、途端にドアが開き、ヤマブキが顔を出し、

「そう、『新しい名前』さ。――俺はヤマブキだよ。お前は？」

……なんなのだ、『新しい名前』とは？ そこで私は、はっ、と、あることに思い至りました。『新しい名前』とは、例の謎の男が与えた、新たな〈分類〉のことではないのか!? 『新しい名前』という、新たな仮の〈分類〉を、例の男は無差別に皆に与えているのに違いない。

私はそれを確信し、

「……ヤマブキ、もしかしてお前、『ソレイヌの花』に居座っている、あの、『記憶喪失者』の謎の男から、その『新しい名前』を、貰ったのかい？」

と諭すように言いました。すると、ヤマブキは、声の調子をこわばらせて、

「――知っているのか？ あの方のことを」

「……ああ。デリタ姫に呼び出されて、一回だけ、会ったことがあるんだ」

「――だったらお前も、さっさと、あの方に『新しい名前』を貰えよ。面白いぜ。あの方の前に座って、神妙な顔をしていれば、それだけで済むんだよ。すると、簡単に答えてくれるんだ。ヤマブキとか、[v]アキ・ジンとかさ」

白い煙が立ち込めて、樹脂の焦げる、密度の濃い匂いがしました。ガンジャが燃えているのです。それを慈しむように、ヤマブキは、目をつむり、そして、ゆったりとした口調で言いました。

「自分はヤマブキだった」

続けざまに、地下室から次々と声が響きました。

「自分は[vi]コッペリアだった」

「自分は[vii]シルバー・ブラストだった」

「自分は[viii]クロエ・ヒナタだった」

……間違いない。こいつらは、あの謎の男の、仮の〈分類〉たる『新たな名前』を貰っているのだ。あの男の、『宗教』に、かかっているのだ。私はそう確信しました。

ヤマブキは、にやり、と笑って、

「なァ、リルケ・ゴール。お前、このままだと、『ix]憐れな山羊』だぜ。今から、〈救世主〉たる[x]ダイレン・カリアさんの部屋に行かないか？ お前にも、『新しい名前』が必要だ」

と言いました。

私は内心、あの謎の男の名前は、ダイレン・カリア、と言うのか、と思いつつ、

「…わかった」

とだけ、一言、呟きました。

-
- [i]宮倉このはさんの『黎明の騎士』内より引用。
 - [ii]衣良弛雨さんの『つりいきのさきあと』より引用。
 - [iii]トオノキョウジさんの『ウルタールの黄昏』より引用。
 - [iv]はたけやまさんの『萌えっ子もんすたぁ』内より引用。
 - [v]丸山宵未さんの『桜の白雪』内より引用。
 - [vi]ダークボーイさんの『都市異世界シリーズ』の『this midnight』内より引用。
 - [vii]水月さなぎさんの『シルバークラウド』というタイトルを変形して、引用。
 - [viii]クロエひなたさんのペンネーム自体を、変形して、引用。
 - [ix]千限伝鉄さんの電子書籍『憐れな山羊』というタイトルより引用。
 - [x]雨宮しづれさんの小説サークル『ダイレンカリア』という名前を、変形して、引用。

第三章

「――そこらあたりにいろよ」

謎の『記憶喪失者』たる男、ダイレン・カリアが居座っている部屋の様子は、一度目に見た時と随分様子が違っていました。

まず、前回とは違って、その部屋には、三、四人の男女の『信者』と思われる人々が座っておりました。それぞれ、ソファに寝そべったり、雑誌を読んでいたりと、まるで自分の家かのようにくつろいでおりました。

そして、何より、デリタ姫の様子が、前回にも増して「おかしく」なっておりました。部屋に入った途端、私はデリタ姫と目が合ったのですが、彼女は私に微笑んでくれました。しかし、その「笑顔」は、『解体』前に、一緒に二人で冒険していた時とは違い、「万人に平等に振る舞う笑顔」のように見え、一つつまり、ひどく「虚ろな笑顔」に見え、極端に言えば、まるで「自分自身がここにいることに気づいていない」かのような、「病的な笑顔」でした。

いや、そんなことより、何より、私が驚嘆したのは、例の謎の男の変化に対してでありました。

謎の男は、――以前のように意味不明に怯えることはなくなり、きわめて「落ち着いた態度」を見せるようになりました。加えて、この部屋に続々とやってくる、いわゆる『信者』たちに対しても、決して横柄には振る舞わず、平等に優しく扱っているようでした。さらに男は、以前とは違い、白い〈村人の服〉を着ておりました。この〈村人の服〉は、この元〈タブラ・ラサ村〉の住人が一般的に着用する服であり、それを着用することによって、この正体不明の、『記憶喪失者』の男が、まるで最初からこの元〈タブラ・ラサ村〉の住人かのように見えてくるのでした。……それを見て私は、「お前は、この村の出身じゃないだろう」

と思いましたが、すぐに、男に言われた、

「オマエ……コソ……ダレダ。――オマエ……コソ……ドコカラ……キタ」

という言葉が目の前に現れ、私の、そんな浅はかな思考は、砂のようにいとも簡単にかき消されてしまいました。

「――さ。お前も、早く、『新しい名前』を、与えてもらえよ。ほんと、簡単なんだから。今日だって、20人くらいが、『新たな名前』を、この方から貰ったんだぜ？」

奇妙なことに、ヤマブキ曰く、謎の男は、以前、ヤマブキたち、ジャンキーが面白がっていた、「名づけのゲーム」とでも言うべきものを、来訪客たちに向けて続けているようなのでした。この謎の男に会い、会話を交わした者は、謎の男から、様々な『新たな名前』で呼ばれるようになっていったそうなのです。

例を出せば、キリがありません。[i]シノハラ・イオリ。[ii]コ・ダマー。[iii]タダノ・ケイ。[iv]ミレイ・ユウ。……などなど、矢継ぎ早に、彼ら『信者』たちに、『新たな名前』を与えることで、どんどん『信者』を増やしていった、というわけでした。

そんな中、私一人が、この『ファンイールの村』の中で、ただ一人、ぽっかりと浮いている存在のように感じられ、次第に不安が募っていくのでした。

――理由は言わずもがな、謎の男が、私に言った、例のあの「発言」のせいなのです。

「オマエ……コソ……ダレダ。――オマエ……コソ……ドコカラ……キタ」

ヤマブキは、キッチンからワイン・グラスを持ったデリタ姫と共に、部屋にすずすと戻ってきました。そのワイン・グラスには、どす黒い血のような液体が入っておりました。

「ああ、これは、どうも」

そう呟く自分の声が、自分自身でも、ひどく遠い他人事のように感じられました。……どうしたんだ、僕は？ ……この異様な雰囲気の影響され、自分を見失っているのか？ ……そう思えば思うほど、なぜかしら、この〈村人の服〉を着て、目をつむって、ぶつぶつと呟いている、謎の男の方を、不可抗力的に、見たくなくなってしまうのでした。……ああ、この男は僕を操ろうとしている…。僕を、『信者』にしよう、と画策している…。

私は、この謎の男をじっと見つめ続けましたが、その実、なにを、どう言ったらいいのか、全く分からないのでした。……しばらく私が洗面をして黙りこくっていると、デリタ姫が、れいの「虚ろな笑顔」でもって、

「この人ね。『記憶喪失者』って言ったけど、実はちゃんとした名前があるのよ。この人の名前はね…」

と言いかけると、謎の男の方を振り返り、男の顔を見ました。男は、虚空を見つめ続けながら、ゆっくりと口を開きました。

「――私の名前はコトバだった」

その言葉を聞き、デリタ姫と、ヤマブキは、微笑を浮かべて拍手致しました。まさしく『信者』という言葉がぴったりにくるような、例の「奇怪な笑顔」で、です。その「笑顔」が、私自身を、さらに腹立たせるのでした。

「……すみませんが、コトバ、なんて名前、この世界にない、と思うんですけど。どこから、コトバ、なんていう自分の名前を、思い出したんですか？」

男は虚空を見つめたまま、

「――私の本当の名前は、リルケ・ゴールだった」

と今度は、全く違う名前を、――しかも、私自身の名前を名乗りだしたではありませんか。

私は余りの滅茶苦茶な対応に少し苦笑しながら、

「…ちょっと、待ってください。それは、さすがに、おかしいですよ。なぜ、僕の名前とあなたの名前が同じなんです？ どういうことですか？ なんの根拠もない、滅茶苦茶な、妄言じゃないですか」

と詰問致しました。

すると男は、

「――では、お前の名前は、どこから貰った？」

と呟きました。

……私は、（きたな！ また、この手だ！）と内心、思いました。――自分自身の「起源」を問う、あの「やり方」だ。キルケ・ゴールという、この、私の「名前」はどこからきたのか。それは、『分類』によってコントロールされていた世界においては、「両親がつけたに決まっているだろうがっ！」と自信を持って断言できたでしょうが、……この『分類』の存在に気づいてしまった後の世界においては、「自分の名前」が、誰から（おそらく〈創造主〉でしょうが）与えられたのか、はたまた、どういう理由で名付けられたのか、知るすべは全くないのです。

が、今度という今度は、私も躓きませんでした。

「……確かに、『僕の名前』の『起源』も、この『分類』の世界においては、『証明』することは出来ないでしょう。――でも、それは、あなたも同じことでしょうか？ あなただって、コトバ、というのが『本当の名前』である、と言い切れる『起源』なんて、ないはずですから」

などと、いくぶん興奮して、捲し立てるように、そう詰問したので、私の不安からくる怒りを止めるために、まず、ヤマブキが微笑しながら私に向かって、

「――まァマァ、そう興奮するなよ。『新しい名前』を貰えれば、今みたいに、怒ることもなくなるんだぜ？」

と言い、矢継ぎ早に、デリタ姫が、

「落ち着いて聞いて、キルケ・ゴール！ この人は、当てずっぽうに、なんの『根拠』もなく、発言しているわけではないのよ！」

と私を制止してきました。

「……どうのことだい、デリタ」

「……だって、この人、集まってくる人たちの過去と未来を『予見』できるのよ？ ――たとえば、ある他の村から来た女の子に対して、『十年前だった。青い光のスカートを履いていた』と言ったら、その女の子は、『十年前、私は魔法使いだっから、テカテカに光るスカートを履いていた。嘘みたい。本当に、当たっている』と言って、泣いてしまったことがあるのよ？ さらに、この人を信頼したその女の子は、もっと積極的に質問をし出したの。『――実は悩んでいることがあるんですけど…』 そうしたら、この人は、すぐに答えたの。『……冬だった。随分前から分かっていた。あなたは痴漢された。男に恐怖を抱くようになった』――その『予見』も、物の見事に『当たって』いたの。それからというもの、その女の子は、すっかりこの人のことを〈救世主〉として、信じてしまったの」

「――なるほどね。『過去』のことを『当てる』ことが出来るのは分かったよ。だけど、『未来』のことは、分かっていないじゃないか」

すると、しばらく沈黙していた男が、ゆっくりと口を開き、

「――ぶつかった」

とだけ、呟きました。

その言葉が呟かれた直後、――短くタイヤのきしむ音がし、乾いた衝突音が、部屋中に響きました。私は殺気立って窓に走り寄り、ブラインドの細いプレートを押し下げ、下の道路を見ると、狭い道路に一台の車が停まっており、その前に倒れた二人の青年がおりました。青年は、車の主である男に向かって、野次っておりました。

私は、息を飲んでその光景を見たあと、しばらくの間、頭の中がぐるぐるんに混乱してしまいました。……男は今さっき、ぶつかった、と言った。突然、男は、確かに、ぶつかった、と呟いたのだ。……しかも、それはブレーキの音がする直前のことだった…。

この男は、本当に、『予見』が出来る〈救世主〉なのだろうか？

……いや、待て、待て。単なる「偶然」かもしれない。あいつは目が見えない分、聴覚が優れているに違いない。だから、僕らよりも、先にブレーキの音を聞くことができたのだ。……そうに、違いない。

それに、ぶつかった、なんて言葉は、なんとでも「解釈」できる、「詐欺師」がよく使う言葉じゃないか。——例えば、この場所で僕が、この謎の男と口論し始めた、とすれば、対立した、つまり、ぶつかった、ということになるだろう。

男は、

「——やはり、私は〈救世主〉だった」

と呟きました。そして、周囲の『信者』たちも、そうだ、そうだ、今の事故のことも完璧に「予見」していた、とはやし立てました。

私は独り、

「いや、違う！」

と反発しました。

すると男は、天を見上げて、やがて、

「——お前は、私のニセの記憶を作らせた。しかし、そのおかげで、本当の記憶が戻った。お前こそが、真の〈救世主〉だった」

と声のトーンを下げて、呟いた。

僕が〈救世主〉だと!? 私は思わず激昂して、

「な、なぜ、俺が〈救世主〉なんだっ!! 確かに、以前、『分類』によって規定された『世界』を『解体』したさ。それに、……デリタを救った、という意味で〈救世主〉だ、と言われれば半分は当たっているかもしれない。が、半分は間違っている! なぜなら、『分類』後の『この世界』において、デリタを救ったのは、他でもない、あなたじゃないですか！」

と喉が涸れるほどの勢いで、謎の男にまくしたてました。

が、謎の男は、私の言葉を全く黙殺して、

「——お前こそ、真の〈救世主〉だった。——〈解体屋〉のお前こそ、この世界の〈望〉だった。自ら進んで〈月を亡くした王様〉だった」

と続けました。

私は、……〈望〉!? なんだ、この世界の、〈望〉だった、とは? なんだ、〈月を亡くした王様〉とは? と、またしても、男の呟いた言葉に対して、自ら進んで「解釈」し始めてしまいました。

……〈解体屋〉の俺?

あっ!

ま、まさか。〈望〉という、「言葉」を「解体」してみろ、という「意味」なのか? 〈望〉という言葉バラしてみると、どうなる? ——あっ。〈月を亡くした王様〉になる……。——となると、自ら〈月を亡くした王様〉とは、どういう「意味」なのだ? 〈月〉は〈見守ってくれるもの〉の象徴だ、と考えるのが、妥当な考え、とすると、〈月〉とは〈女性〉のことか? つまり、この場においては、「デリタ姫」のことか? ——となると、〈月を亡くした王様〉とは、〈デリタ姫を失った哀れな英雄〉といったところか。ひいては、〈進んで自らのことを証明する手段を亡くしたくせに、独り、王様のように威張り散らしている哀れな男〉という、奴なりの「皮肉」か。

……そう考えると、「当たらずとも遠からず」ではないか。

事実、今の俺は、自ら進んで『分類』の世界を外した挙句、「自分が何者か?」分からなくなり、この、目の前の、『記憶喪失者』の男に、「自分が何者なのか?」という「問い」の「答え」を必死で欲しがっているようなものだ…。「自分が何者なのか?」の「根拠」がはっきりとしていれば、こんな、なんの根拠もない男の「言葉」に、いちいち反応する必要もないのだから…。

そんな風に男の「言葉」の「闇」に飲みこまれそうになりながらも、私の中の私は、「いや、違う!」と執拗に叫んでいるのでした。

私は、今は、その「いや、違う！」という、内心の叫び一つにすがりながら、男に向かって必死の抵抗を試みるのでした。

「……まあ、僕の話は、どうでもいいですよ。〈月を亡くした王様〉でも、なんでも、構いません。そんなことより問題は、あなた自身が『何者なのか？』という、一点ですよ。――これまでの話を総合してみると、あなたは、色々と自分自身の名前を変えていらっしゃる。そんな人に、『新たな名前』を貰ったって、本末転倒だ。あなた自身、『自分が何者なのか？』の、確たる『根拠』がおりないのでしょうか？ それがないければ、もう、あなたには用はない」

そう問い詰めると、男は目を閉じたまま、

「――私は[v]二人の鍵王として生まれた」

そう宣言するように、意味不明なことを言って、一度大きく息を吸い、男は再び天を見上げて、何かを「幻視」するように、閉じた目のまぶたを震わせたのち、今度は物凄く長く、支離滅裂な「自分の身の上話」を次のように語りはじめました。

「――[vi]時は2492年。[vii]四大陸からなる世界の中心には、果てしなく広い海が広がっていた。そこは、[viii]誤解が誤解のまま、正解にされる世界だった。私は、最初、[ix]クボ・ゲンという名前と呼ばれていた。[x]私には性別がなかった。それから私は、[xi]『ひょんなこと』から出会った、猫耳メイド姿の娘である、[xii]ウエルチの手によって、『異世界』へ連れて行かれることになった。[xiii]私は独り、その『異世界』の大木連なる樹海を彷徨っていた。水を求めていた。樹海の奥へ行くと、そこには老いたドラゴンがいた。だが、盲目の私には、そのドラゴンの姿は見えなかった。……何かが、[xiv]闇の向こうに小さく在った。それは金色の光の扉だった。光はどんどん流れ込んできた。すると、再び、私は違う『異世界』に召喚された。召喚先は、[xv]なんと火の海の中であった。そして当然、10秒も経たないうちに、私は死んだ。同時に、それは私が[xvi]もう一度生まれ変わるために必要な過程だった。私はそう予見した。そして、事態は事実、その通りになった。……目覚めて、記憶を失いかけた私に、[xvii]DNA研究者である、ヨコベ・シンゴは言った。[xviii]『――覚えているだろう？ 君の親友であり、戦友でもある、元E班所属No.1004、エミーリア・ハミル・ユールコレットについてだ』と。それからの私はマウスだった。[xix]アイテム『PNT』の実験台として、投下された、最初のマウスだった。私は仮の名前として、[xx]ちよこ、と名付けられていた。[xxi]私は電流を嫌い、やがて電流が流れるスイッチの音が流れると、すぐに隣の部屋に逃げようと試みた。だが、真ん中の仕切りは呆気なく閉じられてしまった。結局、流れ来る電流の痛みを耐えるだけ耐えて、最後には、[xxii]寝台に上体を預けて寝そべる私の瞳から意思の光が消えていった…。それは何度となく、繰り返された。そのたびに、私は『[xxiii]私をここから出してくれ！』と叫んだ。が、[xxiv]それは届かない叫びであった。なにせ[xxv]あの頃の私はずっと小さかった。だが、そんな実験台としての時代にも終りがやってきた。それも私の予見した通りだった。[xxvi]科学バカである人類に、前人未到の科学の力が降りかかったのだ。[xxvii]アリソン・クレーターが出現した。あの日を境に、様変わりした、この世界を肉眼で確認することが出来た人類は、数えるほどしかいないことだろう。大地はめぐり取られていた。謎の突入体との衝突による膨大な運動エネルギーが、数十万トンの土砂を辺り一面に吹き飛ばした。[xxviii]時の欠片は言った。『[xxix]人類が犯した罪は、人類に果たしてもらおう』と。『[xxx]ロトさん。やっと名前を呼ぶことが出来ました』という女性の声で、私は意識を取り戻した。それが[xxxi]謎の女性『W』との出会いだった。――そして、[xxxii]私は16歳になった。その世界では、それが成人と認められる年齢らしいことを知った。やがて、私は『[xxxiii]すいどう会』という高校に入学した。[xxxiv]高校に入れば、いじめはなくなる、と言われた。[xxxv]猫又先生も『[xxxvi]墜落する飛行機に乗る確率と同じで、それは宝くじで一等を当てるよりもずっと低いよ』と言われた。が、私の不安は的中した。が、結局、私をいじめてきた輩と一緒にクラスになったのだった。そんな私に救いの手を差し伸べてきたのが、美人で、秀才の、ユウキ・ミナギ、その人であった。それは私に新しい世界を予感させた。彼女は『[xxxvii]花が咲くチャンスはまだある。今度こそ咲いて欲しい』と私に言った。[xxxviii]学校では、とある噂が出回っていた。それは、キツネのコスプレをした美少女が枕元に立つ、というものだった。事実、その美少女は、私が予見した通り、私の枕元に現れた。その美少女の名前はアヤメといった。アヤメは『異世界』から来た妖怪であった。さらに、私と会うために半ば駆け落ち同然でこの世界にやって来たらしく、そんなアヤメを取り戻すために、その『異世界』を統治する[xxxix]室恋王から、様々な刺客が送られてくる、というのだ。しかし、それでも私は彼女に恋をした。私と彼女はしばしば『[xli]てんやわん屋』という喫茶店でデートをした。そのマスターたる[xlii]オーガスタ・マディアンは、しばしば『[xliii]雨宿りくらい、穏便になさって下さい』と私たちに言った。[xliv]彼女と一緒にいるだけで、十分だった。それだけで、十分なはずだった。だが、[xlv]愛があるからと盲目になりすぎている私は、愚かな囚われ人だった

。それは『xlivお伽噺のようなもの』であった。ゆえに、私は未来の終りを知っていた。[xlvi]私は彼女に聞いた。『この世界は楽しかったのか』と。彼女は答えた。『楽しかった』と。少女を見送りながら、私は思った。これからもずっと、彼女は『観測』を続けていこう、世界の終りがくるまで、と。――その後の記憶は、曖昧だった。何度も、『この世界』の始まりと終わりを体験した気がする。そして、それは『xlvii]笑えるようで笑えない話』だった気もする。その後も予知夢もよく見た。全部当たって、怖かった。が、ここに来て、怖くない夢を見た。ある爽やかなキルケ・ゴールという青年に、誘われて、ここに来た。その青年は、私を裏切ってばかりだった。しかし、その青年によって、私は私の名前を持つことができた…」

そう男は語り終わると、周囲の『信者』たちは、私、キルケ・ゴールの方を見て、「やはり、彼が〈救世主〉だった！」

と大声で叫び出しました。

――私はその男の「身の上話」と、その『信者』たちの声を聞いて、頭がおかしくなりそうになり、思わず、ああ、という、うめき声を上げてしまいました。

いいえ、分かっているのです。

こうして、長々と語った謎の男の「身の上話」である「過去の記憶」は、本当の男の「過去」ではなく、――この、おそらく何度となく、「転生」を繰り返してきた、これまでの〈ライト・ノベライズ王国〉で起こったであろう、ありとあらゆる古今東西の「物語」を繋ぎ合わせて創り出した、「ニセの記憶」である、ということ。

この謎の男は、おそらく、私が『分類』を外した、以前の『世界』はもちろんのこと、何世代にも渡って『分類』の『世界』を見て来たのしょうから、これだけの「物語」の「パターン」のほぼ全てを「引用」し、「切り貼り」できても、おかしくはないのです。

しかし、そんな「根拠」のない、「ニセの記憶」だと分かってはいても、私には、男の「過去」を完全に否定することも出来なかったのです。

なにせ、私自身も同じく、「私が私であること」の「根拠」を「証明」できていなかったのですから――。

それでもなお、私の中の私が、執拗に、次のように、叫ぶのです。

『いや、違う』

――と。

[i]秋雨さんの『紫水晶の回帰』内より引用。

[ii]詩人のkodamaさんの名前自体を、変形させて、引用。

[iii]タダノケイさんのペンネーム自体を、変形させて、引用。

[iv]栗生さんの『身代わりの花嫁は侯爵に溺愛される』内より引用。

[v]佳春さんの『二人の鍵王』より引用。

[vi]明久さんの『candy floss the side.』内より引用。

[vii]立花祐さんの『wild sky～彼らを繋ぐ世界の空～』内より引用。

[viii]「不透明な薔薇の王冠」から、ゆいと。よりさんの『透き通る世界』内より引用。

[ix]久保元さんのペンネームを、変形させて、引用。

[x]みなみさんの『私には性別がありませんでした』より引用。

[xi]山鳥居さんの『星々の集う魔法王国』内より引用。

[xii]藍原ソラさんの『valentia』内より引用。

[xiii]小野大介さんの『目に涙がなければ魂に虹は見えない』内より引用。

[xiv]彩塚遊さんの詩集『賢人と愚人』内より引用。

[xv]裸エプロン閣下さんの『この素晴らしい不死者に祝福を！』内より引用。

[xvi]祐夢猫世乃さんの『四煌の顕現者』第2部内より引用。

[xvii]Kamocoさんの『主人公 横辺凜伍の継がれる正義』内より引用。

- [xviii]おかかおにぎりさんの『空のごとく青き春 第四話』より引用。
- [xix]暴走紅茶さんの『ストップザワールド』内より引用。
- [xx]ちょこさんのペンネームをそのまま引用。
- [xxi]四面楚歌さんの『見えない胎児』内より引用。
- [xxii]独身貴族さんの『悪の組織の女幹部に墮とされた戦隊ヒーロー1』内より、変形させて、引用。
- [xxiii]月見呆一さんの連載小説『私をここから出してくれ!』のタイトルをそのまま引用。
- [xxiv]此溪和さんの『魔女が謳う絶対週末』第四章のタイトル『トドかないサケビ』を、変形させて、引用。
- [xxv]長月さんの長編小説『サハラ・セレクトダブル〔4〕』内より、変形させて、引用。
- [xxvi]Au39さんの『双子のパラドックス』内より、変形させて、引用。
- [xxvii]Raiphさんの『パッシヴインフォメーション』内の第一話『降って来た空』内の第一話より引用。
- [xxviii] kaoさんの『月の欠片の道しるべ』内より引用。
- [xxix]河野る宇さんの『repair』内より引用。
- [xxx]トトさんの『サザンの嵐』内より引用。
- [xxxi]祥乃さんの『あやつり糸』内より引用。
- [xxxii]阿呆論さんの『artist fantasy』内より、変形させて、引用。
- [xxxiii]J.p フリーマンさんの『すいどう会』より引用。
- [xxxiv]黒夜白月さんの『黒白マーブル』内より、引用。
- [xxxv]まりあの小説さんの『猫又先生』という作品タイトルをそのまま引用。
- [xxxvi]水崎りおんさんの『クレセント』内より、変形させて、引用。
- [xxxvii]明智ひなのさんの『春よ、来い。』内より引用。
- [xxxviii]いべちゃんさんの『もふなでっ!』内より、変形させて、引用。
- [xxxix]ランプライトさんの『室恋王』という作品タイトルをそのまま引用。
- [xl]まるだまるさんの『帰路』内より、引用。
- [xli]天野音色さんが創られたキャラクターである、オーガスタとマディアンの名前を、変形させて、引用。
- [xlii]七村圭さんの短編小説『雨宿くらい穏便になさって下さい。』という作品タイトルを、多少変形させて、引用。
- [xlili]Aliceさんの『とある少女の夏祭り』内より、引用。
- [xliv]ちよさんの詩『薔薇の刺』より引用。
- [xlv]美黒さんの『それはお伽噺のようなもの』という作品タイトルをそのまま引用。
- [xlvi]電波創造者ダイキさんの『memory ～カケラ探し～』内より、やや変形させて、引用。
- [xlvii]婆雨さんの『笑えるようで笑えない話』のタイトルを引用。

第四章（終章）

外に飛び出してから、もう何時間歩いたのかも、どの方向に向かって歩いたのかも、まったく判別できない、巨大な闇の中を、ひたすらに歩いておりました。

『――いや、違う』

その一言だけを脳内でずっと呟きながら。

そんな時空の遠近感を失ったまま、ひたすらに歩いているうちに、私の足は導かれるように、喫茶店『プレジュ・ラ』へと向かっていたようでした。自然と喫茶店『プレジュ・ラ』に入っている自分に気づくと、一瞬、なぜだか、久しぶりに我が家に帰ってきたような気分になりました。

そして、店の奥まった窓際の席に、なぜかしら、例のヒロユキが、ぼつんと座っていました。

驚く能力を失ってしまった今の私は、そんな異様な光景と出くわしても、（やっぱりな）と思うだけで、何一つ、疑いを抱きませんでした。まるで今日、この日の、この時間帯に、この店に、ヒロユキがいることが、あらかじめ決められていたことのように感じられても、なんの「不自然さ」も感じなくなってしまうのでした。

そして、以前〈ヤケノハラ〉の街のカフェで相席した時と同じように、ヒロユキに相席を求めました。しかし、以前とは違い、今の私は彼に対してなんの気兼ねもなかったので、一言、

「――悪いけど、相席するよ」

としか言いませんでした。

するとヒロユキも、私と目を合わせることもなく、相変わらず、『大型のメディア端末』をいじりながら、飄々とした態度で、

「――ああ、どうぞ」

とだけ返しました。

私はウェイトーの人を呼び、「――とりあえず、水を一杯、もらえますか？」とだけ告げたあと、はあ、と大きなため息をつき、顔を両手で覆い、

「……ヒロユキさん。今、この村で、――いや、この世界で、起こっている事態、御存じですよ？」

とヒロユキに話しかけました。

ヒロユキは、淡々とした口調で、

「――ええ。僕も少し面白そうだから、見に来たんですよ」

と答えました。

私は顔を両手で覆ったまま、また一つ、大きなため息を吐いてから、

「……正直に言います。少し前から、『記憶喪失者』の謎の男が、この村の宿屋に居座って、いつの間にか〈救世主〉と皆から崇め立てられて、以前から付き合いがあった奴もそうでない奴も、あつと言う間に、その謎の男の『信者』になってしまったんです…」

「――ええ。そこまでは知っていますよ」

「……挙句、その謎の男に、僕が『お前は何者だ？』と問いかけたところ、むしろ、『お前こそ何者だ』と返され、そう問われると、確かに『自分が何者なのか？』が分からず、いや、分かった、としても、その『根拠』がなく、『証明』できないので、大変動揺しているんです…」

ヒロユキは相変わらず『大型のメディア端末』を注視しながら、飄々とした調子で、

「――それは、あなたが『この世界』の『分類』を外してしまったからでしょう？ あれだけ忠告したのに。ふふふ」

と言って、嘲笑しました。

「……おっしゃる通りです。それについては、自業自得だ、と反省しています。でも、このままでは、例の謎の男がなんの『根拠』もなく創った仮の新たな〈分類〉によって、『この世界』が規定されてしまいます。僕もついさっき、『お前こそ救世主だった』などと、とんでもない〈分類〉を当てはめられそうになりました。……なんとかして、あの謎の男を、この村から追い出す手はないでしょうか？」

「――う～ん、それはちょっと語弊があるかなア」

「ど、どういうことですか？」

そのとき、間の悪いタイミングで、ウェイトーが水を持ってきました。私はその水をごくごく煽るように飲みほしま

した。

ヒロユキは、そんなことは我関せず、とばかりに淡々とした調子で語りだしました。

「――その謎の男は、皆の偽りの過去を背負って、それを浄化するのだから、いわば、『イエス・キリスト』のような存在なのでしょう？　ということは、彼はもうすぐ逃げますよ。それこそ正体不明のまま、ね。『イエス・キリスト』の物語になぞらえると、死ぬ、ってところですかねえ」

「……逃げたからって、どうなるっていうんです？」

「――『イエス・キリスト』が死んでから『神格化』されたように、〈救世主〉である彼が、この村から突然去ったら、その『信者』さんたちは、やはり、『都合のいい解釈』をして、その謎の男を『神格化』することでしょう。突然いなくなることによって、かえって、その謎の男の影響力は強まってしまう、ということです」

「……『洗脳』は解けないまま、むしろ、『強化』されてしまう、というわけですね…」

「――でしょうね。もっと根本的なところから言えば、あなたが『この世界』から『分類』を『外し』てしまったことで、皆が、『自分は何者なのか？』という、根本的なアイデンティティを失ってしまった、そんな折に、正体不明の男が現れ、皆に、なんの『根拠』もない『新しい名前』を授ける、という仮の〈分類〉ゲームを始め出した結果、良かれ悪しかれ、その適当な『新たな名前』という仮の〈分類〉によって、多くの人が救われている、わけですよ？」

「……何が言いたいんです？」

「――つまり、元を正せば、やっぱりあなたこそ、『この新しい世界』を産み出した〈救世主〉なんじゃないでしょうかね」

「だから、違いますよっ!!　僕は〈救世主〉なんかじゃない!」

「――では、『何者』なんです？」

「……これじゃ立場が逆転して、まるで僕が『解体』されているみたいですね。ふん。…まあ、でも、正直に言います。それが分からないんです。『自分が何者なのか?』分からないんです。だから、あの謎の男が言うことも、絶対的には否定しきれないし、あの男に『質問する』ということは、『自分は何者か?』の『起源』をあの男に求めている、ということになるので、問いただすこともできない…」

「――まあ、確かに、『名前』だって〈創造主〉の『分類』によって与えられたものですから、『自分が何者なのか?』の『証明』にはならないですものね」

「……そうなんです。逆に聞きますが、ヒロユキさん、あなたは『何者』なんですか？　あるいは、なぜ、『自分が何者なのか?』と、悩まないでいられるのですか？」

「――ははは。その答えは、実に単純なものですよ。僕は僕だ、と思っているからです」

「……!!」

「――いや、何も僕だけではないですよ、別に。――例えば、あなたにだって、『自我』があるじゃないですか、『この私』という、『自我』が」

私は真顔で黙り込んでしまいました。なるほど、と思ったのであります。

「――その謎の男から授けられた仮の〈分類〉たる『新たな名前』になんか頼らないで自分らしく生きていきたいのなら、そう割り切ってしまった方が、早道だと、僕は思いますけどねえ」

そう締め言葉を言い終わると、ヒロユキは『大型のメディア端末』を注視したまま、すくっと立ち上がり、背を向け、ぶつぶつ、面白いなあ、面白いなあ、と一人呟きながら、そそくさと店を出ていこうとするではありませんか。私は、またおごらせる気だな、と思い、去って行こうとするヒロユキの背中に、

「ちょっと!!　また、僕におごらせる気ですか!?!」

と言葉をぶつけました。

ヒロユキはその言葉に振り返り、飄々とした微笑でもって、

「――人生相談の受講料ですよ。あなたの人生相談に乗ったんですから。それに、僕が頼んだアイス・コーヒーは160スケールです。それが、人生相談の受講料だと思えば、安いもんだ、と思いませんか？」

と言ってきました。

私は一言も返せず、

「……まあ、確かに、そうですね。分かりました。あなたの分も、払っておきますよ、ありがとうございました」

と言い、頭を下げました。

ヒロユキは、その私の姿を見て、なにを思ったのか、次のようなことを言い残して、店を去っていきました。
「――リルケ・ゴールさん。特別に、受講料なしで、ヒントを教えてください。その、僕が頼んだアイス・コーヒーは、本来、160スケールではないんです。アイス・コーヒーが160スケールになったんです。……分かりますか？ 例えば、『 $2+4=6$ 』も、〈く+〉という〈記号〉を〈 \times 〉として反応せよ」という『ルール』を『規定』しておけば、『 $2+4=8$ 』になってしまうのが、〈分類〉の「本質」なんです。――それでは、また」

私はすっかり救われた気持ちになり、以下のように思いました。
〈創造主〉がいる・いないに関わらず、〈分類〉がある・ないに関わらず、『この私』は絶対に残るではないか。
そうか。
『この私』という『自我』のみが、『この世界』における『最初で最後の質問』であり、『最初で最後の答え』なのだ。
僕はバカだ。
『この世界』から『分類』が消え去り、あの男が現れ、僕に『新たな名前』という、仮の〈分類〉を与えて『洗脳』しようとしてきた。そして、男が与えてくる仮の〈分類〉に、僕自身、勝手に「物語」を見出しては、勝手にその「物語」に「解釈」を与え、勝手に混乱してきただけの話だったのだ。

だが、実際は、そのつど、僕は自身でも知らないうちに「答え」を言っていたのだ。
――『いや、違う』と。
この『違う』という、内心の「疑い」こそが、どんな仮の〈分類〉にも「回収」されない、唯一のアイデンティティーではないか。

例え、自分の『名前』に『根拠』がなくても、『出自』（どこから来たのか）に『根拠』がなくても、『役割・職業』に『根拠』がなくても、一向に構わないのだ。『この私』という「疑い」さえ、失わなければ。
さらに、真に重要なことは、『この私』にあるのではない。『この私』の『この』の方なのだ。例えば、①『私がある』と、②『この私がある』は、違う。①の『私』は、「私一般」の中の一つに過ぎず、万人に当てはまるものだ。逆に、②の『この私』は、単独的であり、他の『私』とは『取り換え不可能』だ。そして、『この私』の『この』には、「個性」や「特殊さ」などの「性質」は一切関係ない。いくら〈偉大な勇者〉だろうが、いくら〈平凡な性格〉だろうが、あるいは、何の特性もなからうが、『この私』の『この』は「取り換え不能」な「単独性」を持っている。

しかし、『この私』の『この』（疑い）には、「積極的に証明できない」という欠点がある。『この私』の『この』は、決して「記述」することは出来ない。どんなに『この私』について「説明」しようとしても、もうその時点で、『私一般』の『私』の「一例」についての「記述」を積み重ねているに過ぎなくなるのだから。

――やがて私は、「なぜ、私はここにいる、あそこではないか？」と「なぜ、ここにいるのが私でなければいけないのか？」という、2つの「問い」まで思考が到達しましたが、その時点で、「考える」のを辞めました。この「問い」を「考える」ことは、今の自分にとっては「無駄」なことだったからです。

――少しばかり流れが急ですが、以上のような経緯があり、私、キルケ・ゴールは、この手記を書こう、と思い立ったのであります。

今となれば、デリタ姫との唐突な別れも、「――これも一つの別れの形なのかもしれない」とさえ、思っております。

あなたが今この小説を読んでいる、ということは、あなたは、この「墓」に刻まれた「墓碑銘」を「解読」できたのでしょう。

私は、「墓碑銘」に、以下のように、「言葉」を刻みました。
『名もなき救世主の墓 〈君は私と同じである〉 ――あなた方に名前を与えた救世主より』と。
こう書けば、「名もなき救世主」＝「私・キルケ・ゴールのこと」だと思ってしまうでしょうし、「君と私は同じである」と書かれてあれば、仮の〈分類〉に満足している彼らのアイデンティティーは揺らぎ、「俺はこいつとは違うぞ!!」と「反発」するに決まっているからです。なにしろ、『解体』後の『その世界』で、謎の男から与えられた仮の新しい〈分類〉など、実際は、決して「強固」なものではなく、『信者』たちでさえ、考えたり、疑ったりすることぐらいは簡単にできるほどの、「軽い影響力」しか持っていないのですから。

そうやって「反発」させておいて、とどめに「あなた方に名前を与えた救世主より」と刻むことで、『信者』たちは、

「待てよ、この墓碑銘は、急に村を去っていった、〈救世主〉様が刻んだものかもしれない！」と思い、結果、私、キルケ・ゴールが書いたものなのか、それとも、謎の男が書いたものなのか、「決定不可能」となり、動揺し、疑い出し、きっと「墓石の裏面」も見ることでしょう。

私は「墓石の裏面」には、こう言葉を刻みました。

「――私の命令に従うな」

と。

これを読んだ『信者』たちは、大いに戸惑うことでしょう。なぜなら「私の命令に従うな」自体が「命令」だからです。「命令に従う」ことも、「命令に背く」ことも、どちらもこの文章においては「矛盾」してしまいます。

さらに、私はこう言葉を刻みました。

「――この文を含め、裏面のここまでの文は、全て虚偽である」

と。

この一文を読んで、『信者』たちは、急に村を去った〈救世主〉様が、同じく、急に村を去った私、キルケ・ゴールの意見を妨害するために、この一文を書いたのか！ と胸をなでおろすでしょう。「なんだ、やっぱり、これまでの文章は、全てウソだったんじゃないか」と。しかし、次の瞬間に、次のような「疑問」が間髪入れずに浮かぶことでしょう。

「ん？ この文章自体が『虚偽』だとすると、『全て虚偽である』というのも『ウソ』、ということになるじゃないかっ！ しかも、ここまでの文、ということは、『――私の命令に従うな』という文もウソ、ということになるっ！ 待て、待て、よくよく、じっくり考えてみよう。『――私の命令に従うな』という『命令』も『ウソ』だとすると、『――私の命令に従わなくてよい』ことになる…。では、「従う必要はない」ということか？ しかし、この一文はきっと〈救世主〉様が、奴の意見を妨害するために書いたはず……いや、それも分からない！ …どっちだ？ どっちが書いたのだ？ ああ、分からない。では、表の墓碑銘は『真』ということなのだろうか？ もし仮に『真』だとしたら、……『――君と私は同じである』は、『本当』ということになってしまうではないか！ いや、違う！ 断じて、違う！ いやいや、待て、『違う』、と「否定」することは、〈救世主〉様を「否定」することと「同義」じゃないか！ ……分からない。『私』とは誰なのだ!?

そこまで考えた『信者』たちに向けて、最後の文章を墓石の右下に小さく刻み込みました。

「――この私の真意を知りたければ、この墓の下に埋まっている手記を読み」

自我.com

<http://p.booklog.jp/book/110466>

著者：ともなりたかひろ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jiga2jiga/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110466>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110466>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ